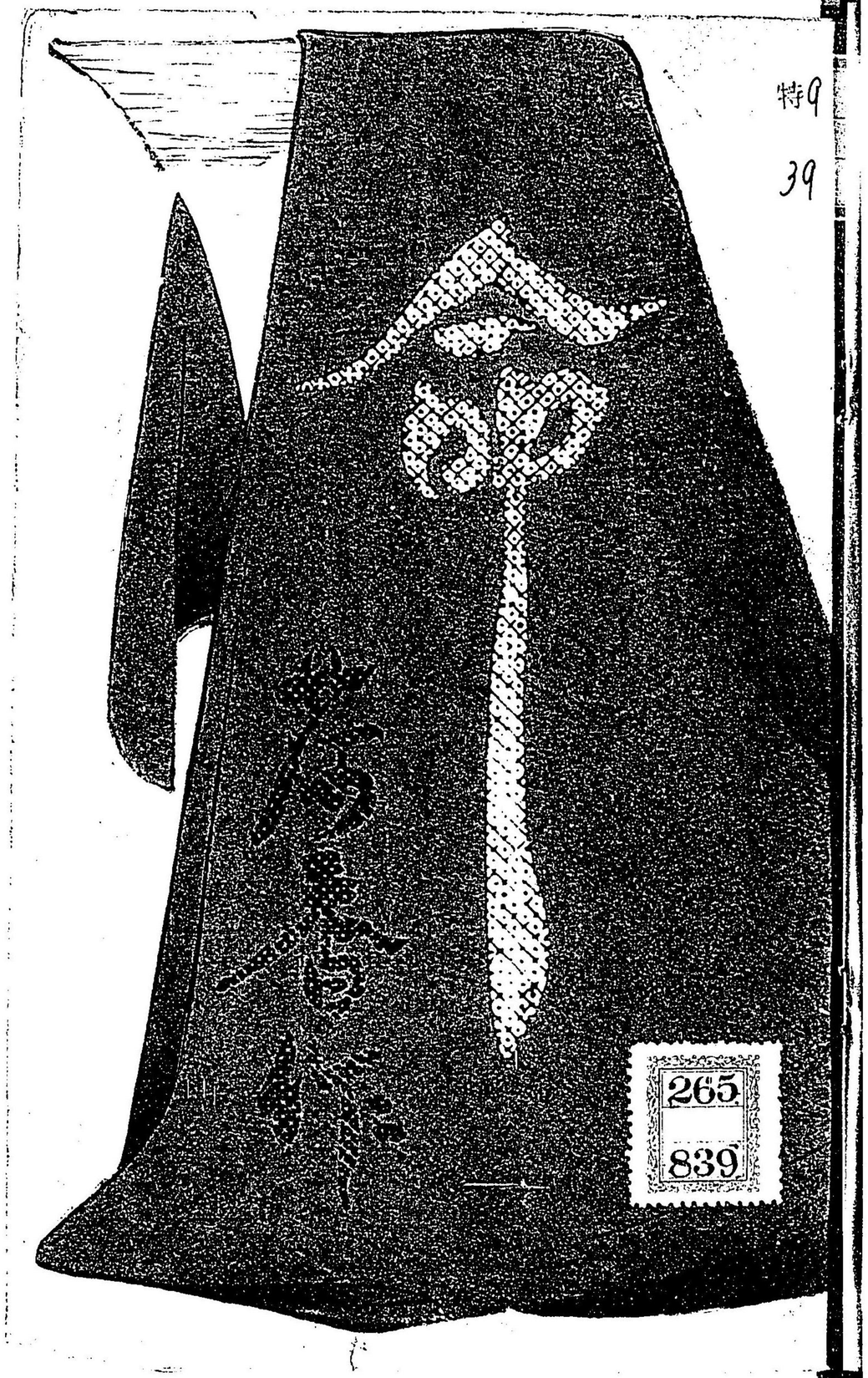
特9

39



265
839

神戸新聞掲載

# 命

羽様荷香著

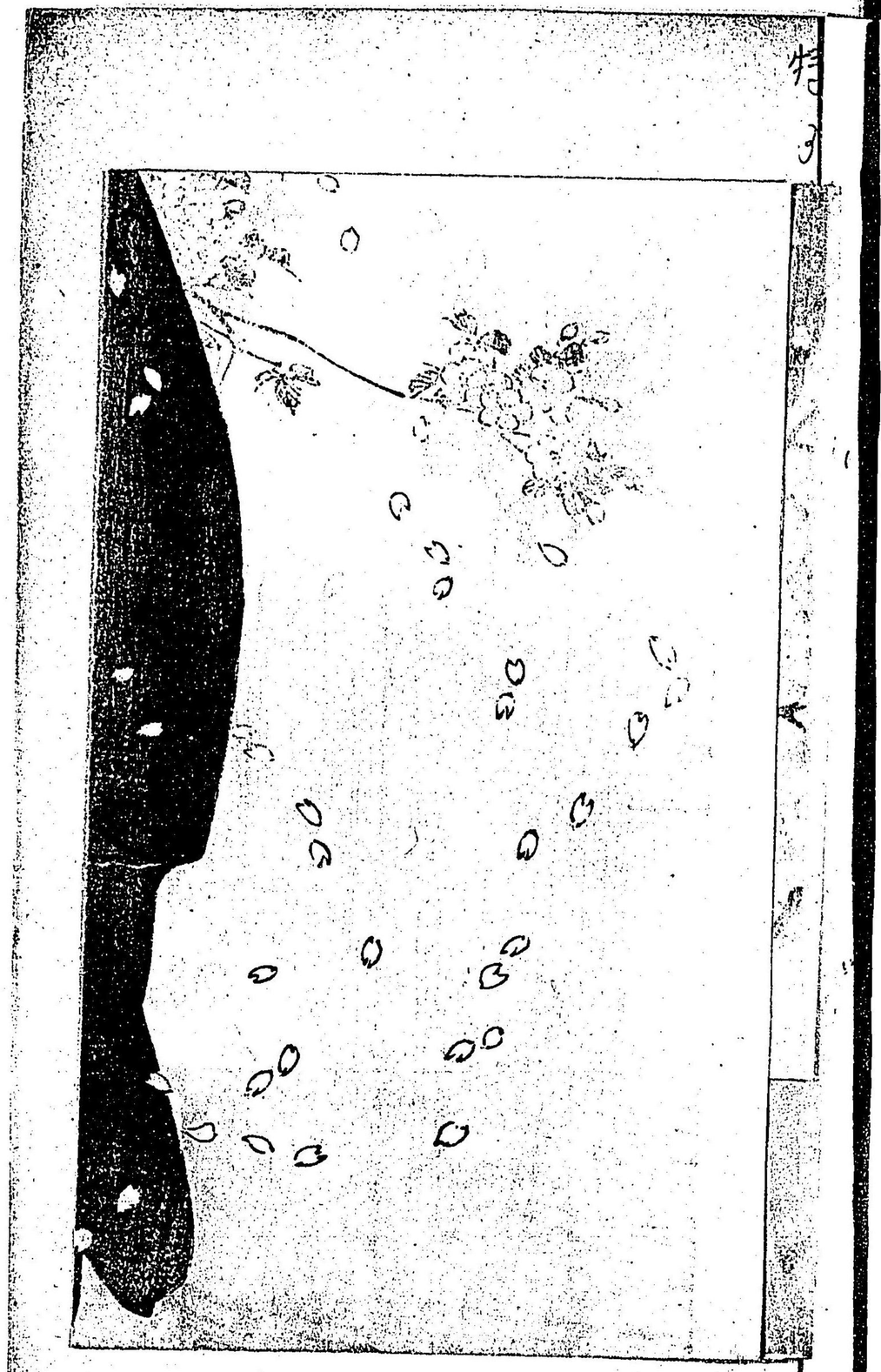
44. 4. 20

神戸新聞掲載

# 一命

羽様荷香著

44. 4. 20



## 隆文舘新刊小說目錄

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 山岸荷葉君著 | 同君著 | 羽根荷香君著 | 同君著 | 同君著 | 同君著 | 中村兵衛君著 | 行友李風君著 | 同君著 | 同君著 | 同君著 | 同君著 | 波邊默禪君著 | 同君著 | 運塚麗水君著 |
| 五人武士 | 命の手巾 | 血染の月輪 | 月の尼 | 俠女水月 | 小事實說狸心中 | 因果經 | 七首藝者 | 雷六郎 | 美人魔子 | 女獅子 | 小事實說怪の怪路 | 銀杏小殿 | 白菊御殿 | |
| 娘系 | | | | | | | | | | | | | | |

隆文舘の小說はどれを讀んでも至極面白い

特9
39

# 命

羽様荷香著

（一）

花の盛りが招待狀で傳はつて、小石川財滿伯爵邸の觀櫻會は例年の如く開かれる、八重一重吉野の春を移した美くしい花の下に、花よりも時めける主人の權勢に憧れて、招待に漏れぬを誇り顏の紳士貴婦人の、歡喜の面を香雪にうたせ、流行の扮裝に、艶麗を競ふて、身も心も輕げに白雲洞を逍遙する、こゝは昔江戸の七名園に數へられ、近い頃までさる大名華族の屋敷であつたが、莫大の黄金で伯爵の所有になり、贅を盡した將軍家に成りの間は、伯爵の夫人富子の居室に當てられて、名工が細工の花欄間に西歐の油繪が掲る、鶯張の椽に上草履が辷り、塗障子に紅ゐの窓帷よろづ調和はぬ光景ながら夫人の趣味には之が叶ひ、護國婦人會幹事、興風會々長の肩書で、今貴婦人界の大達者と呼ばれ、夫義則の君と共に榮華の光りに輝くやうな

身を、邸内では此善美盡した部屋に、外出には輕い馬車に運ばれて、世の中を意に任せぬものなく、暮して居るのである、夫義則は伯爵で貴族院議員といふ外に、これといふ肩書は無いが朝野に夥しい政治家は何ういふ譯か此財滿伯爵を恐いものにして、氣慨のある少數の人は近かぬが、有象無象の大勢は阿諛の及ばないのを恥ぢる位にする、今日の觀櫻會も花の色よりは主人夫婦の晴れた顏を仰いでホッとする、資客が多いのである。

花は悉く今日を曄に咲き盡すかと見ねて、節調面白い樂隊の音色に誘はれ、花帽に散りかゝり絹帽をなぐつて、番附に無い花吹雪の興に歡呼をつくらせる——白妙に、雲も霞もうづもれて、いづれ櫻の梢ぞと、見渡せど八重ひとへ、げに九重の春の空——と怪しげな唸りを、危く顏を埋め相な絹帽の下から漏らして跼めいて來かゝつたのは某老男爵である、床几に腰を掛けたハイカラな若い男は衝と起つて。

『これは溝口男爵閣下で、大分御機嫌の樣子に拜しまする、田村のお諸曲とは時に叶つて傾聽すべきものですな、實に何うも敬服です』

老男爵は譽められて莞爾する。

『ヤア貴公は誰だつけな、エ公民新聞の福田……ア、左樣か、失敬、老人は忘れぼくツてな、俺も耻んで行かう、ドッコイショッ、はつはつはつ花下に記者と語るかね、それにしても貴公諸曲を解し居るのは豪いな、若いに感心ちやテ、何ちやチト俺が敎へて遣らうか』

福田は迷惑を笑ひに隱して。

『ハッ斯道の御高名は承はつて一度伺ひたいと思つて居たところですが、何分その忙がしい職務でその』

『貴公達はそれだから可ぬテ、英雄胸中閑日月ぢや、俺なぞが下の關で高杉晉作の奇兵隊に居た時は、調練の傍ら三味線を習つたものぢや、今の若い奴は忙がしいのを意氣地の無い言譯にするから不可んよ』

豪い者に捉まつたと福田は弱つた顏をしたが。

『御前は餘興の方へ廻しではございませんか、活人畫なぞで大變大仕掛な趣向ださうですが』

『フウム餘興か、餘興も見るさ、だが俺は其活人畫とかいふものが判らんよ、活動寫眞の樣なものかの』

『ツマリ活きた人間で畫面の形を見せるのですな、この番附では伯爵夫人の「阿波鳴戸」とい

ふのがあります、これは見物でせう、あの美くしい夫人が女房に弓に扮られたら屹度受けますよ』

『ホウ左樣すると全然演劇の樣なもんだの、怪しからん、俳優好きの奥樣は到頭女俳優になる心算らしいの財滿も賢い奴ぢやが女房には惚いテ、困つたもんぢや』

『極めて美的趣味を有つたものとして近頃大流行ですからな』

『近頃流行するものに碌な事は無い、貴夫人令嬢を河原乞丐にする流行なぞは、貴公等の緣大の筆を揮つて須からく撲滅すべきぢやないか、實に何うも怪しからん、そして何かい、その當家の夫人が阿波十のお弓になる、阿波十の淨瑠璃は俺も大好きだテ、國次の……かたーな・アのオー詮議イ濟むウまでは、をつとのいのウち助ウけてたべエといふ所は快いテ』

『何も恐れ入ります、閣下は諸藝に御堪能で居らつしやいます』

餘興始めの合圖の煙花が、霞の空に轟いて、紅白幕の彼方の人は雪崩を打つ。



## （二）

觀櫻會の餘興は開かれる、態々大阪から招いた名人の淨瑠璃もある、花の樹の間に煌めく銀色のフリユウト黄金のバスの喇叭、美少年の樂手に依つて奏せらるゝ歐洲樂は、種々の情を衝動かす、霞を駈ける源水の獨樂廻し、美人髑髏と化する天一の奇術、若殿原の運動競技もあれば、新柳二橋の美人連が新曲「佐保姫」の歌舞もある、花と美酒と餘興に醉ふて、來賓は梢に電燈仕掛の紅燈が點る頃を猶歡呼めいて一人も散らぬ、最後の餘興は待たれた活人畫である、これは今日の主人財滿伯爵の夫人富子を會長に頂く婦人興風會員の催し物で、男性的な燥やいだ教育に熱り立つた當代の女性は、茶の湯香花の娯樂では納まらず、何時か流行つて來た活人畫といふものを、會員なる華族の夫人令嬢達と共に今日の餘興に見せてヤンヤと云はせん道樂である、お出入の大呉服店が衣裳背景一切を調達し、金に任せた贅は歌舞伎の舞臺なぞ及びもつかず、鬘や扮裝の爲にはそれ〳〵に御贔負の俳優と藝妓踊りの師匠なぞが付切つて、今日で十日以上も演習に費し、畫題は從來の陳腐い歷史物なぞよりは、イツソ劇曲の世界を見せたら

と、これは富子夫人の發案で、謠題を戲曲十種と名づける「雪」が梅忠の道行「花」が道成寺「梅」のた染久松といつたやうな思ひ切つたもので、白こそなけれ其の儘の演劇の舞臺は、油繪の背景の前に巧みな光線の採り具合で、何んな名優も斯はと思はせる程巧妙に出來て居る。來賓は驚いたり感心したり魂を奪はれて默るもの、興醒顏に呆れる者、種々の批評が低う傳はる。

謠題「邂逅」と記された前に罪集は詰掛ける、白純子に墨繪で那智の遠景を現はした幕がキヤ〳〵と上る、半二が傑作「傾城阿波の鳴戸」で、十郎兵衛の女房に弓が、不意も巡禮姿の我子に鶴に邂逅ひ——見れば見る程稚な顏、見覺にのある額の瘡——に驚き、遂に罪の連座を怖れて切ない情緒を堪へ——コレ今一度顏をと、引寄せて、見れば見る程胸せまり離れがたなき愛思ひ——に血の涙を絞る光景である、女房に弓には伯爵夫人富子が扮る、同族中に隨一の美人の噂高く、齡は三十に近い女とは何うしても見ゑず、常に華麗な若づくりに、まだ令孃の世界から出て間もない姿と思はせるが、伯爵家に嫁入つてモウ九年の古い令夫人である、髮は態と地頭を京風の兩輪にしたが束髮の癖で艶やかな毛が前へ出るのを黃楊櫛で押へ、平素は裾を引いた足許寂しう、着馴れぬ木綿の衣裳に前掛けの姿でた鶴の兩手を取つて引寄せ、泣く聲立



てじと手拭を噛み締め、美くしい顏を空に向けて愁嘆の表情を見せる、た鶴に扮つたのは本文通り、年はやう〳〵とを〳〵の可愛い少女である、同行二人の笈摺の背を見せ——何うやら母樣の樣に思はれて妾や此處が逝にとむない——と氣強く名乘らぬ母親に取縋るところ、淨瑠璃で聞いても演劇で見ても、親子の恩愛に涙を催ほさせる悲劇である。

靜かに幕は下りた、これが餘興の壓終とあつて、更にこれから夜櫻の宴が始まる盛を欺く待合席で、一日の歡樂に飽いた來賓の雜談は、云合はした樣に活人畫で持切る。

「夫人のた弓は實に美しかつたね、十郎兵衞伯爵の艷福羨むに堪へるテ」

「藝術は神聖な批評に俟つだ、我輩はあの邂逅は女主人公で打壞したと思ふよ」

「何故〳〵」

「何故々々」

「何故といつて全體夫人の顏がた弓になつてないよ、斯う空を仰いだ所は、何だか弱い婦人が虛榮に憧れて、望んで及ばぬ際涯の無い慾を追ふといつた樣な趣きがあるぢやないか」

「酷く惡く言ふね、子役は何だ」

「ウムた鶴は實に善かつたよ、凝と取縋つた所に何とも云へぬ精神が溢れて、詞一つないのに我輩を泣かせよつたテ」

『僕は又妙な事を發見したせ、諸君は氣が付かなかつたかい、あのに鶴さた弓が實に能く似て居たせ』

『親子だから似るだらうよ』

『戯談ぢやアない、あれは夫人の子ぢやないだらう』

『左樣だ、夫人に子供は無いさ』

『だから不思議ぢやア無いか』

（（三））

夜櫻の宴を待つ間を談話に集ふ待合席の來賓中、活人畫の批評に興じた一團は、富子夫人のた弓さ鶴に扮つた娘の面貌が極めて能く肖て居たといふ新しい話題を捉まへて、頻りに面白がる、そこへに轉婆らしい洋裝の奥樣が來合せる、剰輕な一人は待つて居たやうに。

『ヤア大谷令夫人、恰度善い所でした貴女は我々を惱ます大問題に解決を與ふべく此處へ入らつしやつたんだ、左樣でせう』



『ほゝほゝゝ野村さんが突然に、大問題ツて何？、貴郎方御男子で解決のつかぬ事は婦人の方へ廻はして下さつたら可いわ、名譽ね』

『ヨウ與風會の三傑ツ』

『知りませんよ、人に物をた頼みなさる癖に』

『混亂しては可ない、大谷さん、實は先刻の活人畫巡禮に扮つた子供の顔が極めて能く肖て居たといふ事が問題に爲つてるのですよ、夫人にれ子達は無い筈といふと、イヤ母子で無くては如彼は肖るものではないと言ふのです、いかに研究の結果でも、面貌まで似せるといふ事は名優でも至難しいだらうと思ふです、全體あの た鶴の子役は何者ですな』

『ほゝほゝ貴郎方も苦勞性で入つしやるのね、それでも其位の熱心に覩て頂けば本望ですわ、夫人も定めてた嬉びでせうよ、あの子役に就ては、それは夫人が苦心されたのですよ、た弓に扮る御自分、何處かに面貌の似通ふた女の子が欲しいと仰有るのでせう、皆で種々骨を折りましたけごそんな誂へた樣なのは有りはしませんわね、因ツ了つてる所へ、夫人が御最負になる新橋藝妓の春次といふのが、あの女の子を連れて來たのですよ、あの通り不思議に能

く御自分に肖て居るので、それはに嬉びなすツてね、いよ〳〵鳴戸が出る事になつたのです よ、善い娘でせう、夫に役の精神を能う會得んであそこの情が何共云へませんでしたわね』

『ヤそれで疑問が解決しました、どうも大に擬つたものですなア』

『藝妓か俳優の子だらう、それでなくちや、舞臺の素養が無くては如役は可かぬまるでた弓を喰ツ了つた』

『オヤ夫人は惡い御評なの』

『オツト失敬、決して惡くはないですよ、それに貴女の梅川は全く今日の秀逸だ』

『オヤ左樣で御座いますか、た讃めに預づて面目次第もございませんツ』

『イエ戯談なし、衆口一致の批評です』

『ほゝゝその後は聞かない方が可いでせう』

洋裝夫人は笑つて行つて了ふ、皆が後を見送つて。

『ヘンあれでも譽められると嬉しいと見ゑるせ』

『僕は梅川が出る處へ、藪際の治郎兵衛後家の婀妁で、近い頃こゝへ來た、忠三殿の噂衆が代理に出たのかと思つたよ』



一同は哄と笑ふ、程なく花見の夜宴が開かれて、春宵の一刻千金を散ずる豪奢な饗應は人を驚かせる、斯して興の興が盡き、朧月の門前に主まつ馬車俥の賑はしく散つたのは夜半を過る頃であつた。

今宵の中に雪と降るか、櫻花は頻りに空に舞ふて、歡樂の後の哀情を點ける、富子夫人の居間では、燈火が華やかに輝き侍婢が出たり入つたり、賑やかな笑聲も聞ゑる、暫時すると、侍婢に案内されて新橋の藝妓春次が、活人畫で巡禮のた鴎になつた少女の手を引いて出て來て、次の間から恭しく頭を下げると快濶い聲で夫人は。

『サア待つて居ました、ちつとも構はないからた入りよ、た疲かれだつたらうねい、其娘はモウ眠いだらう、サアに禮をするから遠慮しないで室内へた出で』

『御前樣御免を蒙ります』

と春次は、後方に隱れるやうに坐つて羞澁む風情の少女を連れて、優やかに室へ入る。

## （四）

リリーかヴアイオレットか、高い香りが籠る和洋折衷の一室は目の覚める善美を盡し、金屏風の前には等身大の石膏像が座り、花火屋の電燈の光りに、眞白の女神の姿は動き出すかとばかり奇麗な紫硯の文机には蒔繪の硯筥が置かれて、青貝の手筥の上に文鎭の白玉の兎が座まる、此日本式の裝飾とスグ並んで、彼方の窓の下には、古代錦を被ふた卓子に、華麗な坐褥を載せた織巧な椅子、電釦を押せば枕を捧げる安樂椅子が並び、隅の硝子戸の本棚の横には、ピアノと踊りの花笠が見ゑる、油繪の額もあれば此方の床には雪村の軸も掛る、此雜然たる配置の一室は、富子夫人が榮華の城廓である。

髮は宵の活人畵の舞臺を其儘、衣裳だけは華美なれ召に着替へて、無雜作に夜光珠の襟留を褊衿に挿し、指にチラ〳〵紅玉の光を輝かせて、綿の厚い紫縮緬の大座蒲團に座つた富子の艶姿は、儕へ様もない美くしい、春次の後で眩しさうな顔を盗につけて、鄭寧にお叩頭をした少女は、先刻お鶴に扮つて、取縋つた人が此の貴婦人かと思ひ惑ふやうな氣色で、密と富子を見



る。

『御前様、妾此娘が無事に演了せましたので眞個にホッと致しました、全く御前様のお陰でございますよ』。

春次の挨拶に、富子は厚化粧の面に艶な笑を浮べて。

『妾もねえ、藝事の素養がないと聞いたから氣遣つたけれど、案外氣が乘つて情を惹いた善い畵面だつたッて、皆さんから譽められて嬉く思ひました、お前に骨を折らせた甲斐があつたのね』

富子は今宵の來賓を驚かせた活人畵の成功に誇を禁め得ぬのである。

『これはお禮の印だからね、其娘の衣裳でも買つて遣つてお呉れ、それから聞けば餘り裕にない生活とかお云ひだつたね、それで失禮かも知れぬけれど、この封金は其娘の親達へお家苞にさせてお呉れ』

手文庫から奉書紙の包みを二ツ出して春次の前へ置く。

『まあ御前様、そんなお心遣ひを遊ばしては、妾の緣邊の者で、御屋敷へ上つて御前様のお傍でお役に立ちますのでさへ勿體なうございますのに、お禮なぞを頂きましては、妾……』

『ほゝゝそんなに禮を云つたら損が行くよ、それからた前には何にしやうねゝ』

『ほゝほゝ御前樣があんな事を、御贔負を蒙むりまする　妾　達に那麼た禮なぞを』

『だツて成功祝ひだからね、何かしないと妾の氣が濟ないわ』

富子は氣付いたやうに、忽ち指に挿めた紅玉の指輪を脫いて。

『春次、た前の指を出して御覽』

『ハ』と春次が答へた時には、モウ富子の身體は蒲團を辷つて、クリーム色の裾も艶に、立膝で身を寄せて、春次の指に其指輪を挿める。

『恰度善いのね、成功記念にそれをた前に進げやうね』

『あら御前樣何う致しませう、こんな勿體ない事を』

有難い頂戴物に感謝の詞を知らぬのか、春次は俯向いて居る。

『貰つて置いてた呉れ、ね、妾モウ厭になつたのだから』

『……』

『何したの、た前指輪氣に入らないの』

默つて居た春次は顏を上げると。

『御前樣、妾此品はた返し申します』

と云つて、脫いた指輪を紙に載せて、富子の前へ置き。

『妾、御前樣が禮をと仰有れば、あの註文があるのでございますよ』

## 《五》

折角禮心に、挿めてまで與らせた貰い指環を、突返すのさへあるに、禮に註文があるとは何といふ無禮ぞと、富子は美くしい顏に憤怒の色を浮べて。

『春次、何とた云ひだね、指輪が氣に入らぬから、禮に註文があるといふの』

『御前樣、斯樣な卑しい稼業の妾共が、貰い御屋敷へ出入が叶ひまするばかりか、妾はた殿樣始め御前樣から、一方ならぬ御贔負を蒙つて居りまする、其御恩のある御前樣の下賜物を、氣に入らぬの何のと申す譯はございませんが、ほゝほゝ妾ツイ御贔負にして頂くた心安だてに、飛んだ御無禮を申上げました、御免遊ばせ』

春次は低う頭を下げる、富子は猶怒りに震ふ身體を崩れる樣に曲豕に凭せて。

『氣に入らぬから返すといふのだらう、氣に入らぬ品を強ひては進げまい、そしてお前の詫文といふのは何か言つて御覽、さゝ早く云つて見るが可い』

『ハイ、只今申上げます、御免遊ばせ』

と春次は、後の少女の手を取つて、富子の前に近く座らせると、自分は後へ退つて兩手をつかへ。

『御前樣、お願ひでございます、今宵、首尾能くお役を勤めました御褒美に、萬望此娘を何時までもお屋敷へお召抱へ下さいませ』

『其娘を屋敷へ？、奉公させて呉れとお云ひなの』

『まだ漸と十になつたばかりで、迚も何のお役にも立ちは致しますまいが、まことに憐れな身の上なのでございます、斯うしてお屋敷へ伺つて、舞臺の上とは云ひながら勿體ない御前樣のお身體にお縋り申したのも不思議の御緣に存じまする、突然に强請がましうはございりますが御前樣、萬望春次のお願ひをお聞届け下さいませ』

『變つた願ひだねゝ、そんな小さい娘に今から奉公が出來もすまいし、屋敷にだツていつそ厄介だわね、それに普通教育の大事な時代を過つと一生の不運だからね、親の賴みかた前の考へか知らぬが、そんな事は思止る方が可いだらうと思ひます』



『ハイ學校盛りの只今に、それに年端も行ぬ小供を、決してすき好んで奉公させたくはございませんが、御前樣、此娘は腹の中から一生の不運を握つて生れたのでございますよ』

『親達が貧しいと聞いたねゝ』

『イエ貧しいや金持は世界の廻り合せ、此娘に限つた不幸でもございますまいが、今宵御前樣の活人畫の、鳴戸のお弓の文句ではございませんが、世の中で親となり子と生るゝ程、深い緣はないとやら申します、此娘は其親に早く別れたのでございますよ』

『親に先立れたのかい』

『ハイ親が死んだり子が先立つたりは浮世の習ひでございますが、此娘のは立派な親がありながら、淺ましい人のお腹に宿つたばつかりに、藥の上から捨られたのでございます』

『因果な身の上だね』

『捨られた此娘も捨た親も、因果同士でございませうが、御前樣が御覽遊ばす通り、男親ひとりの手で育つて、悧發に大きくなつたのを、棄た親が見ましたら、假令鬼畜の樣な心でも、乞度嬉しう禮を申しませう……ほゝほゝほゝ妾此娘の身上になると、ツイ身に同情されて

……御免遊ばせ』

春次は半巾で目を拭ふ、富子は少女の顔を見て。

『棄られる樣な子は悧發う育つといふが、齡にませて確りした善い娘だね、た前緣邊になるのなら、十分敎育の出來る樣に力を盡してた遣りよ』

『ハイ妾此娘の爲には、火水の底へ飛込んでも、何處までも骨を折つて遣る氣なんでございます』

『それ程思ふ此娘に、今から奉公の勤めをさせるといふのは變だね』

『棄てた母親に遇はせる手段でございます』

『母親の在所が解つて居るのかい』

春次は面を屹と上げて。

『解つてる段ではございません、夫と子を棄た薄情な、血も涙もない此娘の母親は、今御前樣と同じ樣に、世に時めいた伯爵の奥樣でございますよ』



『其娘の母親が、伯爵の夫人といふのかい』

と富子は春次の顔を見る。

『ハイ此方樣に較べて申上げては濟みませんが、その伯爵の奥方樣は、只今は、まことに結構なれ身分で、恰度御前樣と同じ樣に、貴婦人社會に御評判の聽いた方なんでございます』

『其奥樣がまだれ嫁入以前れ里に入つしやる時に、深いれ約束をなすつた男の方があつたのでございさうすよ、里方のれ身分は何でも貿易商とかださうでございます』

富子の顏の色は見る〳〵血を濺いだ樣になる、それを見た春次はツと膝をすゝめて。

『御前樣、れ聞き遊ばせ、其れ兩人の戀仲の大層深いのに引かへて、奥樣の御兩親からは結婚のれ許しが出ないのでございます、トゞ生木を裂いてれ別れになつた時、モウ姙娠のれ身體だつたので、間もなく女のれ子さんが出來たのでございます、すると其嬰兒にれ金を添へて男の……其男の方はまだ學生時代の下宿住ひだつたさうで、そこへ無理に嬰兒を引取らせて

了つて、問もなく其れ様は東京へ、嫁入とい
ふ事になつたので、サアそれを聞いた男の
方は、假令一旦は切れても、堅い約束で双方と
も夫も妻も持つまいと云交した詞を忽ち反
古にするとは、淺ましい女の心と、因果の種の
たのです、其中に、れ嬢様の變心は歪く、嫁入先が世に時めく御華族で、榮耀榮華の仕度三
昧が出來るといふのに心を眩まされて、御自分から進での結婚と解つたものですから、眞摯
の腐つた女には未練はないが、清い縲の時に出來た記念だからつて、男の方は其娘の子を御
自分の手一つに今日まで育てゝ居らつしやるのでございます』
富子は曲象に縋つた儘身動きもせず、俯向けた額に手を當て默つて居る。
『御前様、妾何かして、片親ばかりでこれ程に育つた此娘を、生みの母親に遇はせまして、今
日までの父親の辛苦艱苦から、現今の難儀の様子を此娘の口から聞かせたいのでございます
よ、小さい時から苦勞に育つた所爲なんでございませう、酬よりませて、それは傍で見て居
られぬ程悲慘らしい事が……今宵の活人畵で、御前様に何處か似申した果報で、斯々と話を
して聞せましたら、まあ大層喜んで夜も碌々寢ないのでございます、それ程れ屋敷へ出るの
が嬉しいかつて聞くと、巡禮のれ鶴はれ母様に遇ふのだらう、妾も何時かれ母様に遇へるや



うに、れ鶴に扮るんだつて……、御前様、万望此娘と母子の……母子が逕逅ふ事の出來ます
る様に今宵の事を御縁に、御前様のれ骨折が頂きたうございます』
とめどのない涙の顏をヒタと押へて、春次は其處へ俯伏した、富子は兩輪に結ふた鬢の毛一筋
動かさず、顏は兩手で覆ふた儘、曲象に倚つた姿は死人の様である。
『これ文さん、れ前は先刻活人畵の後で勿体ないけど舞臺でれ絶り申した御前様が、れ母様の
様に思はれるとれ言ひだつたねゝ、左様れ思ひなられ情深い御前様にれ頼みして、早くれ母
様に遇へる様に、れ願みしなきや可ません』
文子は小さい身體を小さうして、可愛い兩手を突くと。
『御前様、妾れ母様にれ目にかゝりたうございます、僅れ一度でも……れ父様とれ母様が一所
だと妾嬉しいんだけどれ母様はちつとも歸て來ないんだもの、れ母様の事を云ふと、れ父
様は直に叱つてだけど、妾叱られたつて遇ひたいんだもの、御前様がれ母様を知つて居
て……』
無邪氣な中に怯ち氣もあり、文子は懐かしさうに富子を覗く、春次はそつと目配せして。
『文さん、れ前のれ父様の名前と生れた土地を御前様へ申上げると可いね』

『妾は京都で生れて、お父様は畵を描いての、淺岡靜也……』

富子は跳る様に起上ると。

『春次、妾は伯爵財滿義則の夫人だよ、其方達から恥辱を受ける覺にはない、エ、穢らはしい　早く下りなさい』

憤怒に打慄ふ聲を荒げて斯言ふと、衝と室外へ出て了つた、文子は恐ろしい夫人の權幕に恐れて、犇と春次に取縋る、其手を取つて引寄せると。

『文さん、この姉さんが何時か一度は吃度優しい優しいた母樣に遇はせて上げるから、心配しないで待つてゐいでよ』

## （七）

傳通院前の厩い坂を上つて細い道を下ると、植物園の積翠で界隈の空氣を美くしう濾されて、今塵埃まみれの花に熱蒸れ立つた東京の市中でこゝばかりは、別世界の趣きがある。手入のしてない籬の枳殼は蔓りたい程伸して、潜り難さうな柳蔭の小さい門に、植辰とした硝子燈が揚り、門の柱にはモウ滅わかゝつた文字の、淺岡靜也の標札が微かに讀まれる。

主人は辰五郎といつて、純粹の江戸兒で植木屋渡世のモウ六十近い頑丈な老人である、西洋畵家の淺岡靜也が當家の離座敷を借りて、住むのは三年前からの事である。

仕事着の腰へ木鋏を挿して、朝の手入に植木の棚を覗き廻つて居た辰五郎は、大きな白薔薇の花心からプンと立つた虻の行衛を無心に眺めて居ると、雨戸を半ば開けた離座敷の靜也の居間で、頻に唸り聲がする、小首を傾げた辰五郎は急いで椽から硝子越に室内を覗き、居宅の方へ歸ると大きな聲で。

『オイ淺岡さんが酷く魘されてるせ、た起し申しな、また惡くなつたんぢやねわか』

『オヤ今火を持つてた時は、すや〳〵と能く寢て入つしつたんだが』

女房は急いで離座敷へ行くと、殘りの雨戸を繰つて、障子を開けて冷々した朝の空氣を入れる植込の千紫万紅の花が、妙な匂ひを靜かに送り、颯はしい日影は枕元まで映し込んだが、靜也はまだ恐ろしい夢から覺めぬ。



『……惡魔だ……鬼だ……畜生……アア痛い……苦しい……そ、それを何うするッ、其子を殺しに來たかッ、ウヌ待て……オ、春次……春次……』

『モシ旦那、夢でございますか、モシ旦那』

揺り起されて静也は、微かに目を開いた、そして劇しい脳の痛みを押へて、クルリと腹這になる。

『まあ大變な汗でございますよ、惡い夢でも御覽なすツて、妾吃驚しましたよ』

『ア、何だか變な夢を見た』

寢床の上へ起直つて、現然と苦惱の浮ぶ顏を二三度擦つて、心細氣に四邊を見廻すと。

『あの文子は未だ歸らないかね』

『ハイ未だ孃樣はまだ歸りになりませんがね、今朝は屹度連れて來るツて孃が堅く約束してれ連れ申したんですからモウ直にお歸りでございませう、今朝は氣分はいかゞでございます、ボカ〳〵と快いお天氣ですから、庭園を御運動になつて、それから御膳になすツたら、妾其間に一寸こゝを掃除しませう、斯なに塵埃だらけにして置くと、孃が歸つて又何なにお叱言を喰ふか知れやしませんよ、ほゝほゝゝゝ』

深切に氣輕な老婦の去た後で、靜也はまた頽然と靑褥に倚れる、永い間の腦病が漸次に重くなつて、今日此頃では書筆持つ氣は何しても起らぬ、恐ろしい刺痛が皆喰つて了つたのだらう、



頭腦は空虛の如になつて、瞑想も何も出はしない、半世の勉強は何の爲か、大きな、力の籠つた、自分の生命が其儘に傳はる程の作を殘さねば、此世に生きて美術家だの藩伯だのと云はれる甲斐はない、忌々しい病氣といふ惡魔の爲に、志業を空しく挫いて此儘に死んで了つては、恰度木の葉の散る樣に……それも名も知れぬ草の葉が日の光も見ずに腐つて落ちる、それより果敢ない無意味な事に思ふ、ア、自分は何故斯んな腦病なんかに罹つたのだらう、それは……それは……、一生の事業を破壞する此腦病に罹つた原因は。

斯う考へ、靜也は今の先の惡夢を又思ひ浮べる、恐ろしい形相で我を睨んだ鬼女人間の血の暖味知らぬ鬼畜の姿は、憤恨は深い昔の戀女、藏間富子の面影であつた、十年の年月に破れた戀は忘れられても、日々に成育つ娘文子が、母を慕ふ悲慘さは染々と男親の腸を斷つ。

## （八）

靜也は惱む後頭を押へて、頻りに過越方の悲しい追懷に耽つて居ると、本宅の方に當つて賑やかな聲が聞ゑ、間もなく藝妓春次と靜也の娘文子が入つて來た。

春次は此家の主人辰五郎の娘で、十七の歳から新橋で左褄をとつて、辰中村の春次といへば、俠骨者で聞えた美人である。

『お父様只今』

と文子は優やかに両手を突く、春次は座敷着の艶な姿で、それへ座ると。

『貴郎今日はまたお顔色が酷くお悪いのね、痛みますの、妾ね、早く文さんを連れて歸らうと思つたんですけれど、種んな用事があつてツイ遲くなりました、貴郎さぞ御不自由でしたらうね』

云ひ〳〵包みを解いて最中の筥を出す。

『お家苞かね、そんな心配はしなくツても可いに、どうだい文が役に立つたかね』

『はあ大成功で、妾までほんとに大威張でしたわ、先方でも大層に喜びなすツて、種んなお心附けを頂いたの』

『左樣か、それは氣の毒だつたな、文、活人畫が巧く出來た相ぢやの、何な面だつたか、お父さんに話して聞かせなさい』

『お父樣、活人畫ツて面白いのね、妾巡禮のお鶴になつたの、ホラお母樣に遇ふでせう』



『お母樣に……阿波の鳴戸だね』

と云つたが靜也の顔の色は蒼る、文子は詞をつゞけて。

『お父樣、妾お母樣に遇ふたのよ』

『ほゝほゝゝ』

と春次は笑ひに打消して。

『文さん何を云ふんだねわ、あれは巡禮のお母樣ぢやないかね、ね、姉さんが能く云つて聞かせたわね』

其話は止めにお爲と目で制る樣にする、怜悧い文子はそれと合點して口を噤む。

『文さん、其お菓子でお父樣にお茶を一ツお上げよ』

文子は甲斐々々しく起つて、煖爐に火を移す、春次は起つて蒲團の上に座つた靜也の後に廻ると。

『一寸揉みませうね、ほんとにお顔色が悪いわ、痛むの』

と心配相に覗く。

『ナニ先刻ね、變な夢を見て、起きてから例の詰らん事を思出したのさ』

と言つて靜也は屈托の息をホッとつくと、

『春さん、僕はモウ迚も以前の健康な身體にはなれないよ』

『あれ又そんな弱い音を、何ですねに淺岡さん、世間は櫻の眞盛りだわ、チト元氣をお出しなさいよ』

『其元氣を出したいんだが、病氣の所爲だらう、私には元氣といふものは既に盡きて了つた様ちやし』

『可けないのねね、そんな事ばかし云つてらつしつては、淺岡さん、文さんや妾を可愛さうと思つて、モウ切望そんな心細い事は仰有らずに、早く快く爲つて頂戴よ、ね、妾貴郎や文さんの爲に何んな働きでもする氣だけれど、貴郎が以前のお健康になれないやうでは……』

春次は背中に隱れてソッと涙を拭く。

## （九）

淺岡靜也と盛妓春次との關係は普通の仲では無い、靜也は今から七年前に、京都の美術學校を卒業後、東京へ出て某大家の門に入つたのであるが、其時藏間富子との仲に出來た娘文子を連れて居るので、足手纏ひに當惑して居るのを、師の妻女が氣毒がつて出入の植辰といふ小石川の植木屋で、深切な世話好の老夫婦の許へ文子を預けたのである、爾來靜也は天才と修養のお陰で其名を世間に知られ、度々の博覽會にも大作を陳ねて人を驚かせたのであるが、師の歿後は文子を預けた緣故から、閑靜で可いといふので植木屋辰五郎方の離座敷を住居とし、父子はこゝで一ツに暮す事になつたのである。



辰五郎は以前は可なり大きな植木屋で、植辰といへば仲間に名を知られた者であつたが、先代が家業を厭ふて盆栽弄りの道樂から遂に植木屋になつた程の男とて枯れかゝつた木に花を咲かす腕はあつても算盤玉の才覺は頗る疎く、今から十年前に酷い失敗をして、本所の古い家と土地を人手に渡して今の處に詫住ひの身となつた、其時長女の春の容色と遊藝を見込まれて、勸められるゝ儘に新橋で盛妓を稼がせたのであるが、春の春次は、辰五郎の氣性を其儘な江戸ッ子氣質の負けじ魂の碓りしたところへ、母親の思慮深い智慧の勝つた女性の血も充分に承繼いで一寸見には俠盛妓の、座敷の快濶い容を外さぬ點があつて、交際ば此社會に珍しい暖い人情の奥底にも通じ、酔ふては黄金で面張るお大盡の額に盃を投付る氣概もあり、紙衣姿の昔の客

に、同情を寄せて泣く溫情は、廓には大の禁物ながら、名は昔ながらの新柳二橋も、徐所から輸入の女で埋て、モウ江戸ッ子種の品切になつた此頃に珍しい藝妓と持囃され、男嫌ひの我儘も通つて、土地の流行妓に數られて居るのである、此春次が畵伯淺岡靜也と深い仲となつた動機は、春次が、靜也の娘で母を知らぬ憐な文子の身に同情して、それが原因で靜也と交際ふ中に、自分を捨てた憎い女の腹に出來た恨の種の文子を、世事に疎い美術家氣質の靜也が、男の手一ツに面倒を見て少しも苦にせず、輕薄の多い當世の男心には珍らしいと動かされたのが戀の始りで、世に持囃さるゝ繪畵の名譽を、少しも誇らず一心に研究に身を委ねる殊勝さに床しい人格を尊敬ふ念も手傳ひをして、戀の眞似する稼業の身が何時か眞實の戀に陷つたのであるが、靜也も文子を我子にして愛して呉れる春次の眞心と女の親の植辰夫婦が深切を喜ぶ思ひが媒介となつて、遂に春次と人知れぬ秘密を持つやうに爲つたのはこゝに移つてから二年目の事である。

腦病に罹つてからは、春次は殆んど隔日に見舞に來て、有らん限に盡す眞實は、靜也を泣かせる、長い間繪筆を持たぬから苦しい問題が種々に持上る、それを身一ツに引受けた春次は、親元へ歸ると世話女房の姿である。



出入先の某家で活人畵の催しがあつて、文子が舞臺に借りたいからと春次が連れて行つたのであるが、活人畵から戻つて來て後の文子の擧動は靜也に不審を抱かせる。

文子が學校から歸つたのを夢心地に知つて居た靜也は、珍らしく頭腦が輕いので、起上つて庭でも眺めやうと次の間へ出ると、座敷の隅に文子が彼方を向いて座つて居る、何の氣なしにソツと後から覗くと、それとは氣付かぬ文子は押入から取出した大きな油繪の額を手に持つて、餘念なく眺めて居る、靜也はハツと思ふと何とも云へぬ刹那の感情に胸を打たれて眼を瞑つて腕を組んだ、油繪は昔の戀女文子の母藏間富子の肖像である、不思議な程母を慕ふ文子の爲に憤恨の涙で彩具を解いて描いた繪姿の額である。

## （十）

文子は後ろに父の靜也が起つる居るとは知らず、大きな油畵の肖像を一心に眺めて居たが。

『矢ッ張れ母樣よ、れ父樣が、れ前のれ母さんは此繪だツて下すツたんだもの、此繪がれ母樣だつたら、あの方が屹度れ母樣よ、嬉しいわ……だツてれ前のれ母樣は佛樣になつたツて仰

有やつたから、……れ父様は嘘よ、屹度れ父様は嘘だわ、妾可いから……ねねれ母様……れ母様ね、然うでせう、嬉しいわ』

静也は悩む頭を傾けて、息を殺して聞いて居る。

『妾れ父様に聞いて見やうか知ら……、姉様がれ母様に叱られたら……姉様に叱られたら厭てれ出ツて仰有るんだもの、叱られるわねね、姉様に叱られたら……妾姉様に叱られたら厭よ』

文子は涙ぐんで黙つた、富子の肯像は、静也の精神が注がれた傑作で、物を云へば應へるかと疑はれて眞に迫る、其唇邊に浮く微笑は、一度は静也の爲に天使の面影となり、一度は悪魔の形となつた彼女の特殊の表情である。

『れ母様……れ母様でせう、此間の方……姉様を叱つた方……妾れ母様に遇ひたいわ、あの方がれ母様だつたら、妾嬉イちやんや君子さんに威張つてやるから可い、文ちやんはれ母様が無いのねツて何時でも皆で揶揄ふんだもの喜イちやんのだツて君子さんのだツて、あんなれ母さんちやないから、威張つて遣るわ、華族だわ、れ母様は豪いわねね』

『文ツ』



不意に後から聲を掛けられて、文子は吃驚して思はず額を取落す。

『そんな物を默つて出すのではありません、そして何を獨語を云つてるのだ』

静也は叱る氣で聲を勵ましたが、罪の無い顏に涙の痕が見れ、小供心にハラ〳〵する態を見ては、腸を掻捻られる樣に覺れて。

『早くそれを仕舞つて置きなさい、明日だらう學校の運動會は、此間姉さんが持つて來た袷を出して、チヤンと支度をして置かんと、朝が早いぢやないか、髮はれ婆さんに結つて貰ふかね』

文子は悪い事でもした樣に、周章て額を押入に仕舞ふと、明日學校の運動會で上野へ花見に行く事、姉さんから貰つた美くしい袷の噺着を着る事、髮を結つて貰ふ事、なぞの樂い嬉しい種々が父の詞で一時に眼の前に涌いて、有繋に無邪氣な子供心の、モウ堪爾して父の顏を見る。

『今夜姉樣に髮を結ふて貰ふの、れ父樣あの着物着ても可いの』

『奇麗にれ粧しよてれ出、花よりも文さんの方が美くしいだらうよ』

文子は赤顏をして俯向く、ツイ此頃に驚くばかり背丈が延びて、娘らしくなつたのを見るにつけて、静也の胸を鎖す苦痛の塊りもそれだけ大くなるのを覺れる。

『姉樣が今日來ると云つたかい』

と何氣なく云つたが、合點行かぬ文子の擧動に就て、聞質さねばならぬ事があると、靜也は氣を焦つて春次の來るのを待つた。

（十一）

春は高臺の上野に凝つて、櫻の雲に首を突込んだ英雄の銅像も浮れ出しさう、花七日の命は慌たゞしい群集に蹴散されるかと、物凄い程の熱鬧であるが、朝花曇の後日本晴といふ天氣と、日曜が衝突つた爲に今日は又格別の賑ひである。

小石川彌生小學校の運動會は竹の臺に催される、無邪氣な男女を兩所に別けて、種々の運動遊戲に一日を暮す、雨露の惠に芽生の若草が、嗳い日光を吸ふて欣々と榮ねるやうに、敎師や父兄に保護されて、花の下に遊び興じる小供の態は、春の精氣の姿とも見られる。

『さあ皆さん妾に隨いて入らつしやい、花片を澤山拾つた方が勝よ』

若い女敎師は運動會の幕の中から脫けて、七八人の少女を連れて其邊を逍遙する。



『あら山本さんは酷いのねえ、人が見付けた花を横奪してさ、可いから、先生に云つてよ、よくツて？』

『まあ雪子さんは惡いわ、御自分が知らないで居て踏むんだもの』

『そんなに地上に落ちたのばかり拾はないで、ホラ斯なに散つて來るぢやありませんか』

敎師は空に舞ふ花片を撲つ、歎呼を上げてそれに狂ふ少女は暫時は餘念もない。

『淺岡さんは何して？』

と、フト氣付いた敎師は今迄此處に居た少女の一人が見にぬので尋ねる。

『先生、文子さんは屹度彼方へ歸つて、默あアて酷いわ、呼んで來ませうね』

駈出す後から、敎師も一同を連れて幕の方へ步みを運ぶ。

淺岡靜也の娘文子も、今日の運動會で此處へ來て居るのであるが、先刻先生に連れられて幕の外へ出た時、彼女はフト目に附いた或物を見て、前後の考へもなく其方へ駈出したのである。

此日護國婦人會の總會が此竹の臺で催され、博覽會の建物は、貴婦人令孃に充され、花の色消す綺羅を輝かせて、三々五々の步み姿は、明治榮華の繪卷物である、門前には主を誇る綺麗な馬車が並ぶ、文子の目に入つたのは馬車である、美くしい馬車を見た文子は——あれは華族樣

の乘るものよ――と、フト心付いたのが動機で忽ち――夢現にも忘れぬ懐かしいた母様――を思出した、活人畫で遇ふた華族の……美くしい美くしいた母様……、宅の油繪と能う似た、た顔だから屹度た母様に違ひない、あの方は華族様だから、あの馬車に乘つて……、斯う考へた少女心は矢も楯も堪らず、一人で駈出して會場の前まで來たのであつた。

遲ましい駿馬が櫻の下に轡を振ひ、勇ましく嘶くのと、巡査が大勢立番して、洋劍の光が燦然するのが恐ろしく、文子は人の後ろから覗いて立つて居ると、會は今果たのか、繪から拔出した様な盛裝の婦人が、ゾロ〳〵出て來てば馬車や俥に乘る、もしやその中に……た母様に能う似た方が……、文子は瞬きもせず凝と眺める。

二三臺の馬車が殘つて、モウ人は出て來ぬ、文子は急に物悲しい情が動き、フト後ろを向くと運動會のある處と遙かに離れて居たので、先生に叱られるだらうと、いよ〳〵悲しくなつて、來た道へ悄然と引返す、すると今會場の横手の小門から靜かに現はれた一群の貴婦人がある、洋裝の一人を中に取圍んで、何事か語り交して、櫻の雲深い奥の方へ歩む、文子は其中の一人を見ると、『あ』と云つて立止る、顔の色は見る〳〵花の様に、瞳た眼は輝いて普通ならぬ光景であつたが、忽ち何かの力で引付けられるもの〳〵様に、文子は其貴婦人の一隊に五六歩の後から何處までもと尾いて歩む。

東照宮の華表前で、亂れ咲の梢を見上げて、貴婦人の群が足を止めた時、文子は夢中になつて急遽に一人の袂を掴んだ、袂の主は財滿伯爵の夫人富子である。

## （十二）

今日を曉と着裝つた紋服の袂を不意に後ろから引かれたので、富子は驚いて振向く、肉附豐かな身の、胸高にきり〳〵と緊めた帶は平綾織の茶地に金通し、藤原式の霞模様は浮いて漂ふやうあし手風の文字は戀歌とも思はる〵華美な扮り、輕く吹く花の風に、油氣冒かぬ大廂髮がゆらめき、ダイヤ入の三ツ櫛と、襟を這ふ黄金の鎖は麗はしい日に燦然と輝いて、顔容姿共に足はぬ點もないこの貴婦人の誇の標章とも見られる、半身を折げた機に、空氣草履に零る〵千代田縮緬の、長襦袢は地白に紅の花吹雪、強い匂ひのヴアイオレットがさつと薫る。



『た母様ッ』

文子は確と握つた袂を動かして、大きな聲で斯う云ふと、美しく顔を振仰いだ、驚かされた富

子は、少女を一目見ると忽ち兢々と打顫ふて、其面は土色に變つた同行の貴婦人達は此意外の出來事に驚いて立止まると、物も言ひ得ず恐ろしき者に襲はれた如く、竦み立つた富子の傍へ寄つて。

『何遊ばしたの、まあ此娘は、これに前は何をするのだね』

一人は袂を摑む文子の手を放しにかゝつて。

『これ屹度狂氣ですよ、まあ何といふ事をするんだらうね、これ、この方は』

『この方は妾のお母樣よ』

捥ぎ放された手で文子は再び袂を摑む。

『ほゝほゝゝ全く狂人ですわ、これ御無禮を働くと赦しませんぞ』

年老つた一人は文子の後から覗いて。

『可愛相に、學校の運動會で、お母さんに紛れるか何かして逆上せたのでせうねゝ、お前氣を落着けてね、さ、能く御覽、ソレ、この方はお母樣とは違ふだらう』

『矢張お母樣よ、妾のお母樣よ……、ねえ母樣、宅の繪のお母樣よ』

一同は呆れて當惑する、血の氣の失せた富子は、此時まで眼を閉つて居たが、キリ〳〵と唇を



噛んで恐ろしい目で文子を睨んだ、睨まれてさすがに怖氣のさした文子は袂を放すと、忽ちワッと泣き出した、花の樣な貴婦人の一群に、何事が起つたと見た人々は馳集る。

『皆さん早く參りませう、ほゝほゝゝゝ厭な狂人の子ですわねゝ』

富子は斯う云つて事もなげに笑つたが、顏色はまだ蒼白く、崩折れさうな身體を强ひて靜々と彼方へ歩み去つた。

『文子さんよ、あらッ文子さん！』

『澁岡さんだわ、文子さん何うしてよ』

少女の聲を先に立てゝ、文子を探し歩いた女敎師は此處に來た。

『まあ貴方何をして居たの、先刻から探し廻つたのよ、そして何故泣いて居るの、何處か惡くッて、怪我しやしませんか、泣いて居ては解りません、早く仰有い』

抱くやうにして敎師は尋ねる、すゝり泣きをして居た文子は、漸う顏を上げると。

『妾あのうたお母樣と……お母樣とこゝに居たの』

文子は只泣くのみで事情が解らぬから、女教師は懇ろに尋ねると。

『お母様とこゝに居たの』

といふ、友達の少女は顔を見合せる、中に一番ませた美イちやんといふのが。

『あらッ淺岡さんにお母様があつて？』

『ほゝほゝゝゝ嘘よ、文子さんはお母様は無いのよ』

『だッて御自分で云つてらつしやるわ、お母様と此處に居たッて、ね、文子さん、嘘？、眞實？』

『妾嘘なんか……』

『エ眞實、まあ、可笑しいわねえ、淺岡さんにお母様があるッて始めてだわ』

『嘘よ、だッてお母様があるなら、今日だッて屹度ねえ、山本さんでも川村さんでも皆なお母様や姉様が隨いて來てよ、文子さんの嘘つきよ』



『皆さん、そんな事を云ふものではありません』

と教師は一同を制して。

『淺岡さん、貴方お母様は無いッて云つてましたわね、お有りなさるの？、此處へ來て入しッて、ね、何處へ入らつしつたの』

まだ泣咽りの止まぬ顔を上げて、文子は口惜しさうに友達を見ると。

『妾お母様があつてよ、妾のお母様は華族様よ』

『ほゝほゝゝゝ』と一同は吹出して笑ふ、教師も文子の意外の詞に可笑くなつて。

『ほゝほゝゝ淺岡さん、さ、もう泣くのを止めて彼方へ皆さんと參りませうね、さ皆さん、仲善くして「花の梢」を唄ふて行くのですよ』

『先生妾此處に居ます』

文子はきつぱりと云ひ放つた、教師は慌いて。

『此處に？、貴方一人で、ほゝほゝゝ、モウ直に日が暮れます、皆さんと一所に歸るのです、ね、さ、早くお歩きなさい、ね、先生の言ふ事を聞くものです、ね、さ早く』

『……』

『淺岡さん、貴方が一番能く言ふ事を聞く方だにねね、今日は可ないのね、唱歌を唄ふて歸りませう、さ、遲くなると可ないから』

敎師は文子の手を取つて種々に賺す。

『先生、妾もう一度た母樣に遇ふの……た母樣は叱つてだけれど……叱られたツて可いの……』

『困るのねね、貴方本統にた母樣が來て居て』

『向ふの大きな家へ來て居るの、あの馬車に乘つて』

敎師は當惑する、運動會は終つたと見にて歸校を相圖の喇叭が鳴る、群集が散つて花は黃昏を靜かに散る。

『可ません、そんな無理な事を云つて、皆さんが歸るぢやありませんか』

文子の身體を引抱へるやうにして、敎師は飽まで保護を加へやうとする、連れて行かれまじと爭ふ文子は、大地へ其儘座つて了つた。

『妾、た母樣に遇ひたいんだもの……厭よ厭よ……歸るのは厭よ』

其時精養軒の方から俥で來かゝつた婦人がある、文子の此場の光景を見ると、急遽に其處へ飛下りた、女は藏妓の春次である。



『まあ文さん何うしたの』

と驚いた聲で云つたが、敎師に鄭寧に會釋して。

『妾此娘の緣邊の者でございます、御厄介ばかり相掛けまして濟みません、これ文さん何ふ事をた爲なの』

と叱る樣に云ふと、文子は突然春次へ縋り付いて。

『姉さん、た母樣に遇ふたのよ』

と言つてワツと泣出した。

『ねゝ』

驚く春次を見て、敎師は先刻からの事情を告げて、文子を引渡して去つた。

『これ文さん、何處でた母樣に……文さんはた母樣を知つて居て？』

『姉さん、活人畫に行つた時の、た母さんに爲つた奇麗な方、あれ屹度妾のた母樣よ、た父樣の描いた繪と同じ方だもの、あの方に此處で遇つたの』

『此處で……そして文さんは何したの』

『妾た母樣ツて袂を捉まへたら』

『エ袂を、オヽそしたらあの方が何と仰有つたの、ね、何と仰有つたの』

『……まあ厭な狂氣の子だツて……妾を睨んで行つて仕舞つたの』

『エ狂氣の子ツて……』

護國婦人會場の門前に殘つた一臺の馬車は、此時一人の貴婦人を載せて、山を下へ馳せ下るのである、春次は、其貴婦人こそ財滿伯爵の婦人富子と氣付いて、怒氣に震ふ唇を噛み、凝と其方を睨んで居たが、堪へ切れぬ獨言。

『罪の身體の華族の榮華が、それ程までに有難いか、伯爵の奥樣と、卑しい藝妓の意地較べに何方が勝つか待つてた出よ』

## （十四）

財滿伯爵の夫人富子は、上野で開かれた護國婦人大會から歸ると、氣分が快くないとの事で、己が居室へ閉籠つて了ふ、夫義則は某大臣の催しに係る兩院議員招待會からまだ歸つて來ぬ。

腦でも惡いのか、顏の色が凄い程變つて、これが出ると皆が命を奪られる樣に恐がる肝癪筋が現然と讀まれるので、侍女共は顏を見合はせて、誰が一番にた怒りに觸れるかと、安い心もない。



『一寸、何したの、あの顏？、憤つてるのねね、梅幸の戻橋見た樣だわ』

『ほゝほゝほゝ、其戻橋もあつたとさ、御最負の俳優は皆演たツてねね』

『今日の餘興？、さう、それに何だツて御機嫌が惡いのだらう』

『ちよいと、六代目は演て？た尋ね申しますツ』

『ほゝほゝゝゝ、仰せにや及ぶべきさ、妾、また何時かの樣に御同乘でた歸りだらうと思つたよ』

『御同乘の幕が出ないからあの顏ね』

『拗たのよ、十八番の吉田屋を素で見せて、七百貫目の借錢負ふて夜業稼ぐ伊左衞門、こんな時寢ねばならぬ、邪魔なされな總嫁ごのツ』

『ヨウ〳〵』

『まあ巧いのねね、時々た供を命つかるだけに酷いよ』

『色は京阪俳優の方が面白いツてね、上手なんだらうよ、舞臺だツて濃厚してるからねね』

『美くしい馬車へ華族の奥様と合乗で、公然に屋敷へ出入が出來るなんて、俳優ツて稼業は可いわねね』

『なりよ、女優にさ、裸で猿股を穿いて踊る試驗さへ濟めば、何時でも女優になれるさ』

『難有う、妾女優よりか華族の奥様になりたいわ』

『伯爵夫人富子にね』

『ほゝほゝゝゝ』

『ほゝほゝゝゝ』

電鈴が劇しう鳴つた、鳴子に驚いた群雀は囀りを屏める、た由といふのが恐る〳〵夫人の居間へ伺ふと。

『あの麹町の山井様へ電話をかけて、妾が急にた目にかゝりたい事があるから、奥様にスグ來て頂く様にツて、解つたかい、何を愚圖々々して居るんだね、早く爲るんだよ』

富子は登間の襞着の儘で、安樂椅子へ投られたもゝ様に身を横たへて居る、侍女が、山井の奥様は、只今直伺ひますとの御返詞でと言つて引下つた後『ア、』と苦しさうな太息を漏らして房々した廂髪を自棄に引掴んで、再び横になつたと思ふと。



『エヽッ誰が……人を馬鹿に……今更……思出しても慄然とする、今の身分とあの娘と取換るなんて、ほゝほゝゝ誰が好事にそんな……ア、穢らはしい……汚い……失敬な……能うあんなものが……今日まで生きて……何故生きて育つたのだらう』

富子は觀櫻會の餘興に催した活人畫へ藝妓春次の世話して借て來た娘の子が、計らずも今より十年前、まだ京都の實家に居た時分、若い血の燃ゆるに任せて狂ふた戀の記念である事を春次から諷しられて以來、今迄我一人の胸に潜めた大秘密の罪惡が曝け出され、今貴婦人社會の花と歌はれ、交際場裡の女王さまで立てられ、夫の伯爵と共に、聲譽と榮華の世界に常住の、歡樂を極めて居た身が、忽ち惡魔の呪ひに遇ふて、奈落の底へ葬られる、悲慘な運命に近づかれた事を氣付いたから、苦惱と煩悶に日を送るのであつたが、今日は再び上野の花の下で、惡魔の使命と恐ろしい文子の手に曝の袂を握られた爲に、麗はしい春も黄泉の氣がして、忘れかけた昔の罪惡が眼の前に現然と、古い墓が崩れて死んだ人が呻吟き出た光景を見る様な、恐ろしい感情に、限り知らず惱亂するのであつた。

## （十五）

『あの山井様の奥様がた越でございます』
と侍女の取次ぐ間もなく、テク〳〵肥つた體格をモウ其處へ現はしたのは、男爵山井清丸の夫人淺子である、四十格好の眉の薄い鼻と口の馬鹿に大きい、其體ショボ〳〵目の、輕薄な人相ながら、絶えずニタ〳〵、笑みを含んだ愛嬌は、何處やらに人を魅つける力を持つた老夫人である、左も親近げにツと夫人の居間に入ると、此時までも取亂した姿勢で椅子に倒れて居た富子は、これも遠慮ない様に僅に身を起して。
『濟みませんのね、何時も勝手ばかり云つて』
淺子は夫人の様子を見て細い目を瞬る。
『まあ？、貴女何なすツたの、それ、まあ、まあ、た髪を潰して、た召替もなさらないで、そして其た顔の色？』
『……』



『御氣分がた悪いの、ね、早く仰有いよ、まあ、まあ、一體何遊ばしたといふの』
富子は突然淺子の手を執つて。
『妾口惜しいのよ……斯な口惜しい事ツたらありはしない』
と潸然と泣く。
『譯が解らないわ』
と淺子は覗き込んで。
『早く仰有いよ、ね、何遊ばしたの、御前と何か、ね、ちや無いの、何が口惜しいツて仰有るの』
『口惜しいわ、何したら可でせうねね』
『厭よ、何でも勝手に遊ばせ』
と淺子は拗ねて見せる。
『そんな事を云はないで……、妾本統に困つちまふわ』
『だから何が口惜しくツて、何を何しやうといふの』
『貴方怒つて』

『怒りますとも？、何か又毎時の通り御馳走でも頂ける事と思つて、取るものも取合へず、麹町くんだりから態々この大きな身體を運ばせたのに、只口惜しいのよ口惜しいのぢや一向た甘くございませんッ』

『そんな氣樂な事ぢやないの、奥さん、妾モウ伯爵夫人ぢやないわ』

『議會が無事に濟んだ御功勞で御陞爵？』

『あれもう、妾一生の大事だからさ、眞面目で相談に乘つて下さいな、後生ですから、この通り』

と富子は掌を合はす。

『ほゝほゝゝ、ツイ此間拜まれたところね』

富子はサッと顔を赧くする。

『御前はた留守ですツてね』

と淺子は膝をすゝませて。

『今日のあの舞の善かつたことね、何うして如彼に姿勢の動作がつくか、不思議な位ですわね、皆な恍惚だつたわ、お嬉しくツて』

『知らないわ』

富子は甘へた調子で、美くしい顔を恍惚とさせたが、忽ち發作的にブル〳〵と身慄ひして。

『妾……大變な事が起て來たの、モウ斯しては居られない……かも知れない』

『まさか御前が俳優を最負にしては可けないとも仰有りはしますまいね』

『そんな事なら可けれど、妾秘密を他人に握られて了つたの』

『秘密？ほゝほゝゝ、誰にだツて秘密はあるぢやありませんか、まあそんな事？、確かり爲さいよ貴女、秘密が無くツて此世が渡れますもんか、妾なぞはこれで頭から足の先まで秘密だらけですよ、ほゝほゝゝ』

## （十六）

誰にでも秘密はあるぢやありませんか、と云つて事もなげに笑ふ淺子を、強い味方と喜んで、富子は曾て漏した事のない我身の上の秘密を打開ける。

『妾これ本統に生死の問題ですからね、奥さん、貴方他言なさる樣な事はありますまいね』

『妾が他言？、まあ、妾貴女に左様見にて、そんなに頼もしく無い者と覚召すのなら承はりますまい』

と老夫人はツンとする。

『あら左様ぢやないけど、貴方一人に打明ける大秘密だから』

『大でも小でも御憂慮なしに仰有いよ、當邸様のに陰で立つて居る山井ぢやありませんか、御恩を忘れる夫婦と思つて居らつしやるの』

『妾僅た一人の味方と思つてよ』

と富子は膝と膝が觸るばかり近付いて。

『奥さん、貴方今日上野で妾の袂を捉まへた子供ね、あれを何う思つて居るの』

『貴女の袂を？あの狂人の娘の子、ほゝほゝゝゝあれは可笑しうござんしたね、貴女をた母様ッて、飛んだた茶番でしたわねね』

『妾彼娘のた母様よ』

と言つて富子は袂を顔に當てると、淺子の膝の上に俯伏した、淺子は魅れた様な顔をして、細い目を白黒する。



『彼娘のた母様ッて何がですよ』

悲しさうに泣く富子は、さも堪へぬやうな細い聲で。

『彼娘は妾の眞實の子なのよ、十年前に京の貧家に居た時……妾が産んだ子です、藥の上から父親に渡した……夢の様な時代の……妾の子に違ひない……奥さんッ、妾この秘密を……この穢らはしい秘密を何う爲たら可いでせうねね』

身を慄はして膝に泣崩れた富子の背中を擦り〳〵、淺子は何か獨合點をして、ニヤリと笑つたが、例の輕い調子で。

『何かと思つたらそれが貴女の大秘密、ほゝほゝゝゝ、確り爲さいよ、それ位の事で泣くものがありますか、さあ〳〵、モウた泣き遊ばすな、それ位の問題はスグ解決がつくぢやありませんか、淺子が引受けて御憂慮は掛けませんからさあ』

『貴方が屹度……妾をこの秘密の惡魔の手から救ふて下さるの』

『まあ仰山な、秘密も惡魔もこれッぱかしの事に、世間に澤山有る事ぢやありませんか、ほゝほゝゝゝ室田侯爵のた娘さんは何うですよ、それから早瀬の奥様なぞのは振つてまさあね、た輿入から八月目の御誕生が太平に納まつてるッて言ふぢやありませんか、貴女のはそんな

譯ちやなし、誰に遠慮が要るもんですかよ、れ心の弱い、本統に確り遊ばせ』

『だツて始終呪はれて居ては……』

『エ呪はれるツて、貴方そしてあのれ子達に惹かされて？』

『誰が……妾夢の樣な昔の……昔の事は想起しても慄然とします、誰があんな者を……口惜しくツて腹が立つてならないの、今の身分をあんな者に呪はれると思ふと……妾の爲めには惡魔です』

『それなら譯は無いちやありませんか、子供に惹かされるとか何とかなら、そこに又考へが要るでせうけれど、そんな昔の夢の樣な……誰にでも覺のある事ですよ、詰らない物を背負込んで堪るもんですか、呪はれない樣に手段を爲ませうよ』

『妾を助けて下さいよ、それには妙な後援がついて居ますからね、金で何にかすればなるだらうと思ふのよ』

富子は醫妓春次の話をして、猶何か密々語るのであつたが、淺子は夥しい紙幣の束を受取つて敷を讀みつゝ。

『金の力に敵對ふものがあるもんですか、妾に任せて御安心なさいよ、そして御氣保養に近い中歌舞伎座へれ供しませうね、ほゝほゝゝゝ』



## （十七）

春は老いた、花の散つた梢の虫取りに、植木屋の辰五郎老人は終日裏庭で働いて居る、午後の四時頃學校から歸つて來た文子は、父の用事を濟ませて後、暫時れ復習の聲が聞れて居たが、何時か辰五郎の後へ來て立つて居る。

『伯父さん、また蟲取つてるの』

辰五郎は振向くと、莞爾して。

『オ、文坊か、勉強をして居たの、豪いゝ、れ父樣はれ寢みかな、エ、繪を描いて、左樣か氣分が快いと見えるな、結構々々、文坊はれ父樣が起きて居ると嬉しいだらうなあ』

辰五郎は足盞に腰を掛けて、文子の相手になる。

『伯父さんこれ何て花？』

『それか、それは小町草といつてな、虫を取るから虫取撫子ともいふよ』

『草が虫を取るの、ほゝほゝゝ可笑しいわねね、本統？』

『伯父さんが嘘を吐くもんか、ホラこんなに粘い液汁が莖に着いてるだらう、これへ虫が止まると粘着ちやつて逃げられねね、文坊でも觸つたら直に捉まるせ』

『フ、フ、、人でも取るの』

『取るとも、文坊の様な美くしい娘が大好だツさ』

『厭な草？、捩つて遣らう』

文子は無雜作に其一房を引捩る。

『はツはゝゝゝ文坊は強いから、草の方が負けたな』

『まあ一ばい生ねて、これ何？』

『ホイ〳〵、お客様が種々とお尋ねだぞ』

と老人は盆栽棚の横に、四角に圍ふた地土へ密生の、蓬の様な草を指して。

『これは母子草といつてな、モウ直に黄色い花が咲かあ、昔はこの葉でお節句の餅を拵へたもんだ、だから餅よもぎとも云ふせ、文坊は餅が好きだつけな』

文子はそれには應へず、疑と草を眺めて居たが。



『母子草？、お母様と子供の草なの』

『はツはゝゝゝ花が簇々と一緒に仲善く咲くからだらうよ』

文子の小さい胸には、忽ち——美くしい華族のお母様——といふ大きな問題が、一ぱいになつた。

『オイ何を無言で考へ込んでるね、文坊伯父さんが善い花簪を遣らうせ』

辰五郎は半開の紅薔薇を一つ、文子の髪に挿して可愛らしい姿を凝と見る。

『大きくなつたなア、お父様が能く可愛がる丹誠で、女親の無い子たア見ねねね、お父さんに孝行しなけア可ねねせ』

『伯父さん、妾お母さんがあるのよ、立派な華族のお母様があるのよ』

『な、何て』

『お父様は、妾のお母様はモウ佛様だツて、あれは嘘よ、草だツてお母様があるんだもの、ね、伯父さん、妾ちやんとお母様を知つて居るのよ、伯父さん知らないの、姉さんだツて知つてるのよ、美くしい馬車に乘つて綺い方よ』

『はツはゝゝゝ』

と辰五郎は笑つて。

『文坊は夢を見たんだな、面白い夢を見たんだな』

『夢ッて、まあ、妾夢でもいゝ事よ、姉さんが美しいた母様と御一緒に居られる様にして遣るッて左様云つてよ』

『姉さんが、春姉さんがかい』

と辰五郎は合點の行かぬ小首を傾ける、この對話が聞ねたらう、ツイ傍らの植込の後から出て來た父の靜也は太い聲で。

『文ッ、一寸座敷へ ね出で』

## （十八）

文子は呼ばれて座敷へ入ると、父の靜也は腕を組んで柱に凭れて居る、叱られ相な光景なので戰々して。

『ね父樣御用』



と手を突く、靜也は其の顏を睨むやうに見て。

『モ少し此方へ ね寄り、文ッ、さ、今日は此間からね父さんが尋ねた事の返答を爲さい、ね前は私に隱してる事があるだらう』

『……』

『ね前は親に物を隱して可いと思つて居るのかい、ねゝ』

文子は愚み掛けられて、顏を眞赤にして俯向く——何時も優しいた父樣が、此間から此事を詰問れる時は、他處の人の樣に憤られるのが恐ろしく、何遍も言つて了はうかと思つたけれど、春姉さんが、此事は姉さんがね父樣に言ふまでは決して話しては可ない、文さんとね母樣と一緒に居られる樣にして上げやうと思つて姉さんが骨を折つても、ね父樣の御氣性だから難かしい、叱られても默つてた出と云はれたから、あの美しい、そして立派な華族の身分のね母樣の子と云はれたら何なに妾嬉しからう、ね父樣に云ふたら屹度叱られるに極つて居る、叱られても可いけれど、そんな事は出來ないッて云はれたら……厭よ厭よ……ね父樣が何程叱つて尋ねてゞも、春姉さんが可いッていふ迄は誰が言ふものか……妾叱られたッて殿かれたッて……あの美しいた母樣の子になりたいんだもの——斯な事を考へて何時までも默つて居る。

『伯父さんにた話が出來て、れ父樣には言はれんのか、文ツ、其方の爲に……其方の母の爲にこのれ父樣はな……ざれ程苦勞をして來たと思ふかッ』

靜也は十年の月日に一刻も得忘れぬ山の如き憤恨がムラ〳〵と心頭に發して、何を思つたか、衝と身を起すと、次の間の押入から取出して來たのは、文子の爲に描いて遣つた母宮子の肖像畫である。

『文ツ、れ前は隱して居るが、このれ母樣に遇ふたのだらうな』

『……』

『遇ふたら遇ふたと何故言はない……この繪のれ母樣に遇ふたのだらう』

文子は畳へボロ〳〵涙を落す。

『こ、この姿は……この姿は其方の爲には母親ぢやが……れ父樣の爲には大惡魔だッ』

靜也は腦が裂けるかと思つて頭毛を摑んだが、右手で突然油繪を引剝る。

『あれた父樣ッ、れ母樣を』

文子は飛起つて父の腕に取縋る、靜也は油繪を眞二ツに引裂いて、汚らはしい物の樣に畳へ拋付けると、悲しい聲で泣き叫ぶ文子を抱寄せて。

『ア、、れ父樣がこれ程可愛がつて遣つてるのに、れ前はれ父樣の仇敵がそれ程までに戀しいのかッ』

## 《十九》

何時にない文子の泣聲に、辰五郎は不審を立て〳〵離座敷の外へ來て見ると、靜也の怒つた樣も普通とは變り、油繪を引裂いて叱る父親に取縋つて、悲し氣に泣く文子の聲は哀れさを盡す。

『淺岡さん何したんですな、文坊何か惡い事をしたのなら早く謝つて勘忍して貰うんだ、さ、伯父さんも一所にた詫をして遣るから、よ、泣く事は無ゐ、泣く事は無ゐ、文坊は賢こいなア』

と座敷へ入つて辰五郎は慰める、靜也は面を柔げて。

『ナニ少し私の腑に落ちぬ事があるからね、今それを尋ねて居た所なんだ、此子に聞かなくツても春さんが來れば解るんだが』

『實は餘り樣子が變だとたもつて、婆さんが氣遣つて今電話を掛けに行つたんでさ、直來るで

せうから、まあ文坊は咤らないで置いて下さいよ、さ文坊、伯父さんが謝つて遣つたから、チャンと顔を拭いてな、今春姉さんが來ると家包だせ、そんな顔をしてると姉さんに嫌はれるせ、はツはゝゝゝ』

辰五郎夫婦は長い間預つて育てた文子を寵愛する事普通ではない、母の無い子は不憫がかゝり殊に靜也と娘春次が戀仲となつて以來は、春次は文子を我子の様に可愛がるから、縁に繋がる植辰夫婦の爲めに文子は眞との孫娘ほど可愛いのである。

春次は伸で駈付けた、靜也が文子を咤る事情も大略解つて居るのであるが、座敷へ入いると、先づ目につく眞二ツに引裂かれた額の油繪に胸が騒ぐ。

『貴方、何うなすツたの、それ文さんの大事な繪ぢやなくツて、何して破つたんです、貴郎また御氣分が悪くツて、文さんが何ういふ事したか知らないけど、そんな亂暴を爲さらないでも……』

『た前も亂暴と云ふか』

と靜也は向直つて。

『私ア實に殘念だ、十年の間辛い思ひをして男の手一つに育てた文子が、私よりも顔も見知らぬ筈の母親を慕ふ、あの子の爲に私は一生の大事業を殆ど廢しかけた、あの子の母親の爲には……私は……健全な頭腦を半殺しにした、そ、それ程の犧牲を拂つたあの文子が……何故この私を厭つて……惡魔の富子を慕ふのか、それが私には合點が行かぬのだ』



春次は屹と形を改めて。

『文さんがた母樣を慕ふのは、妾のする所爲なんです』

## （二十）

文子が生みの母親を慕ふのは、自分の所爲だと言放つ春次の詞に。

『此間から聞うと思つて機會が無かつたがた前と文子は私に對して何か秘密を有つて居るだらう、文子に尋ねても隱立を爲る、母を慕ふのはた前の所爲とは何いふ譯ぢや』

『文さんとた母樣の縁を繋ぐのは妾の職掌です』

と春次は明確言つて膝を進めると、兩手を突いて頭を下げ。

『妾今日迄貴郎に隱して居たのは切望許して下さい、だが思ふと少さい中から苦勞をなすツた

文さんが可愛相なのよ、それに藁の上から抛られた母親をあんなに慕ふのが妾不思議でならないのよ、数へたツて出來るもんぢやなし、血は爭へぬッてことは本統に恐いものですわねえ、それで貴郎には小供心にも叱られるのを憚つて些とも口には出さないけど、妾には始めて遇つた時に、貴方妾のた母様ぢやなくツて？ッて聞くんですもの、それから今日迄に……妾染々あの子には悲慘を見て來ましたのよ、貴郎と妾斯な仲になつて……あの子を妾生みの子と思つて世話したいのは一心だけど、能く考へて見ると、夫ではまだ文さんへの愛が足りなからうと思ひますの、捨られた見ず知らずの母親を……慕ふと云つてもあんなのは、何か深い深あい因縁の糸が繋がつて一度は斷れた母子が邂逅つて名乘るといふ様な事が屹度あるのだらう、左様なつたらあの子は何なに……何なに喜ぶだらうと思ひましてね、妾あの子の母親になりたいのを凝と我慢して、今日迄生のた母様を探して居たのです』

『惡魔を探して何にする』

と靜也は富子の事にはスグ面色を變へる。

『さ、そこです、貴郎そこを熟く聞いて妾の考へが間違つて居たら叱つて下さいよ、なる程、富子さんは貴郎の爲には惡魔とも何共、言ひ樣のない程憎惡がかゝるのは道理よ、けど文さんの爲には此世に僅た一人のた母樣ぢやありませんか、貴郎が思出しても憎い人は、何かして過ひたくツて文さんが戀憧れて居る人なんですもの、妾貴郎にた目にかゝつて……ほゝほゝゝこの齢で恥かしい初戀を知つて、將來の事を考へて嬉しう暮すにつけても、貴郎と妾は滿足が出來ても、文さんは依然た母樣を尋ねて寂しい心で……妾それを見て居る事は出來ません、貴郎は見ぬ振で居て、切望妾にこの仕事を遂げさせて下さい』

『惡魔の住家は華族の筈ぢや、文子をそんなものに近づけたくない』

と靜也は瞑つて居た目を開く。



『はあ華族樣よ、華族でも平民でも、親子の人情に變りは無いでせう、よし又富子さんが何な……鬼か惡魔のやうな冷たい方でも、妾の一心で、男親の手一ツに立派に育つた文さんの前に降參させなくて置くものですか』

春次は靜也の膝を押へる樣に、凝と其顏を見上げる眼には涙が宿る。

『淺岡さん、華族の惡魔が降參したら、貴郎の一生の無念は晴れるぢやあ有りませんか』

『一生の無念が晴れるといふのか』

と靜也は柱に凭れた躰軀を起す。

『世に優れた立派な手腕を持つてらつしやる貴郎が、輕薄な婦人の爲に腦を傷られて、一生を不愉快にた送りなさるやうでは、妾それでは詰らないと思ふのよ、それは人情だものねね、貴郎が富子さんの淺間しい輕薄な心情に憤つて、其痛恨が始終胸に有るのは當然だわ、妾貴郎がこれ程の恨みを直に忘れて了ふやうな意氣地無しだつたら斯んなに苦勞を……ほゝほゝ、貴郎のそれが命よ、けどもねね淺岡さん、妾斯う思ふのよ、富子さんは將來は兎も角、今では自分の望み通りに華族の奥樣になつて、黄金に任せた榮耀榮華な生活をして居ますわね御自分で勝利と思つてるばかりぢやなくツて、世間が皆羨望んでるのよ、それに引變へて、貴郎は、貴郎は忘れがたい、痛恨が原因になつて今の御病氣でせう、體軀が悪くツては貴郎がどんなに焦心つても、それが反つて病氣を重くするばかりで、折角のた名前が此儘に埋るぢやアありませんか、妾それが口惜いのよ、それでは貴郎の負けになつて憎い富子さんの勝ですものね、だから妾如何にかして其御病氣を一刻も早く快くしたいともつてモウ一生懸命なのよ、た醫者もねね、大島さんばかりぢや心細いから、他に良いのをモ一人とも思つてるんですけれど、ツイ思ふに任せない事があつて……』

春次は言淀んで、密と半巾を目に持つて行く、默つて手を組んだ靜也は。

『た前の何時も變らぬ親切は有難い、併しこの病氣には俺自身で愛想が盡る、迚も快復の望みはあるまいよ』



『それが病氣が言はせるのよ、貴郎御自身はモウ駄目と思つてらしつても、富子さんの變心が病氣の原因なら、妾の眞心で快癒ならぬ道理は無い、と、ほゝほゝゝゝ妾自惚てゝよ』

『これでは全く意氣地が無いと、眞夜中に蒲團を蹴付けて飛起きる事もある、發狂して筆を持つ事もあるが、一時間と辛抱が續かない、ナル程病氣の原因は十年昔にあるだらう、雖然今ぢやア私はた前といふ慰藉の味方を得た、一時は世界の女性は皆惡魔だと思つた、その頑固な心がた前の温い同情の光で溶けて、虚僞の戀に捨てられて眞實の戀に拾はれた私は幸福者だと思ふ、それに、それに躰軀は心に伴はないで腦の痛みは依然で快くならぬ、實に愛想が盡きて了つて、た前にも何時までも苦勞を掛けるのが……』

靜也は後頭を抱いて、苦し相な息を長く吐く。

『文さんの悲慘があるからよ』

と春次は沈んだ調子で。

『妾貴郎のに意に反く事を知つて居て、文さんとた母樣の緣を繋がうと思ふのは、文さんの爲なり一ツには文さんがた母樣を慕ふ悲慘を見て、貴郎の腦の中に斷へず昔の憤恨が湧立つから、苦痛が始終續けさまで御病氣の快癒はありはしないと思つて、それで出來るものなら、女の子を女親に世話させて、輕いた身體にした上で、貴郎が日頃云つてらつしやる何時までも生命のある大事業がた爲せ申したいと思ふのです、貴郎は直に苦勞させて濟まないッて、改まつた事を仰有るけれど、妾苦勞のないやうな戀は大厭ひよ、苦勞も苦勞命掛けの苦勞がして見たいの、貴郎の生命のある大事業が出來上つた時は、妾だッて生命のある苦勞を仕遂げた時よ』

ほゝほゝゝゝと笑つた春次の顏は喜びの色に輝く。

花麗はしい背景が新綠の幕で消えて、蛙の音樂で初夏の舞臺が現はれ、輕い帽子もチラホラ見え初むる頃、靜也の腦病は餘程輕くなつて、久振りに郊外の寫生に出掛ける樣になつた。



この前の東京大博覽會で、美術館に當代の大家が腕を競ふた數多の繪畫中に『森の女』と題した裸體婦人の油繪があつた、博覽會は此繪一ッの爲に開かれたかと思ふばかりに、大した評判を捲起し、永らく絶えた風俗論も起れば、都下の新聞雜誌はこの批評に花を咲かせたのであるが、恰度其頃來遊中の佛國知名の美術家が此繪を見て——

——と歎賞した事が傳はり、鑑識の眼も何もなく只理由なく騷ぐ連中は勿論、斯道の人々も、此繪が鑑定附の傑作と今更ながら感心する、果して名譽金牌は『森の女』に授けられ、金牌の裸體繪は寫眞やら石版畫やらで全國に傳はつた、此名譽の筆者は淺岡靜也である、靜也は京都の美術學校を卒業して、東京に出た翌年に此大作を世間に示したのである、一向に名の聞えなかつた後進が一躍して名聲を讀かしたのだから、美術界の人々は目を瞬つた、其頃はまだ根岸の師の家に寄食人と爲つて居た靜也は身に餘る面目を偏に師の恩に歸して一向に誇る樣子もなく、昨日までは塵埃とも見て呉れなかつた我を、急に大きな顏い人物の樣に崇めて、先生なぞ

と輕薄な舌口を動かす徒輩には顏を避けて一心不亂に研究に餘念なく、其後の展覽會にも二三度出して悉く名譽を博したのであるが、コ、四年間といふものは靜也の名は美術界から消えて了つた、恩師に死なれて悲觀の結果、憂鬱症に罹つて故郷へ歸つたとか、或る豪商の養子に迎られて、繪具版を算盤に換へたとか、種々の噂は傳はるのであつたが、二三の友人の外は交際もせず、小石川の植辰の坐敷借に潛んだ靜也は、重い腦病に罹つて一度は危篤に瀕した身を、藝妓春次の心盡しに救はれて蘇生つた如く此頃漸く床を離れた事は、世間は些とも知らぬのである。

## 《二十三》

長い間親まなかつた繪具版を手にして、水も木も草も日も空も、今初夏の眞新しい生命に心地よい活動の姿を見せる郊外に位置を定め、凝つて動かぬ深緑の背景に筆を執り得るやうになつたのは、偏に愛情の人春次の眞心に感謝せずには居られぬのである。



麗かな日光の下に清い空氣を吸ふて、靜也は今日も半日を郊外の寫生に費し、會心の繪が纏りかけるのと頭腦の輕快いのに氣が發動んで、少し疲れる程勉強したのであるが、醫師やら春次の勸告に逆ふてはと、雲が出て光線の具合が變つたのを機會に、明日に殘して畫具を疊み、我家の方へ步みを運ぶと。

『オイ淺岡君ぢやないか』

と後ろから呼ぶ者がある、振向いた靜也は、一寸不審かしい顏をして洋服姿の背の高い男を見たが。

『オ、久留島君ぢやないか』

『矢張君だつたか、アヽ久振りに遇つたナア、愉快だ、實に愉快だ、僕アこんな愉快な事は無い』

と左も歡喜に堪へぬ聲、久留島は名を常雄と呼んで、靜也と一緒に京都美術學校の同窓生であつたが、常雄は工藝科に居て專ら建築工藝の事を研究し、卒業は同時にして、靜也は東京へ常雄は京都へ殘つたので、別れてからは相見る機會がなく、六年振かに、他人からは兄弟かと思はれた程仲の善つた友達が此處に計らずも手を握つたのである。

見るから快濶の氣象が溢れて、活潑な擧動が學生時代と少しも變らぬ常雄は、喜びに輝く面で懐しさうに靜也を見たが。

『オイ君は何ていふ痩せ樣だ、病氣かい』

『ア、長い間寢て居たよ』

『左樣だらう、病人樣に違ひない、天才病の腦患だらう、以前から能く痛い痛いと云つてたなア、それでモウ快いのかい』

『少し輕快になつたから二三日前から斯して出掛けたのだ、君は何時東京へ來たね』

『僕も來てから三日になるが、三日間の事業は君の居處を探すのぢやつた、音信を絶て了つたから全然消息が解らない、僕は髭や鉋だが君は筆を持つ商賣に不似合な、何故手紙を呉んのだい』

靜也は憮然として。

『筆商賣も長らく休んだ、殆んど命を奪られかけたよ』

『展覽會の評判にも注意を怠らないに、君の作品が些とも出ない樣子だから、僕ア腹が立つて堪らない、中途で倒れる君ぢやない、一體何をして居るんだらうと思つてね、種々聞合したのさ、すると、淺岡はモウ美術界の人ぢやない、此頃は妙な……君、僕ア人の噂を聞いた儘話すのだぜ、事の眞僞は君が決定を與へて呉れたら可いのだ、可いかい、此頃は淺岡は妙な女と關係して何處かへ隱れて了つた、モウ美術家としての生命は彼には無い……と斯云ふのだ、僕ア君が京都に居た時の秘密も能く知つて居る、だから容易にそんな事は信じない、信じは爲ないけれど君を思ふ僕の耳に決して嬉しい噂ぢやなからう、で一度過つて疑問が解決したいし、顏も見たくツて堪らんから、今度用事があつて出掛けたのを幸ひ、其の用事を拋棄つて探して歩いたのさ』



『君は姿も心も變らない僕は實に感謝する』

と靜也は泌々と嬉しい友の顏を見る。

『感謝？はツはツはゝゝゝ、久振に遇ふ早々、問題を出したり感謝したり爲なくても可らう、默つて手を握つて居ても二日三日は經ちさうだ、イヤ能く命を取留めて呉れたよ、君は能く女に惚れられたが』

と常雄は大きな聲で構はず云つたが。

『僕を惚れさした友人も君一人だ、はツはツはゝゝゝ』

## 《二十四》

新緑の樹陰で、靜也と常雄は懐かしい顔を合せて積る話に耽る。

『フム、それではあれから文ちやんを君がズッと育てゝ來たのか』

常雄は、靜也と藏間富子の戀を始めから知つて居たのである、富子が無情にも變心をして靜也を捨て、兩人の仲に出來た文子を男に渡して他へ緣付いた時、肝腎の靜也よりも常雄が憤つて藏間家へ談判に出掛けやうとした事もあつた、靜也は之を止めて何うしても遣らなかつた、男親が育て、男親で育てらるゝに互ひの運命だと云つて、不自由な下宿住ゐに嬰兒を引取り乳母を雇ふて育てるのを見て、常雄は涙を流した事も度々あつた、其文子を今日までもまだ男手に育てゝ居ると聞いて彼は驚かされたのである。

『僕が育てないで誰が育てる、自分の子ぢやアないか』

と靜也は平氣な調子で答へたが、其顔には暗い憂色がかゝる。

『京都に居た時も貰人があつたのを、君が拒んで居たが……フムそれア實に辛酸を嘗めたらなア』

『運命ぢやないか、甘んじて服從するさ』

『運命に服從？』

と云掛けて常雄は默つた、彼は心の中でこゝ十年の間の靜也の苦勞を想察つて、切ない同情の念に堪へぬのである——學校に居た時も天才と恐ろしがられ、東京に出てからは其處女作に世間を驚かした、非凡な手腕を有つて居る彼程の男が果ない戀の記念文子といふ足手纏ひがある爲に研究も事業も妨げられて、一度はあれ程に濟いた名を人々が忘れて了ふ程に深く世間に隱れ病ひには惱まされる、腦病は持病ではあつたが、種々の苦勞が原因でいよ〳〵惡くなつたのだらう、それにつけても憎いのは文子の母の藏間富子である、東京の華族へ嫁入したと聞いたが、今は何うして居るのだらう——常雄は一度は其面に唾を吐きかけて遣りたいと願つて居る富子の事を思出した。



『君、あの女は何うしたい、東京に居るのだらう』

『あの女？、惡魔の事か』

と靜也は不愉快な色をする。

『左樣だ、君の爲に惡魔なら僕にも惡魔だ、あの惡魔は今何うして居るんだ』

『伯爵の令夫人となつて人間の榮華を極めて居る相ぢや』

『伯爵夫人で榮華を？、左樣かなア』

と常雄は太い洋杖で忌々しさうに草を毆つたが。

『君が文ちやんを連れてこの東京に居る事は知らないのかね』

『文子を母親に渡さうと骨を折る者があつて、薄々は知つてる樣子ぢや』

『文ちやんを母親に？、君の爲に盡力して呉れる者があるのか、ウ、それは結構だ、左樣なれば寶に君の爲に大いに祝さんけりやならぬ、僕はあの當時の意見と今も變らぬ、女の子だから本人の爲にも君の爲にも母親につけるのが得策だ、君の運命論には血も涙もある、僕は君が今日まで文ちやんを育てた大事業に全く敬服する、雖然、君、能く考へると君にはまだそれ以上の大事業がある、重大な天職がある事は君が自覺してる筈ぢや、君はモウ其事に反對はすまいな』

『僕は迷うて居る』

靜也は俯向いて力のない聲でいふ。

『迷うて居る？、何う迷ふて居るのだ、今の悲慘な運命に甘んじて、天職の大事業を拋つといふのか』



『た父樣』

## （二十五）

と言つて文子は其處へ佇立る、常雄はそれと見ると。

『ヤこれが文ちやんか、オ、文ちやんだ、これは何も驚いた、大きくなつたねえ、實に立派な發達だ、文ちやん、僕を知りませんかね、はツはツはゝゝゝ僕に小便を浴けた頃だものなア、知る筈はないね』

文子は顏を赤くして父の背後に隱れる。

『この方は久留島さんと云つてな、ほら前の小さい時大變た世話に爲つた方ぢや』

父に敎へられて叮寧にお叩頭をする、常雄は瞬きもせず凝と其顏を見て居たが。

『能く似て居る、實に能く似て居る、眼と口元なぞは酷似だ……美人系を引てゐる』

獨言のやうに言ふ。

『君、そんな事を聞くのだツて僕ア不愉快だよ。何故惡魔に似たと思ふと……不快に堪へられない事がある、それに、それに此子を手離すことに躊躇する、迷ふといふのは何だらう』

又腦が痛むか、頭に手を當いて靜也は眩しいやうな眼をする。

『それは理窟で解決の出來る問題ぢやない、然し君』

と常雄は思入つた調子で聲を潛めて。

『僕ア斯なに美くしう大きく成人した文ちやんを見て、いよ〳〵今言つた事の實行を君に逼りたい、情の人たる君の耳には、今僕の言ふ詞が或は頗る冷酷に聞にやう、血も涙も無い男と思ふかも知れない、雖然無情反つて有情で僕の眞意は先刻言つた通りだ、能く考へて呉れまへ、君の爲に骨を折つて文ちやんを母親に渡さうといふ人の意見は何いふのか知らんが、多分僕と同感だらうと思ふ、此手枷足枷を嵌められて天職の大事業を拋つのは君にとつて實に悲慘な運命ぢやが、文ちやんの爲にも決して幸福ぢやない、モシ母親に養はれる事が出來れば、君父子に新しい生命が來たといふものぢやのぢや』

『有難う、能く解つてる、僕も復活の人となつて事業を成就させなきやならんといふ精神は此



胸に燃えて居る』

『それでこそ君だ、奮發して呉れたまへ、今の齟齬する時ぢやないか』

文子は難かしい話の間、草の花を摘んで遊んで居たが、此時そつと父の傍へ來て、小さい信玄袋から紙に包んだサンドウイツチと牛乳の瓶を出す。

『これあの春姉さんが、お父樣が退屈してらつしやるだらうから進げて來いツて、牛乳も溫めてあるの』

『ヤ御馳走だなア、僕にも一ツ呉れませんか』

と常雄は戲れながら。

『君、却々家庭趣味が溢れてるぢやアないか、春姉さんといふのは誰だね』

靜也が何か答へやうとすると。

『宅の姉樣よ、お父樣の姉樣ねえ』

と文子は說明顏に言ふ、人の噂と思ひ合して、常雄は一寸面白くない事を胸に浮べたが、左あらぬ體にして其日は別れた。

静也は文子を連れて我家へ歸る途中、竹早町の通りで、高燥な廣い地面を高塀で取圍んだ、華族の邸宅らしい門前を通りかゝると、文子は不意に其處へ立止つて。

『あゝ、わ母樣の宅此家よ』

と大な聲、静也は吃驚して顧向くと、美しい花崗石の門柱に——華族財滿義則。

## （二十六）

静也は、昔の戀女藏間富子、文子の生母の富子が、自分の詑住居とツイ目と鼻の此處に居やうとは夢にも知らなかつたのである、財滿義則といへば、今貴族院の黒幕策士として政界に大勢力を占め窟の力も大した伯爵華族である、富子が東京の華族に嫁入りした事は其當時から知つて居り、春次の話に依つて、さる伯爵の夫人となつて榮華に世を送つて居る事も知つて居たのであるが、何處に住む何といふ華族とは聞くに不愉快で訊ねもせず氣性を知つた春次も語らなかつたのである、それが今計らずも門前を通りかゝつて、一度活人畫の時に春次に連れられた文子が『わ母樣の宅此家よ』と叫んだので始めてそれと覺り、若葉の綠滴る如き下、宏壯な花



崗石の大門を顧向くと。

鐵骨の扉一杯に押開いて、十間あまり奥遙に幾棟かを連ねた廣大な和洋の建築は甍の光り青葉と映つて閃々と眼を射るのである。

『あ洋琴が鳴つてよ、あれ屹度わ母樣よわ母樣よ、わ母樣が奏して居らつしやるのよ』

物狂はしいばかり文子は門近く進まうとする。

『何をするッ』

と静也は叱つて其肩を押へ、言ひ難い激しい感情の昂ぶるのを制へて靜かに佇む、森閑とした邸内から、洋琴の音色が聞える、十年の憤恨が一時に發して、滿身の血が逆さに流るゝかと堪へられない感情の静也の耳にも、吹くともしもない春風が輕く花瓣を動かすやうに、高い低い樂譜の調べは微かに聞ゆるのである。

『ね、わ父樣、あれ屹度わ母樣よ、わ母樣は音樂もわ上手ね、わ座敷にいろんな樂器があつたわ、あれ……面白いのねわ體操の時あんなので踊るのよ』

『……』

『わ父樣、妾わ母樣にあんなのが習ひたいわ、わ母樣は何でも知つた方でせう、踊りでも知つ

てらつしやるのよ、活人畫の時大勢の方とグル〳〵廻はつて踊つて居らツしツて、本統に綺麗だつたわ……』

『……』

『妾た母様にあんなのが習ひたいけど……た母様の宅華族だから何でも出來るわねゑ』

靜也は文子の肩を押へた儘、眼を閉いで默つて居る。

忽ち蹄の音がして、一頭立の幌さうな幌馬車が玄關に廻つた、樺褐綸の外套に線入の饅頭笠を冠つた馭者が、キユツ〳〵と舌を鳴らすと、肥太つた駿馬は一聲高く嘶いて蹄を縺かす、幌を開いた馬車の上には、雪よりも白い日傘を傾けた、一個の貴婦人と侍女らしいのが乘る、其車輪が門際の敷石に觸れる時、靜也は嚇しても叱つても動かぬ文子を横抱きにして暗闇の中を脫ける思ひで、我家の方へ一散に走るのであつた。

## （二十七）

久留島常雄は其翌日靜也の許を訪問した、友思ひの常雄は――靜也から聞き質さねばならぬ大



事がある、それは世間の噂に靜也が妙な女に關係して其の爲に勉強を廢し、折角名を現はしかけた中途で志を挫いたと云はれるのは眞實であらうか、昨日文子が春姉さんと云つた、妙な女といふのが其素姉さんではあるまいか、一ツ腹から生れなかつたのが不思議な位、仲の善い友人であつたが、學校卒業後は西東に別れて互に糊口の營みに逐はれ、思へば疎い月日を過したが、久振りに遇ふて手を握ると、油然として湧く嬉しい友情の、親兄弟とも又格別の情味は胸に溢れる、京は相國寺の座敷借をして、自炊三人組と云はれた學生時代は面白かつた、三人の中の一人瀧一夫といふのは、學才共に秀でた有望の男だつたが、惜しいことに零落不羈が禍を招きて、建築科を卒業といふ間際に、教師と衝突して自分で退校後、行衛が判らなくなつた意氣の合つた三人の當時は――云ふを休めよ他郷辛苦多しと、同胞友あり自ら相親しむ、柴扉曉に出づれば霜雪の如し、君は泉流を汲み我は薪を拾はむ――思出しても嬉しい友誼であつた、中にも二ツ年長の靜也と自分は、他人からも兄弟と云はれた互にも其意氣で睦み合ふた仲である、靜也が藏間富子の爲に悲慘な戀に葬ばれ、文子を下宿に引取つた時、自分は有ん限りの力を盡した、雖然眞操の腐つた女には、二世を許した夫の聲も其友人の聲も耳には入らなかつた、女の爲には實に悲慘な經驗を嘗めた靜也である、其靜也に再び女の事が纏綿る……その

爲に天職の事業を抛つて世に隱れる、聞捨にして置く譯には行かぬ瞬である、種々と事業上の相談もあつて態々尋ねて來たのだけれど、先づその眞相から確めねばならぬ――で常雄の話は例の快濶な調子の露骨で。

『昨日君に眞偽の決定を逼つた問題ぢやが、君は今も獨身生活を續けて居るのかね』

『妙な女の問題か』

と云つて靜也は當惑の色を浮べたが。

『文子と兩人さ、君はモウ娶たらうね』

『僕？、僕は依然獨棲主義の一貫ぢや、尤も學生時代とは多少主張が變つたよ、最善最美理想の極致といふ女に出逢つたら直に其女と同棲主義の實行ぢや』

と云つて常雄は高笑ひをする、此友の愉快氣に笑ふ樣を見ると、靜也はツイ誘はれて屈托を忘れる、物の隱される仲ぢやない。

『世間は妙な女といふだらう、君だから隱さずに言ふ、一度戀に破れた僕は、東京へ來てからも孤獨の感に堪へなかつた、自分の周圍が宛然墓場の樣に感じられる、或時は悲觀に餘つて自殺を企てた事もある、文子が居なかつたら或は君に墓を弔はれるのだつたかも知れない、そんな煩悶のに仕舞が腦病だらう、長い間筆を捨て倒れた結果は察して呉れたまへ、悲慘な生活難ぢや、それが人の紹介で此家の內へ文子を暫く預けた緣で、此座敷を借りて住む事になつたのだ、妙な女といふのは』

『家付の娘にでも惚れられたのかね』

『はツはツはゝゝゝ、さう簡地に來られては困る、まア茶でも煮れて終々話さう、オイ文子』

靜也はモウ學校から歸つた筈の文子を頻りに呼ぶ、返詞の無いのも道理、恰度其頃は、文子の姿が竹早町の財滿伯爵邸の門前に現はれた時である。

## 《二十八》



文子が生みの母親を慕ふ切情は、活人畫の夜に始めてそれと思ひ當る懷かしの人に見ゆるから二度目には上野の櫻の下で美くしい姿の袂を摑んだ時から、小さい胸にモウ堪へ切れぬ程の熱となつて、繪に描いた樣な美くしい母、位尊い華族の母を、寢た間も忘れた事はないのである

お父樣も春姉さまも、それは可愛がつて下さるけれど、學校のお友達の、美イちやんや花

子さんの様に、自分にはお母様といふものが無い、お父様と春姉さまの上に、モ一ッお母様があつたら何なに嬉しからう――幼稚心にこの寂しい憂ひを抱いて居た文子は、一たび富子を我生みの母と意識に及んで、世間を裏く百千の情實にも、人間を支配するあらゆる運命にも、そんな事にはまだ何の交渉もない無邪氣な心から、只一圖に懐かしい慕しい、情を滿足させたいと逸るのである。

昨日計らずも財滿邸の前を通つた靜也と文子は、父子別々の劇しい感想に打たれたのであるが一度活人畫に連れて貰つた時の記憶が朧げに殘つて、文子の夢は幾度こゝへ飛んだか知れぬ程であるから、我家から遠くもない此處が――美くしいお母様の住居――と知つてはモウ矢も楯も堪らず、今日學校の歸途を廻つて、文子は密と再びこの門前に佇つたのである。

『お母様は斯な立派な宅で今頃何をして居らつしやるのだらう』

大きな花崗石の門柱へ小さな體軀を寄せて、若葉の積翠の中に浮く宏大な邸宅の光景を眺め、文子は斯う獨語つのである、暫時すると昨日の様に洋琴の音が漏れて來た。

『あ』

と云つて文子は一歩を門内の敷石に踏入れる、顔は充血して眼は輝き、體軀は樂の音に引付けられて動くやうに、五歩六歩と小さい滅下駄で管目正しい砂利の上を奥へ進む、森閑とした邸内のこの跫音に、居睡りから覺めた玄關番の老人は、大口を開いて欠伸をしながら、小倉袴の皺を叩いて起上ると、玄關先に怪しげな小娘が佇つて居るので怪訝な顔を又一度手で擦る。

『コラ〳〵其方は何ぢや、何しにお玄關前へ來た、あゝコラその穢い下駄で砂を踏んだら何ならんが』

と大きな聲で叱り付ける、馬丁も出て來た。

『何でわお前ア、わ、お母……お母を尋ねて來た？、戯談ぢやアねわ、こゝはお屋敷の玄關だ早く出ないと叱られるせ、行きねわ行きねわ』

と文子の肩を捉まへる。

『途方もない迷ひ子だはツはゝゝゝ』

と玄關番の老人は大笑ひをする。

『妾お母様にお目に掛りに來たのよ、をぢさんお母様の處へ連れてツてお呉れよ』

# （二十九）

『お母様の處へ連れて行け？』

玄關番の老人は呆れて文子の顏を眺る。

『妾のお母様がこゝの宅に居るのよ、妾能う知つて居るの、をぢさん伴れてツて頂戴な』

『オイ吉公、これは飛度お臺所と玄關を間違へたのだ、彼方へ連れて聞いて見て遣るが可い、ヤレ〳〵飛んだお客樣の御入來だぞ』

と老人は呟いて奥へ入らうとする、其袂を確と握つて。

『をぢさん、妾のお母樣當邸の奥樣よ、臺所なんかに居やしないの、奥の、ホラ美くしい西洋造りのお居間ね、あそこに居らつしやるのよ、早く伴れてツて頂戴な』

『ヤ此奴が途方も無い事を云ふ、其方の母が御當家の奥樣？、ウフツ、オイ吉公、豪いものが出て來て、お前さんが盡間からグイグイ居眠つてばかり居るもんだから、こんな魔が出て來たのう、弱らせるぢやないか』

馬丁も吹出して。

『原田さん、お前さんが盡間からグイグイ居眠つてばかり居るもんだから、こんな魔が出て來たんですぜ』



『魔？、はツはツは〳〵〳〵折角一睡を催して居る所へ魔がさしたのだな、惡い邪魔だ、賴むよ何とかして呉れ、今素晴しい豪氣な夢を見て居た所だ、モ些とあの續を見ん事には何むなら

『ヘン、その續きなら見ない方が樂みですせ、廊下で大い尻を捻つた返報に、毛生藥でも呉れるところで覺める奴さ』

『コレ人聞きの惡い事を云ふなよ、これでチヨイ〳〵女の子には好かれるテ』

『違にねね、その狂氣娘だツてお前さんの袂を放しやしない、オイお前そのお方さんが好きだらう、放さないが可いせ』

『オイ〳〵無茶を言ふな、コラ、其方はナル程氣が觸れて居る樣ぢやな、小供の狂人は餘り見た事がないテ、可愛相なもんぢや、コラ能う聞けよ、當邸はな、財滿樣といふ御華族のお屋敷ぢや、其方達の母なぞが來る處ぢやない、よしか、解つたかの、さ、解つたら早く出て行くのぢや』

『をぢさん、御華族ツてこと妾知つてるのよ、お母樣も御華族だわ、妾嘘なんか言やしないの

早く伴れてツてた母様に逢はして頂戴よ』

『これは始末に終へん哩』

と老人は弱つて了つたが、何か氣附いて懐中から皮巾着を取出し、白銅一ツを紙に包んで。

『さ、これをたちさんが遣るから早く行くが可い、此處でそんな事を云つて居るとな、恐い目に逢ふぞよ、さ、行つた行つた』

文子は手に握らせられた錢の包みを、板の間へ投付けると、眞赤な顔をして。

『をちさん妾に乞丐ちやないわ……妾可いから、獨りでた母様に逢ふて來てよ』

さツと兩人の間を潜つて座敷へ駈上つた老人は肝を潰して、小さい體軀をムヅと抱竦ぐと。

『此奴が此奴が、俺に貧乏させた上、飛んでも無い事をしやがる、吉藏ツ、角の交番へ行つて巡査を呼んで來い巡査を』

程なく警官が來て、取敢へず文子を交番所へ連れて行つた、巡査の姿を見て始めて泣き出した文子は、手で顔を覆ふて門外へ出る、其母親の手弄みか、洋琴の音はまだ聞ゑる。



植辰の離座敷では、主人靜也と久留島常雄が對座で、常雄の聲は太く、靜也は沈んだ調子で、談話は餘程込入つた樣子である。

『すると君は、其の春次といふ當家の娘……藝者だな、其藝妓から熱烈な愛情を運ばれて、文さんの世話や何かをして貰つた關係から、遂に情交を結んだといふのか、イヤ能く隱さずに云つて呉れた、世間に隱す秘密を僕だけに打明けて呉れたのは實に有難い』

と云つて常雄は膝を進ませる。

『ナル程世間の奴らが、妙な女と云つたのも無理はない、女が藝妓だから一寸目立つたのだらう、が何でも可い、藝妓でも女郎でもそんな事は戀の成立條件に關係はない、深窓に育つて高等の敎育を受けた當世の令嬢、藏間富子があの醜態ぢや、子まで出來た仲の君を捨てゝ、黄金といふ惡魔の毒氣で眞操の鏡を曇らせて、義理も人情も無視して華族に嫁入をした、僕ア富子が君に對してあの醜劣なる行動を執つたのを見て、それ以來當世の女子敎育といふ事に敵意を有つに至つたのぢや、だから敎育だとか身分だとかそんな事は何うでも可い、僕の

所謂最善最美理想の極致といふ女は、れ互ひ男兒の身命を打込んで惜しくない戀の本尊といふ意味ぢや、姿だとか形だとか教育だとかそんな物は枝葉で問題にならぬ、僕ア斯う考へて居るんだがサテ却々見付からん、イヤ見附けやうと思つて探す樣なのぢやアモウ戀ではあまいよ、はツはツはゝゝ』

靜也は默つて聞いて居る。

『そこでぢや、僕は君に忠告がある、忠告といふのは穩當にないよ、意見だ、意見を吐かせて呉れたまへ』

と常雄は改まる。

『思ふ存分云つて呉れ、長い間君が至誠の聲を聞かん、僕ア愉快に堪へない』

『左樣云はれると困るが……ナニ他ぢやない、今の女の問題ぢや、君は一度戀に失敗したらう無論其戀は最初から女の虛僞の爲に神聖のものではなかつた、雖然君は其戀の爲に大きな犧牲となつた、今現に文子さんのある爲に殆ど一生の事業を廢しかけて居るぢやないか、僕がこれを云ふのは徒らに君の失敗を繰返すのぢやない、君をして再び戀の失敗者ささせたくない、言を換へて云へばだ、君をして戀の成功者たらしめたい、肉を喰つても飽足らぬ藏間富子がこの東京に居るのは幸ひぢや、彼に向つて強烈な復讐が爲て見たいと思ふのだ、それで君が今關係して居る春次といふ藝妓が、果して君の信ずる如く、熱烈な愛情を君に捧げて居るか何うか、これが神聖な戀であるなら實に有難いが、万一だね、高等の敎育を受けた富子さへ如彼だ、賤業婦と世間から卑めらるゝ藝妓の春次に、そんな尊い品性はないとすれば、僕ア今度こそ、君と女に何程憎まれても構はん、兩人の戀を破壞しなきや置かぬ』

## （三十一）



靜也と常雄と談話半へ、表から周章しく辰五郎の家内が入つて來て。

『淺岡さん、早く入しツて下さい、文ちやんが巡査に伴れられて歸つて來ましたよ、早く入しツて』

『ナニ文子が巡査に？』

と靜也は顏の色を變へて起上る、文子は財滿邸の玄關先から巡査に引渡されて交番所へ伴れて行かれたが、何を問はれても一切口を噤んで語らぬ、小供の事であるから巡査も強ひては取調

べす、住所を聞いても隠すのを、鞄の中に入つた學校の通知簿で知つて、今親へ引渡しに來たのである、靜也は娘が巡査に伴れられたと聞いて、我を忘れて表へ駈出ると、袴だけ夏服に變つた逞しい巡査が門口に起つて居る。

『貴郎が此娘さんの親御ですか』

『ハイ父です、其娘が何か不都合でもしたのですか』

万一間違つた事をして呉れたのではあるまいかと、男親の胸には波が打つ、不自由勝に暮すから、身の衣裳から學校の道具なぞに、充分手が廻らず、森次の配慮で見苦しい服裝はさせて居ぬけれど、餘所の子の美くしい衣服や何かを見ては、子供心に羨望の念は起るだらう、そんな事から万一や卑しい行爲でもして、警察の手に罹つたのではあるまいかと、靜也は巡査の答いかにと手に汗を握る。

『イヤ別段不都合といふ程の事ぢやないですがね、妙な事を爲られたもんだから……あの竹早町に財満伯爵といふ華族の屋敷がありませう、此方はあの屋敷に何か御關係でもあるのですか』

財満伯爵の屋敷と聞いて、靜也はハッと思つた、偖は母を慕ふ文子が……昨日計らずも其門前を通りかゝつた時、何と云つて聞せても、た母様に遇はせて呉れと強請んで歸らうとしなかつだ、其處を慕うて獨りで出掛けたのか。

『イエそんな華族の屋敷なぞと何等の關係も有ちません』

聲は憤怒に漸激する、巡査は不審氣に首を傾げて。

『ハヽア、そいぢや全然譯が分らん、斯うです、この娘さんがあの屋敷の玄關へ立つて、是非とも母様に遇はせて呉れ、自分のた母様は當家の奥様ぢやからと斯う云つて容易に退去んのです、そいで止むを得ぬから本職に說諭を願出たのですがな、種々訊ねて見たけれど泣いてばかり居て事實の眞相が明瞭せんです、そいで兎も角も保護を加へて連行して來たです』

靜也は傍らに泣伏した文子を睨んだが、何にも云はずに、巡査に厚く厄介を謝した、巡査は注意なさるがよろしいと云つて引上げる。

當雄は一什始終を聞いて、叱られるのを恐れて座敷の隅に小さくなつた文子に向つて。

『文ちやん、貴方はそんなにた母様に遇ひたいかね』

と云つて何か疑と考へる、靜也も腕を組んだ儘眼を瞑つて深い思案に沈む、暫時すると當雄が

『これア實に悲慘な事實ちや、オイ淺岡ッ、文ちやんは母親に渡す事だ』

## （三十二）

何處までも母を慕ふ文子の可憐な心情に同情して、母親に渡すが可いと叫んだ常雄は。

『昨日も云つた通りで、君が天職の大事業を遂行する上にとつては、文ちやんは手枷足枷だらうと思ふ、それに斯う母親を慕ふのは、眞に幸ひぢや、これは是非共母親に渡すが可い、君も文ちやんも双方の幸福だよ』

靜也も思案を決めたらしく。

『僕ア今日までに此事でどれ程煩悶したか知れない、長い間非常な辛酸を嘗めて男の手一ツで育てゝ來た、それに育てた僕よりも藥の上から捨てた無情な母親を慕ふ、現に僕に隱れて其家へ……僕の爲に仇敵の家へ行くに至つては……決心した、母親に渡す事が出來得るならば渡さう、さうして僕ア父子の緣を切る』

『緣を切る？、緣を切らなくても可いだらう』

と云つたが常雄は文子の爲に思はず涙を催すのである、此娘の運命は、父に別れるか母を失ふか、兩ツに一ツは免れぬのである、俗世間と超脫した美術家氣質の父の許に養はれるが幸福か世に時めく貴婦人を母に有つのが仕合せか、明日の運命は判らぬ人の上ではあるが、女の子は女親に付くといふのは極めて自然に近い聲だらう、で文子が母親に養はれる事になつたら、無論靜也の云ふ通り父との緣はそれ限りである、富子は靜也の爲に惜むべき惡魔である、靜也でなくても其肉を喰つて遣りたい女ではないか、緣を切らなくても可だらうと言つた詞が餘り無意味であつたと常雄は我ながら可笑しかつた。

『決心する以上は、ナニ父子の緣を切る位の僕は苦痛ぢやない、これからの問題は只其方法ぢや、夫と誓つた僕は兎も角、子と生れた文子を抛つた富子が今更これを引取つて養ふ愛情を有つて居るものか、あの惡魔の身體にそんな優しい血が通ふて居ると思つたら間違ちや』



常雄もそれを考へぬではない。

『左樣だ、それは大問題だがね、併し今彼が華族の令夫人となつて、世に時めいて居るのが幸ひぢや、秘密の罪惡が曝け出されるのを恐れたら、如何なる方法を以ても文ちやんを引取る事に不承知は有るまいと思ふ』

『然し愛情の無い母親へは渡したくない』

と靜也は切なさ相に言ふ。

『無論ぢや、雖然親子の愛は又格別だ、それは生んだ當時はまだ幽も若かつた上に、種々と周圍の壓迫もあつたらう、決して同情するぢやないが、今は境遇も思想も變つて居る、斯なに立派に育つた女の子を見たら、惡魔の心血に一點の情火が燃にぬといふ事は斷じて無からうと信ずるのだ、春次さんの考へは僕ア知らんが、その內に一度遇ふて他に尋ねたい事もある君が安んずる事を得て、文ちやんの前途も幸福であるといふ見込みさへついたら僕達で種々畫策しやうよ、これが君の今の境遇を發展させる第一着の手段ぢや』

常雄は眞心を傾けて說く、靜也は友の深切を謝して、まだ泣咽りをして居る文子を吃と見る と。

『オイ文ツ、汝も十才になつたのだから、れ父さんの言ふ事を能く覺えて置くがよい、汝の母は此れ父さんと汝を捨てゝ今ではあの華族の屋敷へ嫁に行つて、外のれ母さんになつて居るそれに汝は其外のれ母さんを慕ふて止まない、それでこの久留島のをぢさんが骨を折つて、汝をれ母さんの子にして遣らうかと仰有るのだ、れ前はれ母さんの所だつたら外の家の子にでもなるのだな』



文子は何なに叱られるかと、小さう畏まつた膝を固く合せて默つて居たが、潤み聲で。

『れ母樣の家華族よ、れ父樣も春姉さんも皆一緒に行くと妾嬉しいのだけれど……れ母樣乾度可愛がつて下さるわ……妾一人でも行かうか知ら』

靜也は我兒の顏を見るに忍びず彼方へ向いた。

## （三十三）

榮華の世界の歡樂は盡きず、上野向島の花が散ると間もなく、木挽町の日本座は蓋を明けて、滿都の人氣は之に狂ふのである、長らく東京を去つて旅に漂浪ふた名優市川翫藏が一世一代の佐倉宗五を演すといふのが評判でもあるが、併しこれは眞の江戶ツ兒の最負連が騷ぐばかりで實は大阪から上つた和事師の名人中村紫雀が、二番目の天網島で十八番の紙屋治兵衞を見せるこれが呼物となつて開場前から凄じい人氣である。

圍十郎菊五郎の面影を、僅に幻影の樣な活動寫眞で偲ぶ樣になつてから、演劇道の寂しさは火の消ねたやう、藝も身體も小ぽけな後繼者が、興行師の喰ひ物となつて無闇矢鱈に大きな名を

戴き、名前負けやら未熟やら批難の糊塗手段に策略の底を拂ひ、眞面目な藝よりは運動で客を呼ぶ事が大流行となつたが、一方ではこの荒み果た演劇にヤレ藝術だのヤレ研究だのと聲ばかり道理な名をつけて、錦着て蒲團の上の乞丐と云はれた、封建時代の男地獄と少しも變らぬ者共が、貴顯紳士の邸宅へ公然で出入する樣になり、昔は簾を隔てゝ見物したといふ舞臺へ、やんごとなき貴婦人が現はれて、手づから花束を俳優に渡さうといふ、合點の行ぬ事だらけ、何なるだらうと憂慮する老人もあつたが、貴婦人の俳優買ひが大流行する位ゐに止まつて幸ひに大した事もない樣子、俳優には藝妓が附物であつたのが、今は氣の利いた俳優は貴婦人に買はれ、俳優の一ッも買はぬ婦人は交際場裏で顏の輝かぬ事夥しい――と、これは某雜誌の記事である。

大阪俳優中村紫雀は、近代の名人と云はれた中村歌左衛門の忰で、和事師の六代目と今其名の持囃された俳優である、年に四度は必ず日本座の舞臺に現はれ、寂しい東京の劇界を賑はして居るのであるが、四年前に初れ目見得の時から、美くしい容貌と、油の垂る樣な濃艶な藝風は地方趣味の輸入盛んな東京に甚く歡迎され、此優の乘込んだ演劇が倒けた事は一度も無いのである。



紙治が紫雀か、紫雀が紙治か、今度の日本座を見ねば演劇の話は出來ぬと罵り騷いで、押寄する觀客に今日で五日目打通しの針も立ぬ大入である、此日東の高棧敷四間を切落して、貴婦人の團體見物がある、これは花の頃に上野で開かれた護國婦人會の餘興に、中村紫雀が招きに應じて態々大阪から出演した、其返報の義理見物といふ事で、會の幹事たる彼財滿伯爵夫人富子は、目も覺める盛裝に美くしい容色を引立て、いづれを花菖蒲の艶姿の中で、高い梢の櫻の風情、化粧を盡した艶やかな面を、誇りの色に輝かせて傲然として幕間の場内を見渡すのである其傍にはれ氣に入りの山井男爵の夫人淺子が、可笑しい程肥太つた體軀を、富子に密着ける樣にして座る。

## （三十四）

天網島の幕は明いた、河庄の店先へ、小春を慕ふて來る紙屋治兵衛、魂ぬけてとぼ〳〵忙々、花道の出に先づ觀客を唸らせる。

大和家の聲は場内に轟いて、情界の機微を盡した門左のこの傑作は、明治の俳優紫雀の爲めに

書かれたかと思ふばかり、實際この優は治兵衛の適り役で一點難の打ちどころが無い、無心中か心中か眞實の心は女房れさんの、其一筆の秘密は知らず、三年戀と起請と共に抛付けて、小春の額上を足蹴にかけ、無念の涙を羽織に隱す、三人立の幕切まで觀客の心は治兵衛に摑まれ油壺から出た様な、トロリとした艶姿の、紫雀の面影は眼睛に喰入つて、棧敷の女客は皆な小春になりたさんになる。

高棧敷の貴婦人連は藝の批評だらう、面白さうな話で賑ふ、其恰度眞下の棧敷には新橋の藝妓が數十人、これは某老妓の肝入の櫻連といつて、衫澁の佐倉宗五で今度出來た見物である、上が梅なら下が櫻、舞臺より外の見物に幕間の眼は皆な此方へ向く、花道際に陣取つたのは會社員らしい三人の若者。

『オイ〳〵君、幕間に望遠鏡を弄るのは止せよ、見つともないぜ、顏を見てるぢやアないか』

『當方からも見て遣るのだ、撫ふもんか、ウ、素晴しいのが居るぜ、これア美人だ』

と頻りに望遠鏡を覗く。

『ドレ〳〵僕が觀察して遣らう、此方へ貸したまへ』

と引奪る。



『オイ君あの襟に金鎖りをかけた貴婦人を知つとるかい、あれが財滿伯爵の令夫人富子の方だソラ護國婦人會の幹事でやかましい女さ』

『美人だナア、傍にゴラ〳〵居る奴らア顏色は無いね、位は伯爵であの嗅ア持ちやア乃公なら滿足する』

『はツはツはゝゝゝ位と女の方で不足と仰有る』

『場中第一の美人だらう』

『イヤ俺は其審判に不服だ、ソラこの見當を見て呉れ、何うだ、絕倫といふのが居るだらう』

と望遠鏡を突付ける。

『藝妓だね、美しい事は美しいが……』

『能く見て居たまへ、ソラ此方を向いたあの鐵納戸の衣裳を着た美人さ、何うだ、公平な審判をして呉れ』

『ウムナル程、これも善い』

『善けれア說明をして聞かさうか、あれが新橋の春次だ』

『春次？、春次と云やア變り物と評判の女ぢやないか、美人だねゑ』

『上の伯爵夫人と何方が善い』

『問題だナア』

此時富子と山井夫人の姿は何處かへ消ねて了つた。

## （（三十五））

日本座の幹部技藝員數名の上に、客員として特別な優遇を受け、樂屋も故花十郎の部屋を當がはれた中村紫雀は、今演し物の紙治の役が濟むと、貴婦人團から贈られた名譽の花束を男衆に捧げさせ、己が部屋に歸つて來た、大阪から附添ひの人々、次室に大勢控へて、神聖の樣に崇め奉る御大將に、指一本動かせまじと、手足の樣に立働く、髮と衣裳を脫らせて鏡臺の前に座つた紫雀は、捧げらるゝ長煙管で香りの高い煙を吹かせ、鏡に映る自分の艶やかな顏を見て、口をキツと結んで舞臺の樣な眼をする、柱にかゝつた花束の、强い匂ひが一室に漂ふ。

『親方、あの山井樣の奥樣がお越だす』

と次室から若い男が言ふ、紫雀は物は云はず首肯く、衣擦の音がして、隔ての暖簾をソツと潛



つたのは、棧敷に姿の消えた山井夫人と、財滿伯爵の夫人富子である、藝妓や蓮葉娘が俳優の部屋へ入込んで風俗を亂るといふので劇場取締規則には某禁條が載せてあるが、法律といふ嚴正いものも、兎もすれば其威力を曲させられる紳士や貴婦人に對しては、些細な警察規則なぞが楯を突く事は出來ぬのである、富子はれた付添の山井夫人を從へて今日は過日の會の餘興に演て貰つた禮を親しく述べたいといふので、態々此處へ入つて來たのであるから、立派な公務を帶びた身は拔しい事も願慮い事もない筈であり相なのが、善い事は言はぬ世間が煩いからか、腹心の淺子に種々と魂膽させて茶屋の裏庭傳ひに密と樂屋に入つたのである、貴婦人の御來臨に、紫雀は急に肌を入れる。

『切望其儘になすツて、ほゝゝゝ飛んだ邪魔をしますね』

と山井夫人は馴々しい、自分の坐つて居た縮緬の大座蒲團を裏を返して富子に進めると、紫雀は頂邊の薄く禿げた頭を座に付ける樣にして。

『これは奥樣で、何うも穢い處へヘツへヘ、、恐れ入ります、皆樣がお陰でまあ榮う讃めて呉れはりますので、ヘイ有難い仕合せだす』

淺子はこの優の京阪詞が可笑しいといつて、何時も揶揄のであるが、富子は京都の生まれであ

る、懐かしいわねと云つて喜ぶ。

挨拶が済むと、運ばれた茶菓子で、雑談やら化粧談が始まる、富子は人に逆上せたか少し顔を赤くして、淺子の大きな體軀の後ろへ、初心らしく座る、交際場裡では、男々しい活潑な夫人として聞こえた彼に滅多に見られぬ圖である、淺子は流るゝやうな快辯で、笑はずには居られぬ話をする、紫雀は如才なく之に應答へをするが、其人を魅する眼はチヨイ〳〵と富子に注ぐ、花束が頻りに匂ふ、富子は強い香に酔ふ心地で、繪にあるやうな美男子の、紫雀の姿を見ぬやうにして見る。

## (三十六)

暫時すると、紫雀は風呂へでも行つたのだらう、部屋には來客の富子と淺子の兩人が殘つて、低い聲で密談に耽つて居る、舞臺は所作事元祿踊の幕が開いたらしい、賑やかな鳴物は人の心を浮き立せる。

『あれモウ幕が開いたやうね、行きませうか』



と富子は心にもない事をいふ、淺子は万事心得たもので。

『ほゝほゝゝ、入つしやいよ、人にばかり骨折らして、憎らしいわね』

と細い目で睨む、洗つて見たいのは此老夫人の素性である。

『でも皆さんが何か思つて居やしなくツて』

『ほゝほゝゝ妾が隨いて居て、そんな拙い事を爲ますかよ、御安心なすツて、それよか今日は是非にねね』

云はれて富子はパツと顔を赤くしたが、胸は怪しうトキめく。

『貴女此間言つた事を實行なすつたでしやうねあの手紙』

『はあ』

と小い聲、手紙といふのは斯である。

貴婦人の俳優ひといふ事が流行する、今東京の名題俳優中に貴婦人に色を賣らぬ者は澤山は居ない、怜悧な彼等は從來のやうに藝妓に買はれて金を捲上げる代りに、花柳社會に頭が上らず、對間同樣に扱はれる埋らぬ仕事よりは、曝露た時は危險ではあるが、收入がウンとあるから口直しの放蕩の出來、それに黒人と違て欺すに手は入らず、万一事發覺に及んでも相手は貴い

身分の弱點で悉く泣寢入に終り、何時や新聞で噂ましかつた男女感對某夫人の一件でも、七十五日より早く消て了つた、俳優の俳の字を人に非ずと書く時代と違つて、立派な藝術の人である技藝士である、馬車で樂屋入をする價値が付て來たら客も賤業婦と蔑視れる藝妓よりは貴婦人に買れる方が所謂向上的である、といふ逆理至極な見識から高い値段で盛に買はれる、買るから買ひ買ふから賣て、そこら中玄關へ馬車が横附の立派なれ邸宅には奥向に大い聲で云へぬ秘密がコロ〳〵轉がる、虚榮の滿足に飽き、黄金くさい噫をして、自分より遙か年嵩の夫に仕へて居る財滿富子も、御多分に漏れず、俳優買ひがして見たくなつた、れ氣に入りの山井夫人の煽動も大に其功がある事は云ふまでもないが、極めて華美を好む氣性の、陽氣な遊藝が好きで、爲るからとは云へ邸宅へ踊の師匠を招んだり、其他長唄鳴物の諸藝人、新柳で名の聞た藝妓達も、御撮負を張つて伺候するといふ有樣、勿論演劇が好きで俳優も厭ひでない中に、京都に居た時から大の紫雀ビイキであつた、其紫雀が東京へ來る樣になつてから夫人の娯樂は一ツ倍ねた、技藝を樂む間はその娯樂も清いのであつたが、同族の夫人達が頻りに艶めいた秘密を有つてるのを知つた富子は、俳優が自由になるものなら、今和事師で日本一の名が籟いた紫雀ほどの者を……この意中を見拔いた山井夫人淺子がた傍に付いて居るのだから墮落せずには



（一〇九）

居られぬ、公然の顯負は大分久しい以前からで、曾ては馬車に同乘の姿を見たとさへ噂する人もあつたが、今日まではまだそれ程の關係があるでもないらしい、然るに淺子夫人は、富子と紫雀の間を特別の關係に結びつける事は、自分に取つて大きな利益があるから、頻りに焦心つて此事を勸める、富子は遂に紫雀の許へ人に知らさぬ秘密の手紙を送つたのである、ところが紫雀は却々それと直に應じる樣なのではない、舞臺でも和事の名人であるが、髮を脫いだら恐ろしい女たらしの名人で、彼が種々の遊治郎に扮して喝采を博するのは、悉く自分が實地に經驗して來た科のた復讐であるとまで云はれた男である、世に時めく伯爵の令夫人から買はれる果報を、心の中では躍り上つて喜んだが、こゝが戀の極念と、なかなかに堅い所を見せて、暫時はじらしの幕を出す。

## （三十七）

富子と淺子の兩人が、紫雀の部屋へ現はれた頃、春本といふ芝居茶屋の裏庭へ、四邊を見廻しながら出て來たのは、藝妓春次である、今日は櫻連の仲間で見物に來て居るのであるが、眞上

の桟敷に財満夫人が來て居ると知つて、何か頻りに注意を怠らなかつた彼は、富子の姿が見えなくなると、其後を追ふやうにして此處へ來たのである、誰か待合すのか、囃子の音色も一寸遠い夕暮の寂しい庭に佇つて居ると。

『春次姐さん、何うもお待たせ申しました』

と、後から聲を掛けたのは、日本座の若者頭吉藏といふ男である。

『イヽエ此方が濟まないのよ、飛んだ無理ばかり言つてねゝ』

と優しい聲、吉藏は氣持の快い勇み肌の男である。

『戯談ちやありませんせ、姐さんからそんな事を云はれると俺は消ねッ了はなけアなりません切望そんな事は云はねゝで置いて下さいよ』

此吉藏の女房は、お露といつて新橋の髪結であるが、夫婦は始終情の深い春次から種々の世話になつて居るのである、で吉藏は今度春次から頼まれた任務を引請けて、こんな時が恩返しと嬉しい心で一生懸命に働いて居るのである、吉藏は四邊を見て低い聲になる。

『姐さん、喜んでお呉んなさい、お頼みの一件は全然握ッ了ひましたせ』

『エ秘密が知れたの』



と春次は身を寄せる。

『眞個姐さんの睨んだ通り、本統に呆れけねつて物が言へませんや、貴婦人だの華族だのと、御大層な事を吐しやがつて』

『これ大きい聲をおしでないよ、來て居るわねゝ』

『來て居るのは知つてまさッ、畜生ッ、馬車に乘つてた供を連れて、眞晝間に姦通をしに來やあがる、ふざけた御華族樣だッ』

『ほゝほゝゝゝ、そんなに憤つたッて仕樣が無いわねゝ、お向ふの御勝手なんだから、それで何か證據を押へて呉れたの』

『動きのとれねゝ證據はこれでさア、天罰だね、チャンと俺の手に入るんだから恐ろしいものです』

と云つて吉藏は懐中の紙入から大切に納つた紙片を取出して春次に渡す。

『手紙の端片だね、戀に……戀にふん別は益なしとれもひの儘を筆にてあらゝかしく……』

『その名前は何と讀むんですね、讀ねゝ樣に書いて置きやがる』

『紫の君……だねゝ』

『それア紫雀の紫でせう、その女の名前でさ、十三の子ッてねのは變名ですかい』

『十……三……子よ』

『ヘエ』

と吉藏にはまだ解せぬ。

『十は十、三は三ツね、ホラとみ子ちやないかね』

『アッ判じ物とけつかる、畜生ッ、紫の君へ富子、イケ圖々しい貴婦人女郎奴ッ』

春次は手紙の端を押戴いて、紙入に挿むと。

『吉さん、實は善い物を手に入れて吳れて難有うよ、妾これがあるとね、何時かた前さんに話をした一件ね、あれの埒をつけるのに何程だけ仕合はせか知れアしないよ、相手が御華族の奥樣だらう、藝妓の妾が楯付には大分骨が折れるからねね、正面で可なけア裏から衝突かる心算で、それでた前さんに斯んな無理を頼んだのさ、有り難うよ、屹度このた禮は忘れませんん』

『春次姐さん、た詞だがそのた禮を言ふのは止にして下さいよ、俺ア姐さんに御恩があるから言ふのぢやア無ねが、本統にた前さんの心意氣にア感心してるんでさ、斯云つちやア生の樣ですが新橋だッて柳橋だッて、カラもう意氣地も張も無ね、江戸ッ兒魂の藝妓衆は探したッて有りアしねねと云はれてるに其中に姐さんの樣なのが、一人でも居て下さるのは、俺らア嬉しくッて堪らねね、其姐さんが華族を相手に、意地ッ張の一仕事と聞いちやア、賴まれなくたッて働きまさア』



## （三十八）

藝妓春次は、財滿伯爵夫人富子に、其腹から出てツには戀人靜也の苦勞を減して、足手纏ひなしに、綸の道に盡くさせたいと思ふ一心から、富子を文子の生母と知つて後は種々に力を盡したのであるが、活人鑄の時の初めての母子の對面それから上野で文子が遭ふた時、二度ながら無情と云はうか冷酷と言はうか、富子は飽くまでも知らぬ顏を裝ひ、此頃では春次は屋敷への出入を止められて了つて、モウ夫人に取付く機會は無い事になつたが、それで引込む春次ではない、吉藏の言ふ如く、實にこれ程の氣性の女は今の花柳社會には珍らしいのであらう、藝は無くとも勤まるが、色を賣らねば身が立ぬ當世の

藝妓の身で、縹緻も藝も群を拔いた春次が、二十七の今までに、第一流の名聲を墜さず腕一本腦一本で稼いで來た苦勞は大したものであつたらう、代議士から繩付を出しても議會を盜賊の巣とは云はぬが、藝妓は轉ぶ者と心得られては、高い稅金と引換の鑑札は有ちながら、誰でも彼でも肉が資本の樣に蔑視して掛る、怪我に優しい目付をしてもスグに手を握られ、纏頭と心得て迂濶に頂戴すると、雜魚寢の夢は圓かならず、危險千萬な客ばかりの多い座敷で、變つた意地を立貫くには、餘程確りした精神で無けねばならぬ、敎育とても讀筆に不自由せぬ位の程度でありながら、春次は美しい性根を有つて生れたのであらう。

伯爵の奧樣と卑しい藝妓の意地較べに何方が勝つか待てお出よと、心の中に叫んだ彼は、爾來は富子の樣子を探つて、機會さへあつたら又近づいて、何んなに冷たい頑固な富子でも、自分の眞心で必ず說伏せて、文子と母子の名乘りをさせねば置かぬと決心したのであるが、一ツの秘密は二ツになつて、春次は此頃富子が俳優中村紫雀を頻りに贔負にし、疑へば妙な干係でもあるらしく見ねるとの噂を聞いて、今流行の貴婦人の俳優買ひに思ひ合せ、此秘密を探つて置いたら、自分の事業の上の益に立つ事があるかも知れぬと、偖てこそ豫ねて世話をして、當方の味方に賴まれる日本座の若者頭吉藏の賴み、富子と紫雀の關係を探らせたのであるが、今計



らずも富子から紫雀に送つた艶書の端片を手に入れ、貴婦人とあらう身の餘りの淺ましい亂行に呆れ返つたのである。

吉藏は猶詞を續いで。

『本統に私アお前さんの爲には働く積ですぜ、お前さんの爲に働くのは江戸ッ兒の爲でさ、藝妓衆ばかりぢやアねね、野郎だッて皆な駄目だ、意地ッ骨ッてねものは藥にしたくもねね、見なさい今度の翫藏を、永い間旅を流れて居たんだが、久方振に東京へ歸つて、お懷かしい皆樣方ッて、あの負けぬ氣の變屈爺が、舞臺の板を頭で叩けア、これが昔時の江戸ッ兒なら東京中が唸るのでさア、ヘン糞面白くもねね、生ッ白い唐茄子俳優の、甘ッたるい藝には感心しやがつて、今日で紫雀の見連が五組だッていふに、可愛さうに翫藏は、姐さん方の櫻連が始めてゞさ、私ア口惜しくッて堪らねね、意地も恥も知らねねで、それで名乘る事ア江戸兒さ、ヘン飄男面が聞いて呆れまさア』

吉藏は贔負俳優の不人氣に憤ッ腹を立て居る時であるから、春次に聞いて貰へば溜飮が下るといつた風。

『だからお前さんが、呆れ返つた貴婦人女郎に楯を突いて、伯爵の華族を向ふに廻して喧嘩を

するんなら、私ア命を抛つても働きますせ、御時世だから堅氣になつて、今ぢや全然老込んでますが、これでも隨分騒れたもんでね』

嬉しい人の心意氣に、春次は猶充分秘密を探る事を賴んで置く。

其翌日の事である、新橋の春次の住居へ美くしい俥で女客が來た、肥太つた體で江一格子の前に立ち、俥夫に案内を乞はせるのは、山井男爵の夫人淺子である。

## 《三十九》

二階で妹藝妓に稽古を爲て居た春次は、女中が持つて來た山井淺子の名刺を見て小首を傾ける、財滿の屋敷でチヨイ〳〵遇ふて知つて居る、富子夫人のお氣に入りの男爵夫人で、昨日も日本座で見受けたが、其男爵夫人が何の用事で態々藝妓の屋形へ來たのだらう、もしや文子の身の上に關した事ではあるまいか、母子の恩愛は兎も角、大秘密を握られて居て、それを其儘抛棄つて置く樣な智慧のない富子ではあるまいと思つて居たが、其話に來たのなら凶か吉か、金の力が有餘る華族の身分だから、夫に知らさずとも文子一人を保護する位は容易い事であらう、



引き取つて呉れる話なら、靜也も文子も共に運が開けて、自分の骨折甲斐もあつたといふもの萬望さういふ話であつて欲しいと、春次は勇んで遇ひに出る。

『マア山井の奥樣、貴方態くこんな處へお越下さいました、本統に恐れ多うございますわね』と華族の夫人と立て鄭寧に低う挨拶する、淺子は金樣の眼鏡越し、ヂロ〳〵四邊を見て、例の肥膨れた顏は小止のない愛嬌笑ひ。

『春次さん、妾その嚴かしい事が大嫌ひだから、寬ろがせて下さいよ、俥で搖れた所爲かして熱くツて可ない、脫がせて貰ひますよ、妾何處へ行つても此通りの我儘者でね、ほゝほゝゝゝ赦してお呉れ』

齡に不似合な華麗な色合の、羽織をサツと脫ぐと左も剛々し相に、我宅へでも歸つた調子、この呼吸で人を捉へるのが上手な淺子である。

『此頃は些とも顏をお見せでないから惡いのぢやないかと心配しました、それでも相變らず美くしい、全盛で結構だわね』

『ほゝほゝゝ奥樣、モウ春次も駄目でございますよ、齡の所爲でせう、醉興でなくツちやた座敷なんぞ滅多にかゝりやしません、財滿樣も到頭失敗ちまひました』

と、春次は、自分が富子に遠ざけられた事は淺子が能く知つて居る筈だと思ひながら態と話を其處へ持つて行く。

『妾その財滿樣の事で實は今日來ましたがね、妙な事で奥樣が立腹したんだッてねえ、妾が知つて居たら決してそんな事にするんぢやなかつたに、後で聞いて驚きました、あんな勝氣な方だからね、ツイ時の機みで怒られたのだらうけれど、ナニそれがた前が悪氣といふのぢやなし、言はゞ親切から出た事なのだから、今では奥樣も大層御後悔をして入らつしやるのよ出入を止めると云つたから、當方から呼びに遣るのも變だが、妾に何とかして呉れと仰有るぢやないかね、嬉しい御氣性だわねえ』

春次は、これが以前なら、貴い伯爵の令夫人から藝妓風情を詞を低ふしての挨拶と、有難う思つたかも知れぬが、裏の樓樓が見ては錦繍の有難味は少なく、娘時代には二世と契つた男を捨て、今は伯爵の令夫人といふ貴い身分でありながら俳優買ひの不品行をする富子と知つては嫌悪な感情が強く起つて、その人を崇拜する淺子らも、何うせ表面ばかりの美くしい御華族樣だらうと、愛嬌稼業の、厭な顏こそ見せぬが、心の中では『何を』と嘲つて居る、雖然文子と靜也の爲には嫌な思は堪へても、企てた事業を成就させねばならぬ、淺子が何んな使命に來た



のか、それが早く聞きたいのである。

## （四十）

淺子は風呂敷包を解いて、美くしい菓子箱を取出す。

『何か持つて來やうと思つたけどね、詰らないものだがた土産の印です』

『アレ奥樣そんなお土産なぞを頂きましては、妾何しませうね』

『それからね、これは財滿の奥樣から、何か買つてに呉れッてに傳托です』

と淺子は懷中から、水引のかゝつた奉書包を出して、春次の前に置く。

『財滿の奥樣からでございますか』

と春次はチヨと包みを見た眼で淺子の顏を眺める。

『貰つてに置きよ、却々能くた氣がつくからね、あんな方の御贔負を受けるのは德といふもんだよ、開けて御覽、失禮だけど夏着の足料位にはなると、妾チャンと睨んだのさ』

春次は癇癪の虫がグウと鳴る、藝妓なぞするもんでは無いと心の中では泣きたくなつた、淺子

は構はず卑しい事を言ふ。

『あんな方の御最負を受けるた前は本統に幸福だよ、少々は腹の立つ事があつてもね、斯うして譯が分つてるのだから辛抱が出來るわね、妾なぞも始終御機嫌を失敗ちや後で後悔するのさ』

そんな事は耳にも入れず、春次は包みを突遣つて。

『奥樣、妾財滿の奥樣からこんな物を頂戴する譯はございませんわ』

と云つて淺子は眼鏡越しに細い眼を光らす。

『これまでは大屋御最負を受けましてございますが、御承知の通り只今ではた屋敷の出入りも叶ひません妾……』

『アレそれはモウ濟んだ事ぢやないかね、出入も從前通りにして呉れる樣にと仰有るのだし、此金は何も別に意味があるのぢやないから、そんな事は云はない方が善いだらうよ』

『奥樣からた許しがありましても、妾此儘ではた出入を致したくないのでございます』

と判然と言放つた春次は、胸中の憤怒を徐々と口へ出す。

『奥樣、妾財滿の奥樣からそんな物でなく、何か御返事が頂かれる筈と、實は心待ちに待つて居たのでございますよ、た屋敷へは伺へませんので、昨日も芝居でた姿をた見受け申しましたから、一寸た目通りを致す筈でございましたが、大屋紫雀の舞臺に御熱心の樣子に拜しましたので』

ヅブリと皮肉の矢を一本、敵の額に射込んで置く、ナニ高が藝妓風情の女と、飽くまで見侮つて居た淺子は、ドンと突觸つて彈き反されたやうに、一寸周章てたが何氣ない體で。

『ほゝほゝゝ、妾ツイ話の順序を違へたもんだから、春次さん、妾今日態々來たのは、其奥樣の御返事を持つて來たのだよ』

と膝を進ませ、低い聲になる。

『た前が何時かた屋敷の活人畫の時に連れてた出だつた娘ね、あの娘の事だらう御返事が欲しいとた言ひのは』

『ハイ左樣でございますよ、奥樣の爲には』

『コレそれをた言ひでない、妾には何う彼も能う解つて居るがね、世間といふものは煩ひからね、今の御身分に兎角の噂は實にた憂いわねね、其處はた前も粹な稼業だから能う知つてるてに呉れだわね』

『ヘエ、それは能くお察し申して居りますが、妾此事は決して奥様をお困らせ申さうの何うのといふ卑怯な考へで致すのぢやないのでございますよ、藁の上から棄てられたお嬢さんが、不思儀にお母さんを慕ふので可愛想でならないもんですから、出來る事なら母娘の名乘をして、行末の力になつて頂きたい、男親一人の手で育てたこれ迄の苦勞を察して頂いたら、生みの母御だつたら、それに何御不自由のないお身分ですから、手段は何うにもして其娘を引取て頂く事が出來るだらうと、ほゝほゝ人様から、醉興とも變人ともお笑ひでございませうが、まあ骨を折つて居るのでございますよ』

『ナル程、お前のお言ひの事は能く解つて居るがね、それに就て相談といふのは、今云つた通りに尊い今のお身分では、何うもそんな秘密をねゑ、何うする事も出事なからうぢやないかそれでこれは妾が中間に立つての考へぢやが、春次さん、何うだらうねゑ、この問題を金で埒を明けて欲しいのだが』

『何と仰有やるのです』

と春次は吃と淺子を見る、淺子は落着いたもので。

『奇麗に云はないでも開放に割つて了つた方が話が早いわねゑ、金と云つても其娘の將來の』



『一寸待つて下さい』

と春次は詞を遮つて。

『その御相談は財滿の奥様からでございますか、但しは貴方の御考へなので厶いますか』

『奥様と妾と同じ考へでね』

春次は堪へた鬱憤を一時に發して、衝と席を起立ると。

『賤しい稼業を致しますが、精神は御華族の貴方方より、美くしう有つて居る積りでございます、春次の宅は金で子供を預る商賣は致しません、お門違ひでございませう、早くお歸りなさいませ』

襖の彼方へ行かうとする、淺子は其袂を捉まへて。

『コレさう怒らんでも可いではないかね、金と云つても金によりけり、額に依つたら相談が出來んこともあるまいがね』

（四十一）

財満富子から頼まれて『黄金の力に敵對ふものがあるもんですか、妾に任せて御安心なさいよ』と夥しい紙幣を受取つて安請合に春次の買收に向つた山井夫人淺子は藝妓風情と見侮つて、貞操を玩弄物にさせる賣女だもの、金さへ與れば何んな事でも諾かぬといふ配慮は無い、殊に今度の事は、夫人の弱點を知つた春次が金にする爲の仕事に違ひない、談判は無益で、幾千かの金を握らしさへすれば、埒はスグ明くものと心得て着手つたのである、それが案に相違で、春次の手嚴しい拒絶に遇ふたから、自分の計畫はガラリと外れて埒からず周章てたのであるがそれでも淺子は『黄金の力に敵對ふものは決して無い』といふ事を絶對の眞理と信じて居るのである、早くた歸りなさいと云つて席を蹴立てゝ奥へ入らうとする春次の袂を捉まへて。

『金額に依つたら相談が出來ることもあるまいがね』

といふ、火焔の中へ爆裂彈を燒べる樣なものである、春次の憤怒は絶頂に達して、も一度胸の透く程罵倒つて遣らうかと、憎い淺子の面を睨むやうにして立つたが忽ち思返す事があつて、捉まへられた袂を能う離さず、再び淺子の前へ坐つた、春次の胸には今可憐な文子の事が一ばいになつたのである、文子と生母の緣を繋ぐには、敵に取つてはならぬ淺子である、富子のた



氣に入りで始終其傍へ隨いて居る女であるから、此人を怒らせては文子の利益にならぬ、何處までも頼み聞いて、自分の眞心で卑しい話に來た淺子を動かさねばならぬ、それに精神こそ美くしいとは誇れ、身分は高下の較べられぬ男爵の奥樣と藝妓の自分である、愛嬌稼業の悲しさは、心で泣いて顔で笑ひ、踏んで遣りたい人の手を、押戴いて渡る勤めである、文子の爲は靜也の爲め、命惜しまぬ戀人の爲には、辛い苦勞程身に泌んで嬉しい、この位の辛抱はと、强ひて憤怒を制へると。

『奥樣、御相談が致したいからこそ、妾から願ひに出たのでございますが、萬望其金の事はモウ仰有らずに置いて下さいませ、妾只今も申しあげる通り、金錢づくでこの話を致すのぢやございませんものね』

淺子は、春次が坐つたのを見て『金額に依つたら』が利いてソレ見た事かと、心の中はモウ勝利の喜びに滿ちて、思はずニタリと笑顔を見せる。

『それはモウ前が金づくで何うの斯うのと、そんな事は奥樣も妾も思つてはしないのだがね何を言ふにも御身分がた身分だから……た前は然うではあるまいが、其處を一ツ金で話が着くやうに』

と何と云つても金に持つて行く。

『奥様、妾も改めて伺ひたいのでございますが、御華族の尊いに身分では、人情とか義理とか云ふ事も、下層社會よりはいつそ深くに辨へだらうと存じまする、藝妓風情の妾が、生意氣ばかり申上げる様ではございますが、僅たに一人の血を分けたに嬢さんが、不思議な程慕ふて在つしやるのを、見たり聞いたり遊ばしたら、母子の人情で其儘に抛擲てに置きにはなりますまい、男親に對しての義理からでも、何とか早く御返事があり相なものと、實は今日奥様のに使ひは、屹度母子の名乘りをして遣るとか、又は引取らうと仰有るのだらうと、嬉しく思つて居ましたのに義理人情のに話はなく、頭から金で埒をつける、金さへ與れば事が濟むと、斯なに考へらしう伺はれますが、賤しい身分の妾共でも、血を分けた我子に邂逅ふたら、ヤレ娘であつたか妾がに前の母親と、さ何程秘密が大事でも、一言の名乘位ゐはするのが人間の道だらうと存じまするが、それでは飽くまでに身分が大事だから、金の力で何處までも秘密にして與れ、あの可憐らしいに嬢さんと、金で母子の縁を斷ると、斯う仰有るのでございますか』

春次の眞心は涙になつて膝へ落ちる。



さう言ふに考へてですのなら、妾も變り者と云はれた新橋の春次です、金の額に依つてと仰有つた様ですが、財滿様の御財産を、殘らずこゝへに積つた事がございます、母子の名乘を屹度爲せなくちや置く事ではございません』

淺子と春次が折合ふ筈はない、『まあ左様云はずに能く考へて置いてに呉れよ』と云つて、淺子は面を膨らして引上げたが腹の中の快惱は納まらぬ、藝妓に閉口まされて器量を下て——信條を滅茶々々にされて口惜しくて堪らぬから抱車夫に當散らして麹町の我屋敷へ歸る、其淺子の俥上の姿を見て、密と後を尾行る自轉車がある、貴公子然たる風采立派な若者で、俥が丸の内へ入ると、並ぶ様に自轉車を寄せて。

『伯母様見附けましたせ』

俥上の淺子は吃驚して横を向くと、直自分の横へヌツと八字髭に鼻眼鏡の顏が出る。

『アラ富藏さんか』

と云つたが、其顏は急に苦くなる。

『はツはツはゝゝゝ伯母さん、今日は逃しやしませんせ、貴女が走れば僕も走る、何處までも隨いて行きます、俥と自轉車の競爭ちやア勝負にならぬ、オイ熊公速力だ速力だ』

## （四十二）

何處までも隨いて行きますと云つて、山井淺子の俥の後から自轉車で尾行て來たのは、春日富麿と云つて淺子の甥に當る男子である淺子の姉は男爵春日輝武の妻で其仲に出來た長男が富麿であるが、此富麿は大の放蕩者で、モウ老齢で隱居同樣な父の威光といふものは些しも利かぬ家庭で、母親に甘く育られた蔭だらう、學習院では秀才と譽られた彼が、卒業の頃からモウ放蕩の味を覺ゑ、今年三十になつて父の脛を噛るのが僅た一ツの藝の代りに、花柳社會では春日の御前と立られて大盡の名を唄はれたのである、然し此頃では、元より大した事もない父の財産の底も見ゑ、外では不義理の借錢が嵩んで、惡い評判が盛んに立ち、何やら其筋の注意も惹いたらしく、此儘では恐ろしい制裁が來さうなので、智慧は餘りある富麿は、暫時謹愼を裝ふて、其間に何の計畫か頻りに考へて居るらしかつた。

淺子がこの富麿を見て顏を顰めたのも道理である、今日までに此放蕩の甥の爲に何程金錢上の迷惑を掛られたか知れぬのである、同族間では手にも足にも合へぬ男爵婆さんの異名を取つた



淺子も、一人の甥は可愛いかして度々無心を聞いて拂からぬ放蕩費の尻拭ひをした、それを善い事にして、富麿は伯母樣々々々と直に相談を持掛る、去年の暮にも赭い獄衣を着ても可いかと泣着れて、三百兩ざいふものを引奪られたのである、其後暫顏が見ゑぬからヤレ〳〵と思つてると、一週間前から毎日出掛けて來る、碌な話でないに極つてるから淺子は隱れて遇はなかつた、それが今日計らずも自轉車で尾行られて、春次の宅の失敗に重ねて、泣面に蜂の仕合せだから、苦い顏は無理ではない、車と自轉車は山井男爵邸の門前まで離れないで走つた、詮術が無い、淺子は富麿を居室へ通す。

『ヤ失禮、何も車上の邂逅は奇拔でしたな、はツはツはゝゝゝ伯母さんが頻に隱れやうとするから途に見附かつた、惡い事は出來んもんです』

『コレ何方が惡いのだね、馬鹿々々しいあんな處で大きな聲を掛けて、何處までも隨いて行くなんて、外聞が惡いぢやありませんか』

と淺子はプウ〳〵言ふ。

『イヤ何も恐縮です、ツイ其久濶でた懷かしかつたものですからな』

『ほゝほゝゝれ前に懷かしがられて堪るものかね』

と云つたが、淺子は此男ご面ご向ふご、ツイ弱くなるご見にて、苦い顏は何時か解けて來る。

『伯母さん、車の上で手をに振りになつたのも隨分殘酷ですが、今日で一週間毎日に尋ねするのに門前拂ひは虐待を極めたもんですね、そも〳〵僅た一人の伯母ご甥』

『モウ可いよ、解つて居ます、その後へ万望急場をに救ひ下さいが附着いて居るんだよ、僅た一人の甥がに前さんご思ふご情けなくなつて來ます』

『私は決して愛想を盡しませんせ、飽くまでも肉親の情誼を』

『瓢輕な事をに云でないよ、氣樂相に自轉車で乘廻したりして、何時まで遊んでた出の積りだね』

『アッ止みなん止みなんだ、伯母さん、貴方の眼にはあの自轉車が氣樂に見にるのですかい、それだから伯母さんは僕を誤解して居らつしやるのだ、あの自轉車は僕の爲に火の車ですせ何故ならです、僕はあれで借金を逃廻つて居るのですからな、宅に居れば押掛るでせう、外へ出れば捉まるです、進退こゝに窮して五尺の身體の置處が無い、そこで種々考へたのですが、必要は發明の母ですで、あの自轉車に乘つて風の樣に絕えず駈廻はつて居ると、滅多に捉まらないですよ、今朝もね、早くから乘逃に出掛けると、芝の山内でバッタリ高利貸に出會したのです、するご向も心得たもので、突然そこに居た辻車に飛乘つて後押前曳で追懸るぢやアありませんか、面白かつたですよ、高利貸ごの駈競は』

（一三一）　い　の　ち

『其後が妾の俥かい、馬鹿々々しい人だねね』

ご淺子は呆れて了ふ、富麿は何處までも眞面目で。

『ですから氣樂に見にて其眞相たるや、實に悲慘なものです、隨分憂目を見る事がありませせ、腹は減る足は萎る、ヒイ〳〵片息で汗水垂らして逃廻る時なぞ、同情の値ちがありますせ、只見れば何の苦もなき水鳥の、足に閑なき自轉車乘ですよ、はツはツはゝゝゝ』

さう聞けば可笑しい裡に哀れな節もあるご、淺子は凝ご富麿を見て。

『それで又妾を強請にに出たのかい、本統に困つ了ふねね、伯母さんも此頃は不景氣でね、融通が利きアしないよ』

『でも伯母樣は相變らず、財滿夫人の御信用が厚いといふぢやありませんか』

ご富麿は淺子が豪い物を捉へて居る事を知つて居るのである。

『財滿さんかい』

ご云つた淺子は、此時何かフト思付いたらしく、ツご膝を乘出すご。

『富麿さん、お前そんなに借金ばかり逃げる工風をしないで、こゝに大金儲の口があるが、一番骨を折つて見る氣はないかね』

## （四十三）

『大金儲？、私を大金儲の仲間に入れやうと仰有るのだらう』

と富麿は思はず前へ乘出す、淺子は莞爾と笑つて。

『それでも金儲けと聞くと、眞面目になりのがまだ頼もしいよ、費消ふ事と借ることばかり考へて居てかと思つたに』

『伯母さん、さう焦心さないで其金儲といふのを早く聞かせて頂きたいものです、これで却々如才なく眼を光らせて居るのですぜ、ツイ此間も日英博覽會へ藝妓輸出を企てた男がありましてな、其相談に乘つたのですが』

『ほゝほゝゝゝお前さんのは、何時も恐ろしく大看板で其僻一文の儲けにもなりはしないぢやないかね、去年の暮のもあれも矢張輸出だつたね、何だつたけな、オヽお正月の松竹梅を滿洲へ輸出するのだつたね』

『伯母さんあれはモウ言ツこなし、謝ります、確かに成算はあつたのですが、ツイその中途に於て』

『マア辯解は可いがね、妾なぞが思付く金儲はそんな危險な事ぢやないからね、其代りウンと力を入れなきア駄目です、借金を自轉車で逃廻る程の才覺があれば出來るだらうとは思ひますがね、ほゝほゝほゝゝゝ』

『何と仰有つてもよろしい、是非金儲けの話を聞かせて下さい、私が儲ければ即ち貴方の儲けです、暮の三百兩も今度願ふ積りの百兩も一度に御返濟しますぜ』

『今度の百兩？、百兩借りにお出でかい、まあ』

と淺子は呆れた顔をしたが。

『妾の云ふ仕事が甘く成就さへすれば、それ位の事は何でもないがね、富麿さん、お前は頻りにお遊びの樣だが、河岸は何方だね』

『フヽヽこれア變つたお尋ねで……何方此方といつてモウ八方塞りで、例の自轉車の口ですよ、はツはツはゝゝ』

『新橋に馴染があるだらうね』

『これアいよ〳〵何うも……伯母さんそれより今の金儲の方を先に埒を明けて下さいな、儲けて而して後大に遊ぶといふ事にしたいものので』

『これが金儲の話ですよ、新橋が詳しければ大層都合が善いのだがね』

『新橋と金儲の話が交渉があるのですか、それや妙ですな、よろしい、新橋なら私の勢力範圍です、何でも知つて居ます』

『勝手な事ねね、それではあの春次といふ藝妓を知つてた出でかい』

『春次、伯母さん、新橋の春次を知らない程野暮な私でもありませんせ、そして其春次が何うかしたんですか』

『ナニ此方が何かしやうといふのさ、富廐さんた前隨分其道にかけては巧いもんだ相なが、あの春次を靡かす腕を有つてた出でかい』

## （四十四）



淺子は、藝妓春次を金で買收にかゝつて見事に失敗したけれど、それで引込む譯には行かぬ、淺子は財滿夫人富子の參謀である、善惡共に相談を受けて富子の秘密は悉く握つて居る代りに淺子が財滿家から占領める金は却々少い額ではない。

淺子の夫清丸は休職の陸軍少將であるが、理財の道には暗く、一家の經濟は淺子の手へ任せて大酒ばかり飲んで太平樂の日を送つて居る、此夫を持つた淺子は隨分と骨が折れるだらうと思はれるが、彼は或意味に於て確かに豪い女である、巧妙に同じ華族仲間の內庭に潛り入つて夫人や令孃の信用を得、種々な世話事をしては甘い汁を吸ひ、一部の人々からは手にも足にも合へぬ男爵婆さんと厭がられもするけれど、無くてはならぬ人に重寶がるのが多く、其收入で大酒飲の夫を養ふて、男爵家の屋臺骨を肩負つて立ち、モウ五十に近い身が何時も若やいだ華麗な風をして、暢氣相に世を渡つて居るのである。

春次を當方の物にして了ふ約束で、淺子は大金を富子から受取つて居る、この金の十分の一も貰へば藝妓一人を味方にするのは譯は無いと思つて、今日春次の處へ富子からの贈物と云つて包金を持つて行つたのであるが、春次は手にも觸れぬ、財滿家の財產を貰つても、人情づくの話でなければ厭と跳つけたのである、慾を知らぬ大馬鹿者と、腹の中で嘲つた淺子は、歸る途

中で種々と魂膽を砕いた、春次を買収せねば折角の金儲けが出來ぬのみか、伯爵夫人の今の地位を顚覆へす程の富子の大秘密を、春次なぞに握られて居ては自分だツて安心は出來ぬ、富子の爲には益〻謀であるが淺子からは富子が大事な寶の庫である、其庫が傾く樣な事があつては大變であるから、此術で可ねば今度はと車の上で思案中を、計らず甥の宮歷に聲を掛けられたのである。

富歷に遇ふた淺子は忽ち一計を思ひ浮べた、それは、放蕩で聞ゑた富歷を使ふて色と慾との二手から春次に攻寄せたら、何と云つても藝妓である、落ちぬ事は決してあるまい、落ちさへしたら掌中の物で、秘密の探消は自然に出來る、これは名案だつた哩と、淺子は我が智慧に我で感心する、富歷はまた魅まれるのではあるまいかと、ソツと膝を捻つて頻りに前へ出る、話は大分進んだらしい。

『すると伯母さん、その春次を私が口說き落して物にしたら、放蕩費の外に成功謝金が三百兩、と仰有るのですね』

『左樣です、伯母さんなぞの金儲仕事は一寸斯んなものさ、然しに前に出來るかの』

『あゝ情ない、貴方は僕の手腕を知らない』



と宮歷は左も慨嘆に堪へぬといつた風で。

『僕に金を有せたら將にこれ虎に翼です、新柳何千の阿嬌は悉く薙斷の、花柳界に一大革命を捲起して見せますよ、其任務は恐らく僕を置いて他に有りませんね』

『然し春次といふ藝妓は確に普通の女ぢやないよ、其氣でかゝらんと失敗ります』

『御念には及ぶべきです、貴方は眞に僕の技倆を知らないから話せない、伯母さんはよく音樂會へ入つしやるね、あの音樂と女を口說くのと同じものですよ、序破急を心得て』

『ほゝほゝゝ伯母さんに女を口說く講釋かね、生兵法は何とかいふから慢心は可ないよ』

『大丈夫です、何なら見本に伯母さんを口說いてお目に掛たい位のものです』

『馬鹿をお云ひでない』

と笑ひながら淺子は、春次に突返された五十圓の包金を渡して。

『チヤンと支出を明かにせねば可ませんが、兎も角これだけ渡して置くから』

『支出を明かに？、一ツ纏頭が何程に俥賃がいくらですか、はツはツはゝゝ、よろしい、細大漏らさず報告しませう』

『それから何時までも隙取ては困るのだよ、當方にはまだ大事業があるのだからね』

『それもよろしい、然し伯母さん、女を口説く仕事ですぜ、然かも相手は男嫌ひで變り者の評判を取つた春次です、多少の日子は餘裕を與へて頂かん事には困りますよ、伯母さんだツてさう早く伯父さんに雇きは爲ませんでしたらう』

『知らないよ、暢氣な男だねゑ』

## （四十九）

春日富藏は伯母の淺子から、新橋の藝妓春次を口説落して呉れたら、放蕩費の上に成功謝金を與るといふ、寢て待つた果報が到來したやうな甘い事を賴まれて、近頃手も足も出ず、自轉車で借金逃げの苦勞ばかりしてる所へ、舂へるばかりの福音と雀躍して喜んだ、放蕩費を出して貰つて藝妓を雇かせて、それで禮金に有りつくやうな儲け口は富藏の理想に叶つて居る、有卦に入つた哩とは喜んだが、サテ一寸當惑したのは相手が春次である事だ。

春次の名は美人といふ事よりも變り者で聞ゑて居るのである、男厭ひの堅いのと看板だけは殊勝らしいのが多數居るのであるが、サテ秘密を洗つたら、色の啻に色を賣らぬ藝妓が有つて堪



るものでなく、之を求めに來ぬ客は一人も無い、客色が打に餘る點に於いて變り者は居るだらうが、腕一本で藝を賣る鑑札通りの藝妓は一人もないと云つて可い、モシ有つたらそれこそ人を驚かす變り者である、春次が變り者の名を取つたのは藝妓と娼妓との混血兒が流行る時節に何處までも藝妓で押通すといふ氣概を普通と變つた女と周圍が譽めるのである、譽められる方が正當の藝妓で、譽める方が確かに變り者であるが、化け物の國に行つては人間が化け物である。

春日富藏も春次を化け物と見て驚いて居た一人であるから、今度の賴まれ仕事に春次が相手では當惑するのも道理である、雖然——これが出來ぬとあつては、自分の估券に係はる、從來も放蕩費の尻拭ひに何程伯母を苦しめたか知れぬ、其の伯母から事情は云はぬが、金を出して遊ばせるから春次を雇かせて呉れと賴まれては厭な事でも拒みは出來ぬ、まして下地は大好物の女色の事である、是が非でも成功させた上で、美人と黄金を兩手に握らねばならぬ、放蕩の外に一藝が無いと日頃から我を罵る伯母が、今度の事が成功しなかつたら何と云つて愛想を盡すだらう、放蕩も氣の利いた事は出來ないと思はれては自分は丸潰れである、今伯母に見限られては、春日富藏は死んだも同樣だ、これア大事件を負つて立つた哩——と、嬉しい目的のサテ

難かしい仕事に頻りに頭を惱ましたが、兎も角春次に近づく事だと、此頃は馴染の待合瓢家で春次を度々聘んでは密かに敵の形勢を探つて居るのであつた。

## （四十六）

富麿は此頃盛んに待合瓢家へ入浸つて居る、伯母の淺子から放蕩費を貢がれて、以前に變つた奇麗な金拂ひをするから、身分は華族の若樣で、遊興振は馴れたもの、女受けの善いのも道理で、富大盡の名は二度瀧いて來た、富麿の遊ぶ目的は無論春次を狙ふのであるが、彼もさる者始めから計略を見破られるやうな拙劣な事はせぬ、容易に落ちる城でないことを知つて居るから、正面から強襲に攻寄る事は止めて、何處か間隙があつたらと、二月ばかりは斥候戰で送つたのである。

すると伯母からはまだか〳〵の催促が劇しい、モウ何ぞか埒を付ぬと不信用を重ねる上に折角の金儲けは餘所へ飛んで了ふ、ソロ〳〵突貫と出掛けやうかと、二三日前から春次を片時離さぬのである、金の力が目に見わて働く社會であるから富麿の味方は何人でもある、斯いふ客に



出れては春次の困厄は普通ではない、巷には氣の早い浴衣が見わて、燈火に涼風が欲しく、青樓酒も櫻干近く端居してビールの醉に淡い興を貪る頃となつた、瓢の奥二階で遨遊に疲れたらしい富麿は餘り嗜まぬ酒に、微醉の軀を床柱に寄せて、三味線持つた春次の顏を凝と見る。

『春次、た前疲れたらうね、モウ止めて遊ぶが可い、姐さんがそんなに働くと勿體ないせ』

『ほゝほゝほゝほゝ御前こそた疲れでせうね、拙い藝ばかり』

と春次は起つて盃を持つて行く。

『オイ今夜は何うだい、一ツた前の憲法を破つて此處へ泊つて行かないか』

『ほゝほゝ御前があんな事を、戲談ぢや有りませんよ』

『イヤ眞劍だ、春日富麿大眞面目の談判さ、戲談にしられては恨むせ』

『眞劍なら厭ですよ』

『戲談なら』

『何方でも厭です』

『ホイこれは猛烈だ、三十三珊と來たね、はツはツはゝゝ』

戲談に紛らして笑ふものゝ、富麿の心は大きに焦つ。

『餘り愛想が無さ過るぢやアないか、毎晩れ前が歸つて後で、俺は獨り寢させられるのだぜ、獨り寢るなら屋敷の安樂椅子で氣樂な夢を見た方が優だよ』

『御前妾正直よ、愚弄ぶものぢや有りませんよ』

『愚弄ぶ？俺がれ前に愚弄ばれてる評判だぜ、なあ春次、變り物と知つて惚れた俺だ、色よい返詞がして欲しいのさ』

と誰やらの假聲を遣ふ。

『あら御前巧いのね、高麗藏を一ッ聞かして頂戴』

と雛妓が黄色い聲をする。

『こんな婆アを弄らないで、若い綺麗な所が幾らもあるぢやありませんか、御前も餘程物好きで居らつしやるのね』

『物好きと云はれりやア然うかも知れない、堅いと承知で口説くのだからな、然し口説いて惡いといふ法律は無からうな』

『所があるのよ、此藝妓に口説く可らずとチヤンと札が附いて』

『何處に？』



『此處にです』

と春次は輕く胸を叩く。

『其札の附いた心が買ひたいのさ、俺に賣つて呉れないか』

『不景氣ですからね、賣りたいのよ、けども御前にはねゝ』

『俺では不足といふのか』

『妾御華族は嫌ひですものね』

座敷が白けて來たので、女中が氣を利して富麿に風呂を勸めた、湯上りの富麿は誰も居ない座敷へ歸つて來たが、そこにある春次の三味線を取上げると、床の上の硯筥を引寄せて、墨黒々と三味の裏胴に金といふ字を書いた。

## （四十七）

富麿が、春次の三味線の胴に金の字を弄書したのは洒落か寓意か解らぬ、御華族は嫌ひですと言はれた鬱憤腹から、醉興に任せて書いたのかも知れぬ、何な心か解らぬけれども藝妓は金で

自由に爲るもの、金の前には藝妓は頭は上らぬもの、金に買はれぬ藝妓は決して無い、といふ蔑視を一字に現はしたものと取れぬ事は無い『姐さんが見たら屹度』と雛妓が、はらはらする所へ春次は入つて來た。

『オイ三味線に字を書いたよ、一寸奇抜だらう』

と富歷は醉ふた軀を杜に倚せて、三味線を前へ突出す。

『有難う』

と云つてそれを見た春次の顏の色はさツと變つた、唇を噛むと、蜂谷から鑿へ貫ぬいた青筋は美くしい面を凄くする。

『春日の御前、これ何といふ字です』

『オヤ前は其字を知らないのかい、金神さんの金で黃金の金さ、金の世の中の金で、金が敵の金だよ』

と云つてコロリと横になる。

『まあ種んな讀方があるのね、道理でイケ好ない形態の字ねね』

春次は帶に挿んだ撥を取出すと、逆手に持つが早いか三味線胴を文字の上から突破つた、バラ



ンと烈しい音で皮が裂け、絃が高く鳴つた。

『あら姐さん』

と雛妓は取縋る、吃驚して富歷も起上つた。

『春次、何うしたんだ、其字が氣に入らなかつたか』

『御前ツ、貴郎は藝妓の三味線を何と思つてらつしやるの』

『何と思ふ？、三味線は三味線ちやないか、れ前達の持つてるのは高い價位は知つてるよ、まあ可いちやないか、俺が字を書たのが惡けりやあ新しいのを買つて遣るさ、ソラ金だ、これ程有りやア三味線は打で買へるだらう』

と富歷は紙幣入を投出した、春次はそれに目も遣らず、吃と膝を正して畏まる。

『三味線は藝妓の魂ツてことを、御前は御存じは無いのねね、妾御前に魂を穢される樣な覺はありませんよ』

『金といふ字がそれ程癪に觸るのかい、ナル程れ前は變り者だ、然し春次』

と富歷は眞面目になつて。

『金を崇拜せぬのは可いさ、金を有難がらぬのは可いが、そんなに呪ふにも當るまいせ、呪ひ

ながら金に征伏されてる人間だ、れ前だッて金の爲でなけア道樂に藝妓を稼いでるのちやあるまい、俺がれ前の顏を見る事が出來るのも金の爲なら、れ前が俺の座敷へ出ぬといふ譯に行ぬのも金の爲だらうぢやないか、金の力の加はらぬ勝利は無いからなア』

『だッて男振より金より心ツて云ふわ』

と雛妓が口を出す。

『ふうたきいを云ふなよ、金と力があつてそれで色男でなけア駄目さ、はツはツはゝゝゝ』

と富藏は誇り氣に高く笑ふた——口惜しい詞にも道理はある、こんな厥な座敷も蹴立てゝ逃げる事の出來ぬのは結局金の爲である、今の自分が金の爲に苦しめられてる事は誰も知るまい、永い間辨也父子の世話と、負債に苦しむ兩親を救ふだけ救ふて來た融通は普通大抵では無い、之が以前だと、變り者で立通して、破つた三味線を憎い顏に投付けて了ふのだが、さう氣儘ばかりでも通されぬ、矢張金には頭を下げねばならぬと、春次は密と口惜しい涙を拭く。

## （四十八）



梅雨上りを待搆へた樣に、急に襲ひかゝつた暑熱は人を苦しめて、夜はモウ納涼に賑ふ頃となつた。

兩國橋の釣欄を弓と見立てると、射て放たれたやうな滿月が昇りのぼつて、紅を流す大川の上に磨澄ました光をかけ、どよろの橋上の人通りと、相應はしかつた煙火の音も漸う間絕ねて、更け行く萬象は月の光に醉ひ倦きた景色である。

電燈と紅燈が一ツにつくる光の暈から脫けて、月のみ漣に碎けて寂しい川下に、一艘の屋形船が浮く、吹く川風に飜る簾の、內には對座の男女が見ねて、外には今一息入れて汗を拭いて老船頭が一人『オイ船頭』と酒にもつれた聲、後は聞ねぬのを藝妓らしいのが。

『船頭さんチヨイトこれを』

と銚子に盃と小皿を添へて、白い手が障子の間から出る。

『ヤツ御馳走ですかい、れ有難う』

と立てた棹に船を繫ぐと、ドツコイショツと艫に大胡座をかいて、戀も口說も尻喰へとばかりチビリ〳〵船頭は悅に入る。

待合で着替へたらしい浴衣に縮緬帶姿で鼻眼鏡を光らすのは春日富藏である、三月越し藝妓春

次を攻倦んで、モウ伯母の淺子からは『た前では迚も駄目だよ』と云はれて放蕩費の支出を拒まれ、折角の金儲けがフイになりさうなので、焦々と急る一方には、妙な事から手を出したのではあるけれど、容色も藝も立優つた春次を口説くのだから、何時か富歴は煩悩に墮ちて、伯母の頼みが無くツても此戀叶へで引下れるものかと、慾と色とに鞭韃れて馬車馬の如くに突進むのである。

『オイ春次、今夜は舞臺を船と變たからた前の白も科も新派といふ演方に頼むぜ、何時も極つた書抜を讀む様なのは御免だ、はツはツはゝゝゝ』

輕い衣裳で美しい春次は艶な顔に笑ひを見せて。

『妾は新派は柄にないわ』

『笑ひ事ぢやアない、俺は今夜は確乎した返詞を聞く積だよ、船で斯な話を始めると、何だか仙臺の殿様染るが、男爵の若殿様も、た前といふ高尾に罹つちやア反討だ、反討で弄殺しだから殘酷ぢやないか』

『ほゝほゝゝ御前妙な事を仰有るのね、妾そんな覺はありませんわ』

『有るか無いかは心に問ふさ』



『一向心當りは無いツて申します』

『下らん事を……オイ春次ツ、モウ其變り物の看板も、俺には取つて呉れても善さうなものぢやないか』

『ほゝほゝゝ御前こそ書抜ね、新派で入つしやいよ』

綺柄の地味な明石に、赤いもの一切着けず、高髷だけがそれ者らしい、素人風の勝つた姿を、端然と褄重ね行儀よく座つて。

『まあ佳いた月、御前に寢みにならないで、一寸御寵遊ばせ、あの橋の上の赤い燈が水に映つて、まるで油繪か水彩畫』

と云つて春次はハツと思つた、畫のやうな景色を見ると、何時でも忽ち繪を描く靜也の事を思出すのである。

『イヤ起きなくツても眼の前に美くしい美人畫ぢや、月なざア何でも可いぢやないか、その障子を閉めッ了へ』

富歴はフツと酔を吹て大きな聲をする。

『ほゝほゝゝ、さしたくれたる盜の戸をツて、そんな事を仰有るとた月様に笑はれて、ア、妾

こんな時に弾たいわ』

寝させた三味線を取上げて音締を合はすと――身はうき船のかぢをたゐ、今はよる邊もしら浪の、棹の雫か涙の雨か、ぬれにぞぬれし濕れ衣、身に染むけさの浦風を……――非次は心ゆくものに、京歌の磯千鳥を唄ふのである、水調子に乗せて乙の低い聲ではあるが、美音は月を碎く銀波金波に落ちて、聞く耳に寒い様に染む。

## （四十九）

『陰氣な歌を止せよ』

と睨むやうにして富麿は體を起す、狐屋の女將の計らひで、巧く戀の本尊を邪魔入らずの船中に連出して、今夜こそ本望を遂げやうの妄念が燃ゆるところへ酒を煽つたのであるから、熱した血は痒く、肉は動くのである、大胡座をして醉を吹くと。

『オイ春次、た前もチト考へて呉れたら何うぢや、俺は道樂や酔興に斯んなことを言ふのぢやあないせ、眞面目に世話をしやうと思ふから隨分嚴しう厭はれて居るのを、知つて居ながら



諦めぬのぢや、大分金も費つたぜ』

春次は撥を弄る手を止めて。

『御前、妾に願ひですから其金々々ッていふ事を仰有らないで』

❷『ナニ』

と富麿は氣色を變くする、其面を冷かに見て、又靜に俯向きながら。

『御愛顧にして頂いて、何時もこんな事を申上げては濟みませんが、妾御存じの通の變物だから、万望御立腹のないやうに聞いて下さいよ、妾御前にた目にかゝつた時から、色の慾のとは斯うして人の遊興で身を過す果ない稼業厭らしい考へなんか有つて居ませんものね、それは行けませんが……妾藝妓と名乘つて出る以上ですから、皆様の御愛顧を受けなけア立つては、眞實藝が賣つて勤めたいのですものね、ほゝほゝ藝も御大尽だけど、マアた座敷の興を添へるだけの事をして花を賣りたいと思ふのよ、口巾ッたい廣言と、皆様がた笑ひになるのは承知で、妾今日まで心に醬つた事を賣して來たんです、だから御前のた座敷でも浮いた擧動など決してた目に止めて居ない積ですよ、それに今の様に仰有ると、妾本統に辛いぢやありませんか、そして妾蟲の所爲か金といふ聲を聞いても慄とするのよ』

こんな時に彈たいわ』

寢させた三味線を取上げて音締を合はすと――身はうき船のかぢをたに、今はよる邊もしら浪の、棹の雫か涙の雨か、ぬれにぞぬれし濕れ衣、身に染むけさの浦風を……――春次は心ゆくものに、京歌の磯千鳥を唄ふのである、水調子に乘せて乙の低い聲ではあるが、美音は月を碎く銀波金波に落ちて、聞く耳に寒い樣に染む。

## （四十九）

『陰氣な歌を止せよ』

と睨むやうにして富麿は體を起す、瓢屋の女將の計らひで、巧く戀の本尊を邪魔入らずの船中に連出して、今夜こそ本望を遂げやうの妄念が燃ゐるところへ酒を煽つたのであるから、熱した血は痒く、肉は動くのである、大胡座をして醉を吹くと。

『オイ春次、た前もチト考へて呉れたら何うぢや、俺は道樂や酔興に斯んなことを言ふのぢやあないせ、眞面目に世話をしやうと思ふから隨分嚴しう厭はれて居るのを、知つて居ながら



諦めぬのぢや、大分金も費つたぜ』

春次は撥を弄る手を止めて。

『御前、妾に願ひですから其金々々つていふ事を仰有らないで』

●『ナニ』

と富麿は氣色を暴くする、其面を冷かに見て、又靜に俯向きながら。

『御愛顧にして頂いて、何時もこんな事を申上げては濟みませんが、妾御存じの通の變物だから、万望御立腹のないやうに聞いて下さいよ、妾御前にた目にかゝつた時から、色の慾のと厭らしい考へなんか有つて居ませんものね、それは斯うして人の遊興で身を過す果ない稼業ですから、皆樣の御愛顧を受けなけア立つてはゆけませんが……妾藝妓と名乘つて出る以上は、眞實藝が賣つて勤めたいのですものね、ほゝほゝゝ藝も御大尽だけど、マアた座敷の興を添へるだけの事をして花を賣りたいと思ふのよ、口巾ッたい廣言と、皆樣がた笑ひになるのは承知で、妾今日まで心に愬つた事を貫して來たんです、だから御前のた座敷でも浮いた擧動など決してた目に止めて居ない積ですよ、それに今の樣に仰有ると、妾本統に辛いぢやありませんか、そして妾蟲の所爲か金といふ聲を聞いても慄とするのよ』

『はツはツはゝゝゝ相變らず古風な蟲だ、ウムそれぢや心に誓つた……心に誓つた男でもあるといふのか』

『男？エ、それアこれでも女ですものね、一人位は無くちや寂しいわ』

『ヤ到頭白狀して了つたな、然し左樣聞くと俺も此儘で指を咥へて引退る譯には行かない、其男といふは誰だ、尋常に打明けて了へよ』

『ほゝほゝゝゝ、御前は勘違ひをして居らつしやるのね、一人位は有つても可いッて云ふのよ』

『有つても可いが、まだ無いといふのか、フムそんなら春次、た前の前に居る男は氣に入らんか』

『餘り違つて御相談にならないわ』

『春次ッ、き、き貴樣は俺を侮辱するのか』

焦れに焦れた熱い胸を、酒で消すやうに大盃で過した酔が悉く廻つて、富藏の怒つた聲は叫ぶ樣である、春次は從容として三味線を取上げる。

『御前の樣な立派なた身分で、金持の方は勿體ないと云つたのですよ』



『馬鹿ッ、そんな廻り煩いことは止めて決着の返詞を聞かう』

『決着の所ですよ、御前、妾御華族の樣な立派な方と金は本統に厭ひなのよ、ほゝほゝゝよ〳〵の貧乏性ね』

云ひ放つて三糸をキリ〳〵と巻いて調子を合せると、撥に亂れる絃聲も怪しう激して鳴る、ムラ〳〵と怒氣心頭を衝いた富藏は、此時突然手を伸して三味線を摑んだが、女も共にとグイと引き寄せる機に、ポッキと朱檀の棹は折れて、絃はサッと胴の上に水の如く渦巻いた。

『何を爲さるんです』

と春次は凛とした聲で抵抗ふたが、甲斐なく碎けた棹を投げて、忽ち撥を手に飛退ると、屹と油斷のない姿勢は男の風情で雄々しい。

『御前、イエ春日さん、貴郎はこの春次を手籠に爲やうとするんですか、御卑怯ぢやありませんか』

『卑怯ッ、生な事を云ふなッ、優しく出りやアつけ上つて、不見轉蟄妓の癖に』

春次は堪へに堪へた憤怒が一時に發して美くしい面は眞青になつたが、聲も姿も凄い程沈着いて。

『春日さん、貴郎は妾を不見轉と仰有つたね、妾が不見轉だつたらお仕合でせうが、お生憎さまねね、ほゝほゝゝ不見轉さね御自由に出來なけア、金々ッて仰有るお金の力も知れたものですねね、華族のお身分の貴郎が、藝妓が金に靡かぬッて、腕力沙汰は御名譽でせうね』

罵られて富麿は起上ると思ひの外。

『何とでも勝手に喋舌れ、金の力がそんなに嫌ひなら、そろ〳〵腕の力を見せて遣ううか』

春次は、板子一枚の船中に居ることに氣付いてギョッとした、富麿は肉に望んだ野獸の舌甜づる如く、面を瞶めてそろ〳〵と近寄るのである。

## （五十）

靜かに月の江に浮いた船一艘、餘所目には戀とも艶めかしいが、簾の内は今殺氣に滿ちた、撥を逆手に柱を後ろに、春次は堅く身を構へる。

『腕力で妾を自由に、ほゝほゝゝゝ春次には魂がありますよ、貴郎方の金氣で錆付いた根性とは些と違つた魂があるのよ、金さへ見せれア誰でも言ふ事を聞くものと、獨り斷の見當をつ



けて、それが叶はぬッて卑怯に斯んな處へ連出して暴力で、思ひを遂げやうとは、ほゝほゝ御華族だの明治の紳士なんて貴郎は餘ッ程時代がゝつた惡黨ねね、サア春日さん、そんな卑怯な方は妾嫌ひだから、お座敷も御免を蒙ります、早う陸へ上げて下さい』

『とうど惡黨の鑑札頂戴か、惡黨と云やア惡黨になつて遣らう、滅多に陸へは上げられねね、恰度處も大川のとか何とか凄い臺詞があるところだ、はッはッはゝゝゝゝ、まあさう怒らいでも可いぢやないか、ナア春次、そんな野暮な眞似は俺はせぬサ、せぬからお前もモ一度考へ直して呉れよ、何も嫌ひな金に靡けぢやない、眞實俺は迷つたのだ、男も斯うなると悲慘なもんよ』

富麿は脅しの利かぬのに又手を變へる、張合がぬけると流石に氣は弛むが、油斷せぬ春次は衣紋を直して。

『お詞は厚く受けますが、妾何處までも變り者で貫す覺悟ですから、切望そんな話はさつぱりと此川水に流して了つて、そしてあのお月の樣な、清淨なお交際で御愛顧にして下さいな、妾本統にそれがお願ひですから』

以前の姿で優しう濕やかに、月に對いて泌々と物を言ふ女の、氣高い輪廓で緣取つて、艶麗な

色彩を置いた繪のやうな姿を、富麿は凝視ると、手暴い擧動をした自分の卑陋なさが眺められる氣にもなるが、盃を執ると又ぞろ頻りに昂く劣情に誘はれて、『價値が女の、それも色を賣る藝妓一人が、自由にならぬ爲に戀も金儲も破れて了ふのか』と、無念さが込上げて來て、覺めたり醉ふたり焦々する胸を押へて横に倒れて居る。

春次は冷ゑた銚子を取つて艫を覗くと、焜爐を跨いだ船頭はコクリ〳〵夢を漕で居る、ソツと起して何か其耳元で私語くと、心得たものに毛むくだの胸を一ツ叩いた。

『オイ春次、仲直りに一杯飲まう』

と富麿は起直る。

『はあ頂きます』

と春次が出した掌には吸物椀の蓋がある。

『それで返盃をして貰はう』

富麿は醉潰しにかゝつた。

『ほゞほゞ妾醉ふと猶暴ッぽくなりますよ』

と苦もなく傾けて洗ふて献す。



『フム妙だ、お前は酒は嫌ぢやないか』

『御酒なと召上らずばッて、鬱々する時は飲むんですよ、何程でも』

春次は簾を卷いて、醉ふた顔を水の上に出すと、空に一聲衣を裂くやう。

『あ郭公？』

と身を乘出して、端唄の文句を口の中に哀傷が泌むか餘念もなく雲を仰いだ時、不意に富麿の猿臂は其首に纏ふた、早速に身を轉して懸命に突くと、醉ふた足の蹣跚として富麿は後しろ鞺と倒れる、狹い船室の、杯盤は飛んで船は機みに傾く『危いッ』と聲を掛けた船頭は棹を拔いたらしい。

『ウヌ失敬なッ』

『何をするんです』

猛烈立上つた富麿は、赫となつて一攫みと躍りかゝつたが、また船が搖れて、今度は前へ倒める。

『コラ船頭何で船を動かすのぢや、コラ何處へ遣る、待たんかッ』

叫びながら今は物狂はしう春次を隅に追詰める、さツと擦り拔けて艫に駈出ると眼前はモウ岸

である『有難うよ』と船頭に詞を殘して、ドッと衝當る石垣の、柳を目莵けて身を躍らすと、船頭は早業で船をグイと出す、取殘された富藏は地踏で突起つたが、折れた三味線棹を取るより早く、石も碎けよと岸上に投げる、非次はハッと身を屈めたが、遲し宙に鳴つて横鬢を擦つた、痛苦を堪へて迸へ上ると夕ラ〳〵と頰に流れたのは、月明りに凄い血である、張詰めた氣が頽れると、急に悲しう恐くなつて、跣足の儘で吾妻橋の方へ駈出すと、そこの辻に客待の俥が一臺居る。

## （五十一）

君聞かずや胡笳聲最も悲しきを。紫髯綠眼の胡人吹く。これを吹く一曲猶未だ了らず。愁殺す樓蘭征戍の兒……。

月に浮れ心の微吟面白う、大空を仰いで興に嘯いたのを面深に冠つて半ばを月に照した其面は、た俥夫である、古けた米利堅帽の編笠形に崩れたのを面深に冠つて半ばを月に照した其面は、目鼻立の何處ともなく卑くない、汚れた法被の勞働者が惜しい程の若者である——月に向つて



胡笳誰か聞くを喜ばん——と吟じ終つた車夫は、意氣の昂ぶるを覺ゆる、げに高く腕を組んで呟々と體軀を左右に搖ると起ち上がつて月に明るい往來を見廻はして、又腰を下すと今度は懷中から一冊の書籍を取出して、提灯に近う屈んで讀始める。

駐車場の標杭と、一臺の俥と車夫の影を地に落して、月はいよ〳〵澄み渡ると、何處かの機笛が、疲い調子でボウと鳴る、それが次第に覺めるやうに太くなつて、靜かな空氣に傳はつて物の十分間も鳴渡つた後は、短い夏の夜はモウ曉方に近く月にも雲がかゝつて淡々と明闇が蔓こる。

『今夜は零だナ』

と呟いた車夫は、書籍を收めて立上つたが、梶棒を握つた儘、バタ〳〵と此方へ近づく足音に耳を止める、そこへ突と現はれたのは、涼船の危難を免れて、洗足で走つた春次である。

『車夫さん、新橋まで大急ぎで、早くよ』

と、もしやと後方を顧りながら、裾を高くとつて俥に近づく、艶めく蹴出しの色が提灯に映つて燃るやう、薔薇の香が立迷ふ、車夫は、降つて涌いた美人の、普通では無い風俗を繁々と眺めるのであつたが。

『君ア藝妓ですかい』

と一句は客を驚かす、春次は、變つた問ひに可笑しな形の帽子の中を覗いて。

『ほゝゝ妾急ぐのだからね、早く乘せてに呉れよ、倍して上げから』

『紳士と藝妓は僕の俥には乘せないのだ』

『エ』

呆れた車夫に出倉して、春次は走る身を忘れて佇んだが、執念深い富麿が追掛けて來はすまいかと焦々して。

『可笑しな車夫さんね、妾今惡い奴に酷い目に遇はされて逃げて來たのだから追掛けて來るかも知れないから、助けるともつて早く乘せてに呉れよ、さ早く遣つてに呉れ』

『ナニ惡い奴に？』

と車夫は春次の顏を見る、眞白の頰に血が流れて鬢の邊りが斜に切れて居る。

『負傷をしたのだな、惡い奴の爲に……其奴が追掛けて來る、ウム左樣か、ちやア乘せやう、が僕ア遊廓へ入るのは厭だ、新橋より行く處はないのかね』

『憫だねゝ此人は、あ、ちや小石川の植物園の處まで遣つてに呉れ』



『ウムあの邊は善い所だ、サア乘りたまへ、藝妓を乘せるのは始めてだが詮術がない、惡い奴に追はれてると聞いては可愛想ぢや、不承をしやう、君、嘘ぢやなからうな』

後ろの方で叫んだのは風か、飛乘つた春次は『あれ』と振向く。

『大丈夫だ、僕が保護して上げるから安心したまへ』

怪車夫はサッと法被を脫ぐと、懷中から書籍が落ちる、それを客の後方に投込んで、サア來いと云つた意氣込で走り出す。

電燈の續く街に入つて、俥上の春次はホッと息をついたが、と見ると前面の狹い橋上に塞いだ黒い影がある、近づくとそれは幌を下した俥で、往來の絕えた橋心に寂寞と輪を止めた、春次の車夫は聲を掛けて邪魔物に立止ると。

『オイ春次、待つて居つたぞ、サア之へ乘るが可い』

聲は富麿で幌を上げてヌッと現はれる、後を追ふて先廻りをした彼は、酒と憤怒に煽られて狂ふ心の止處なく、執念くも春次をこゝに待受けたのである。

思ひ掛けもなく、先廻りをした富麿に路を遮られて、ギョッとした春次は、怒りの聲を發はせて。

『春日さん、この顔の傷を覺て居らつしやい、今は何にも申ますまい、車夫さん、こんな人に構はないで、早く遣つてお呉れ』

『來いッたら來いッ』

と叫んで富麿は突然春次を拉下さうとする。

『コラ何をする』

と怪車夫は大喝した。

『君、本人が拒むのを強制する事は出來まい、客に對つて亂暴をすると僕が對手になるぞ』

『何だ生意氣な事を云ふな、愚圖々々云ふと利益にならんぞ』

富麿は猛り立つて、車夫の手を振退けやうとすると、グッと力が籠つて石の如く重たい。

『利益にならん？、君は見受ける所が、身分のある者の樣ぢやが、怪しからん事をするな、この婦人は僕が或處まで乘せて行く約束だから、それ迄は保護しなけアならん大切な客ぢや、それに君ア何か此の婦人に對して脅迫がましい所爲をする樣だが、奇怪極まるぢやないか、婦人に拒まれて腕力に訴へる、そんな男兒があるか、サア保護者たる僕が對手にならう、指一本でも此の婦人に觸へたら許さんぞ』



轅棒を地に投くと、富麿の躰をズッと除けて、春次を讓つて頼もしく突起つた。

車夫と蔑視んだ若者の口から、道理をせめた詰責を聞かされて、富麿は烈火の如くに怒つた、酒に縺れる舌で猶何か云はうとしたが、焦躁さに堪へ切れぬか、突然右手に持つた細い洋杖を揮上げると。

『ぶ、無禮な事を云ふな、其方達に詞を交はす俺ぢやない、身分を聞いて後悔するな、其處を退かぬかッ』

『何方が無禮だ、それで僕を毆らうといふのか』

洋杖は發矢と肩に當つた、猛然と躍り蒐つた車夫の手が、富麿の胸に觸ると、彼は一堪りもなく俯向に倒れたが、大童になつてまた貪着くのを、ヒタと引寄せて今度は襟を掴むと、富麿は喉を締められて眼は白黑する。

『暴力で來りやア防ぐんだぞ』

と車夫は足下を組敷かうとする。

『コン畜生何をしやがるんでね』

と不意に後ろから喚き蒐つたのは、富麿を乘せた車夫である。

『エ、貴方もかッ』

怪車夫は一搖體を屈めて、後ろ樣に法被の襟を探ると『ヤッ』とかけた聲の上を飛んで、加勢の車夫の體は欄干に韓と投付けられ、反跳を喰つてドブンと水音高く河に陷つた、赤かつた富麿の顏は蒼白になる、騷ぎの半ばに伸から下りた春次はハラ〳〵として危ぶんだが、目の覺める手練で大の男兩個を制へた車夫の働きに嬉しくもあり氣遣はしくもある。

『モウ貴方を放して上げて下さい、貴郎に迷惑が掛つては濟みません』

と、普通の車夫ではないと心着いては、嬉しい俠氣に感謝の詞が自然に出る。

『はッはッはゝゝ、ナニ氣遣はなくても可い、君ア俥の上から見物したまへ、懲して遣るのだ此奴らが弱い者を威して歩くのだ』

怪車夫は笑ひながら、喉を締めた手を寬めると、グタリと倒れた富麿は、心氣が亂れたか前後



も見ぬ氣に、強ひて起ちかけては蹌踉として、漸とそこの電信柱をつかまへる、此時遙かの彼方に角燈の火が見えて、人の駈付ける氣合である、川に陷つた車夫が巡査に訴へたのだらう。

『調べられては』と春次は當惑する、車夫は。

『大丈夫だ、早く乘りたまへ、速力をかけて遣る』

## （五十三）

春次は氣もハラ〳〵として此の大格鬪の始終を見て居たが、敵が悉く怪車夫のために打ち懲されたのでホッと安堵の胸を撫でたが、矢の如く近寄る角燈の光りに、又新らしき危難を感じて心も身に添はぬのであつた。

が、怪車夫は更に慄か無い。

『オイ君、早く乘らないか』

氣丈の女ながら、最前からの騷動に波打つ胸に心も亂れたる春次を催がしながら隆々として筋

肉善く發達したる腕を延べ女を助けて俥に乘せると猛然として梶棒を引上げた『植物園の近所だヂ』と聞く間も猶豫ならずと許り、彼の所謂速力をかけて韋駄天の如く驅け出したのである春次は怪車夫の唯人ならざるを知つた許りで無く、危い所を助けられた大恩人と思ふに連れて今飛ぶが如く驅出した車夫を世にも珍らしい豪い人と感するのであつた。

『植物園の近所ですよ、本當に濟みませんヂ』

と叮嚀に心からの感謝を語る。

『我輩が快速力をかけたら大丈夫だ、大船に乘つた氣で居るが善い、顏の傷は何うだい』

『大丈夫です、少しの間ですから此位で辛抱しますわ』

『ちや、蹴込みに足を張つて五体を後へ延して居て呉んナ、何うも女と云ふ奴は乘せ心地の惡い奴だ、藝妓は殊に善く無い』

痛快竹を割つた樣の其の性質を語つて、走る足には益快速力が加はつて來る。

跡には富麿が電信柱に身を倚せて、僅に仆るゝを支へては居るものゝ、怪車夫の怪術に締められた咽喉元の苦しさ、胸塞がつて目も眩む許りであるが、車夫が春次を乘せて驅け出すを見て『己れッ』と後を追はんとしたが、先きの格鬪に投げ付けられて五體の節々碎かれたらんが如き痛みを覺えて動きもならず、無念の齒を噛み締め、一歩故くとよろ〳〵として電信柱の下に仆れたのである、遥に見えたる角燈の光りに漸く近づいて、光りの主が角燈を翳しながら四邊を物色して居ると、其所に仆れた男の呻き聲に驚いて、襟に手を掛け引起しながら。



『コラ、何うした、起んか』

『何うも手厳しくやられたので、さう手輕には起きられ無い』

## （五十四）

明暗みの巷を飛ぶが如くに走つた春次の俥は、小石川植物園側の植辰の門前へ轅棒を下す、春次は危難を救ふて呉れた恩人の車夫を其儘歸してはならぬと。

『あの一寸待つて下さい』

と人々を起しにかゝる、怪車夫は汗を拭いて了ふと。

『賃錢は二十錢ちや、早くして呉れたまへ、今から寢るんぢやから』

と例の書生口調の腰もなく云ひ放つ、辰五郎夫婦も靜也も起きて來た、春次は今夜の顚末を殘

らず話すと、車夫に禮を爲なければ可けぬと、靜也は門口まで出た。

『車夫さん、何うも有難う、飛んだ災難の所を助けて貰つたさうぢや、サアこちらへ入つて下さい』

『入らなくても此處で賃錢を拂つて呉れたまへ』

車夫らしくない詞に、靜也はナル程怪しい車夫だと其顏を覗いたが、引冠つた帽子で能く見ぬ、腕を組んで突立つた姿は、肩が聳ねて逞しい若者である。

『賃錢？、それは無論進げる、がそれよりも一寸謝意が表したいから』

『僕ア禮を受ける覺ねは無い、正當の賃錢さへ貰へば可い、早くして呉れたまへ』

春次は紙に包んだものを持つて出る。

『これ失禮だけど、手拭でも買つて下さいな、そしてこれ俥賃だから』

と手に渡さうとする、車夫は首を振つた。

『手拭は買はいでも有つて居る、乘せた客を保護するのは車夫當然の義務だ、禮を貰ふ覺ねはない、其賃錢の方だけ受取らう』

『はゝはゝさう堅く云はれちやア困る、眞の微意だから納めて呉れたまへ』



『そんな事を云はないで、納めて下さいよ』

と春次は近づいて、強て渡さうとすると。

『失敬な事をするな、僕ア芸妓から物を貰ふやうな人間ぢやないぞ』

靜也は春次と顏を見合はしたが。

『イヤそれは俺から呈するのぢや、失禮だけれど受取つて呉れたまへ、恩に酬いないと心に濟まない』

『恩を賣つて禮を受ける爲に、僕が助けたと思ふのか、それなら賃錢も要らない』

云ひ放つて車夫は轅棒を上げる、靜也は急遽に引止めて。

『僕は淺岡靜也といふ商工ぢやが、車夫に隱れて居る君の尊名を聞かせて呉れたまへ』

『エ淺岡？』

車夫は物に驚いたやうに、顏を隱した帽子の椽を、グッと上げて靜也を見る、靜也も覗く。

『オ、淺岡だ、オイ淺岡ッ、君ア何故繪を描かぬのだ』

帽子を除つた車夫の顏は、赤銅色に日に焼けて、塵埃に汚れては居るけれど、京都で學生時代に、久留島常雄と三人で、自炊の三人組と云はれた一人、瀧一夫が變つた姿ではないか。

『ヤッ君は濡ちやないか』
と靜也は呆れた眼を瞬る。

## （（五十五））

靜也は餘りの意外の事に會ふて暫時は無言の儘夫妻の濡一夫の顏を凝視つて居る。
京都の學校に居た時代は、久留島常雄と靜也とこの一夫の三人は、同胞と云はれた位の親しい仲であつたが、學問も智慧も他に秀でた一夫は、生來物に構はぬ磊落な氣風の爲に、規則づくめで錆型にはまつた人物を養成ふとする敎師とよく衝突を起し、建築科を卒業といふ間際に、勝手に廢めて了つて行衞が知れなくなつた。
其時靜也等に殘した手紙には『班超嘗生より起り筆を投じて萬里外に封侯の志あり』といふ、班超傳の文句が記してあつた。
日露戰爭の最中であつたら戰地へでも行つたのではあるまいかと靜也と常雄は其の消息を求めるに苦心したが何しても知れなかつたのである、その一夫が車夫に爲つて居やうとは眼の前に見てゐ夢の樣で、靜也は不審の眉を顰めたが一向無頓着らしい、一夫は昔に變らぬ磊落な高聲で。
『僕の車夫に驚いた樣だな、班超一夫となつて萬里侯は見合せぢや、はツはツはゝゝゝ』
と笑つたが。
『これが君の宅かい、一寸入らうか、オイ淺岡君の宅は藝妓屋ぢやアあるまいな』
靜也と春次は顏を見合して笑つた、法被姿の一夫がズン〳〵座敷へ上るので、植辰夫婦は吃驚する、一夫は平氣で大胡坐になると。
『オイ淺岡君、君は何故繪を描ぬのぢや、何時になつたら大作を示す心算で居るのだ、それを聞かう、それを聞かせて呉れ、それを聞かぬと今夜の邂逅が無意味になるぞ』
突然に斯な問を發した一夫は、靜也の後に座つた春次の艷な姿をじろ〳〵見る。
春次は今更らしう恥羞むやうにする、一夫は春次の姿をジッと見ると。
『オイ淺岡君、この藝妓は君とは何等か關係があるのか』
淺岡はギクリと詰つた箸へを咳に紛らし、ハラ〳〵しながら。
『ウム、夫りや何んだ、一夫君……マアその詮議立てより、君の今日までの經歷を聞かうぢや

ないか』

『ウム、云つても好い、が僕は今夜ほど妙な事はないと思ふんだ』

と概略を語つて。

『元來僕が車夫となつた動機……と云ふのは、マア後で話すとして、僕の伸は藝妓と紳士とは乘せない主義で遣つて居るんだ』

『フーム、夫りや何故だ』

『一言にして盡せば權勢に諛びる……夫れから齒すべからざる賤業婦とは先天的に僕の虫が好かぬのだ』

と一夫は肱を張つて、春次を睥視したが。

『併しその一貫した主義も、今夜この藝妓のために破られて了つた、が是れも所謂義を見てせざるは勇なきなり……て云ふ陳腐な比喩に歸するのだ、はゝゝは……』

大笑一番、重ねて。

『しかし淺岡、思ひ出したが、この女は新橋の春次と云ふんだつてね、先刻亂暴者が云つたのを、チラと耳に挾んだ、春次て藝妓は僕も名を聞いて居るが、隨分と變り物だつてね、俠骨を以て知られて居る女ださうだね』

一夫は今更のやう春次の顏を無遠慮に見る、春次は耳邊を赤くして差し俯向く。

## 《五十六》

春次は一々辛い一夫の詞を默つて聞いて居たが、茶を持つて行くと低う頭を下げて。

『妾に察しの通り新橋の春次といふ藝妓なんです、今夜はそんなに身分のわた方とも存じないで卑しい稼業の妾が、伸に乘せて頂いた上、危い所を助けて下さいまして、勿體ないとも何ともに詫の致し樣はございません、切望御赦しなすツて下さいまし』

『春次々々ツて先刻の奴が云つてたが、君が新橋の春次か、新聞で能く名妓だとか變り者だとか書いてる春次だな』

一夫は無遠慮に大きな聲。

『ほゝゝゝ嘘なんですよ、そんな名のある女ぢやございません』

『左樣だらう、醜業を本職とする當世の藝妓社會に名妓なぞがあるべきでないと思つて居たが

果して左様ぢやつた、オイ淺岡、貴様は京都に居る時、女性には懲りた筈ぢや、髪の長い化物に欺された紀念品を有つて居たが、あの娘を何うした。藝妓にでも叩き賣つたか』

いかに友を思ふ眞情からとは云へ、聞いて居られぬ罵倒と、春次は何か言はうとする、靜也は目顏でそれを制める。

『十年振りに遇つて俺は喧嘩をするんぢやない、貴様達の醜態が見られぬから言ふのだ、淺岡ッ、貴様は今の畫界の有様を知らぬのか、折角東洋に新しい芽を吹いた洋畫は踏潰されかけて居るぞ、貴様達の努力が足らんからぢや、展覽會を見い、日本畫ばかりが巾を利かす、實際大作も出る、油繪と來ちやアに話にならぬぢやないか、新歸朝と威張つた奴が、一枚の作も得示さないで、喰ふに困つて水彩畫早學びの看板を露路に掲ける慘狀ぢや、無盡藏見た樣な會を始めて、大道の砂書屋と間違ひ相な惡戲畫をする奴ア澤山居るが、一人だッて潰れかゝつた斯道の爲に眞面目に闘ふ奴は居やアしない、何時迄經つても凡作ばかりだから世間の輕蔑も詮術が無い、此處で貴様達が起たないで何うするか、卒業當時の處女作にあれ程名を轟かした貴様が、其後杳として聞ねないのは不思儀だと思つて居たら、この醜態ぢやア繪は描けまい、醜業婦に惑溺する美術家、ア、貴様だけは見損つた』



炎を吹くかこばかり熱罵を極めた一夫は衝と起上つて。

『淺岡ッ、貴様ア繪は廢めて女郎屋の亭主にでもなれい、噂も娘も藝妓を稼げア恰度可いぞ、はツはツはゝゝゝ』

言ひ捨てゝ走らうとする。

『瀧さん一寸た待ちなすツて』

と春次は聲を掛ける。

『俺アこんな不潔な處に居るのは厭だ、醜業婦の貴様に用事は無い』

『妾醜業婦ぢやありません、藝を賣る藝妓です』

『藝を賣る？口巾ッたい事を云ふな、貴様の肉は天才の人淺岡靜也を殺したのぢや、大美術家の生命を奪ふたのぢや、貴様の樣な奴が附纏ふて居ちやア厄目だッ』

『瀧さん、そ、それは貴郎の誤解です、貴郎は一圖に卑しい勤めの藝妓だから、皆がそんな者と思つてらつしやるのです、妾醜業婦と云はれる覺には決してありません、淺岡さんを殺す女と仰有るのは、それは貴郎……それは餘りです……それは餘り』

春次は口惜しさが胸に込上げて、涙の止處がない。

「オイ淺岡ならそれで怯むだらうが俺には無益だぞ、其涙が眞の涙なら何故淺岡の生命に泯ぬのぢや、はツはツはゝゝそんな事を云つたツて懲妓の貴樣にア解るまい、淺岡ツ、壯健で暮せツて別れるのぢやが、貴樣アモウ死んで居る、士にでも灰にでも勝手になれ」

さつさと出て行つたと思ふと、空車の音が高く響く。

## （五十七）

靜也と春次の兩人を、口を極めて罵つた瀧一夫は、止むるも諾かず飄然と去つて了つた、靜也はホツと吐息を漏して、腕を組んだ儘眼を閉る。

絶て久しい親友に邂逅ひながら、温かい談話も交さず、我の腑甲斐なさを熱罵して去つた一夫の意中は何うであらう、友思ひの一途から眞情を吐露した忠告は決して仇にはならぬ、笑つて別れたよりも嬉しいのであるが、醜業婦に惑溺して事業を廢したと云はれては實に殘念である自分は繪筆の持てぬ程の腦病に罹つたのは、十年の憤恨懣して散らぬ藏間富子の所爲である、欺かれた戀の記念文子といふ者がある爲に、長い年月僅の一刻も苦痛から脫した事は無い、其



結果病の人に爲つて既に命も奪はれかけたのであるが、春次の美くしい同情で、落魄の父子は今日の靜謐を保つたのである、同情は何時か戀に落ちて秘密のある仲とはなつたが決して女の色に溺れて事業を抛棄つたのでは無い、春次の盡力で文子の手枷足枷が無くなつたら、復活の勢ひ猛に精神を傾倒で大作を試み、負債を整理した上は亡師の希望を果すべく海の外への繪修行に出掛ける考へも堅く有つて居る……併し世間は……一夫の罵つた如く、我を醜業婦に惑溺する美術家と思つて居るだらう、品性の高潔な、斯る社會に其較ひはあるまいと我は信する春次ではあるが、肉を竇る女郎と一ツに云はるゝ藝妓勤めの身である、友人や世間の攻撃に理由のない事は無い、情と理と、この兩ツの鬪ひに我は何時も情の味方をする、富子から戀を運ばれた時も左樣である、欺かれて文子を受取つた時もそれである、懊惱の十年も悉く情に支配されたのである。

春次と今の仲になつたのも情に任せたのである、ア、我は畢竟情の人か、情の人？、オ、我生命の繪の筆も、情に動き情に從ふ、情の外に我は無い、我は情の懷兒である、無情の世間は春次を醜業婦と罵るとも、我は春次を天女と信するに差支はない……が我情の軍は一度敗れて殆ど死地に陷つた我である、春次との戀が末永く遂げらるゝであらうか、名を遂げ戀を遂げる事

が空想に止まつたならば實に我は世間の云ふ如く醜業婦に惑溺の汚名に甘んじ、貴樣アモウ死んで居ると罵つた一夫の前に屈辱を堪へねばならぬ美の神に捧げる大作と、命と契つた戀愛と兩ッながら成就させねば我淺岡靜也は亡びるのである。

癒切らぬ腦病は、こんなに深く物を思ふと何時もキリ〳〵と刺痛を起して來る、靜也は頭を抱へる樣にして柱に倚る。

次の室では靜也に隱れて泣いて泣いて居た春次が、文子の髮を結んで遣る、鏡に映る涙の顏を怪しまれまいと隱す樣にして。

藝妓を醜業婦と罵つた一夫の詞を、春次は決して無理とは思はぬのである、今の世に藝妓を眞面目な藝の人と心得る野暮な人は居るまい、自分ばかりが眞の藝の女と誇つても、世間はそれを信じては呉れぬ、總括に賣色の女と罵しられるのは是非もない、一部の女學生に不品行があれば、海老茶袴が墮落女の代名詞になるのである、眞面目な敎育界でさへそれであるから、もと〳〵人の弱點を曝け出した放蕩淫樂の花柳社會に、偶に一人二人の高潔な女性が居たッて誰も信用して感心する者は無い、それは詮術がないが、春次の泣く無念は――貴樣が天才の大美術家淺岡靜也の生命を奪ふたのぢや――と罵つた、一夫の一言が何うも堪へられぬのである、



今一度世間に名を轟かせたいが一心で、今日までに盡した春次の苦勞は普通大抵ではない、それを誰に知つて呉れでもないが、盡す眞實が反つて仇となつて、自分の爲に靜也が攻擊さるゝのを見ては、彼の心臟は裂けるやうな苦痛を覺ゑるのである。

種々に思ひ惱んだ末は、自分が藝妓でさへなかつたならばといふ悲しい事に落ちて、運命と世間が恨めしく、又も不覺の涙が涌く。

『姉さん泣くの』

と文子に聲を掛けられて、ハッとして笑に紛らさうとすると、富麿に負はされた横鬢の傷が急に痛み出す。

## （五十八）

顏の負傷のために、春次はこの二三日招聘を謝つて居たが、或晩近處の待合から强て遇ひたいから其儘で一寸との事である、自分に用事のある客と聞いては懸念りにもなるので、晴れぬ心を化粧に隱して、今晩はと現はれる。

客は一人で春次の見知らぬ男である、快濶に盃を交換して、面白い雜談に時を過したが、醉が大分廻つたらしく、コロリと横になると。

『オイこれから俺が藝妓を口説くんだ、お前達は粹を利かして消ねて呉れ』

と女中を遠ざける。

『ほゝほゝサア口説かれませう、口説稅に一ツ頂戴』

と春次は馴れたものである、盃を乾して客に献す。

『春次さん、君の顏は何うしたんだ、美人の顏に生傷は凄いね、痴話なら爪で引掻く位に願ひたいですよ』

『これ、ほゝほゝゝゝ口説損なつたお方から頂いたのですよ、藝妓稼業も命懸けでせう』

と何氣なう笑つたが、憎い富麗の暴行を傷につけては思ひ出す。

『損害賠償を訴ふべき價値はあるね、俺が後援をして、振られた奴の處へ押掛けやうか、はツはツはゝゝ』

戲談を言ひながら客は眞面目になつて起直ると。

『春次さん、君アこの新橋で變り者の名を取つてるさうだな』



と突然に妙な事を問ふ。

『ほゝほゝゝ變な名取ね、何も彼も拙いのが他妓と變つてるといふのですよ』

『イヤ隱さんでも可い、噂を聞いて感心したから、國への家苞に見に來たのだ』

『ほゝほ冷かしちや厭ですよ』

『冷かさずに買つて行かうか』

『た廉く負けて置きませうね』

『貿約濟と云ふぢやないか』

『た茶人が少ないのですとさ』

『茶人よりは藝伯は何うだね』

春次はハツとして顏を染める。

『巨彈命中の形だな、顏を赤くしたのは可かつた』

『顏中は負傷だらけね』

とモウ春次は度胸を極る。

『何うだ當つたらう』

『れ見事、今度は妾當て〻見せますよ』

『何を當てる』

『貴郎のれ名前は久留島常雄』

『アッ遣られたッ、知つて居るのか』

『當工の方に聞きましたッ』

『ホイ〳〵、れ瞌まじい事だ』

春次は、常雄の話を靜也から聞いて居たのである、一度遇ふて見ると云つてたから聘ぶかも知れぬ、遊興んだ事もある男で、俠氣に富んだ頼もしい親友だから、隔意なく打明けて可いとの事であつた、最初はそれと知らなんだが、自分の秘密を握つて居るのは的きり其人であらうと無遠慮に名を指したのが果して當つたのである、嬉しい人の友と聞いては、口を極めて我を罵しつた瀧一夫といふ人でも決して他人とは思はぬに、これは花柳の事情も解つた粋も見ゐ、俠氣な頼みになる人と聞いては、苦勞の餘る今の身に、大きな咏方が出來た樣な氣がして、春次の心は歡喜に勇んだ。

『久留島様でせう、貴郎能く聘んで下すッたのね、妾れ目に掛りたかつたのです、オ、嬉しい』



と盃を持つて來る、何か云掛けた常雄は矢庭に喉を押へられたやうな氣がして暫時默つて居たが。

『春次さん、僕に遇ふて嬉しいかね……實は徐り嬉しがられに來たのぢやアない』

## 《五十九》

嬉しがられに來たのぢやないと云つて、常雄は今までの酔態は何處へやら、改まつて春次に向ひ。

『春次さん、僕と淺岡とは單に同窓の友といふのみぢやない、兄弟同樣の間で僕が淺岡を思ふ情は、決してれ前に負けぬ積りぢや、それで、彼の身の上に就て實はれ前に相談があつて來たのだが其前に一ツ聞いて置たい事がある』

春次の胸は動悸に騒ぐ、常雄は聲を低うして。

『他事ではない、れ前が淺岡に捧げて居る戀は眞實であるか虚僞であるか、それが先づ確めたい』

隨分亂暴な質問である、春次は何と答へるか。

『ほゝほゝゝゝ妾と淺岡さんの間が實か虚偽かと仰有るの、久留島さん、妾虚偽とも眞實とも何とも思つてやしないのです』

『何とも思はぬとは』

『そんな事なぞ思ふ隙がないんですもの』

『忘れねばこそ思ひ出さすか、フム、左樣だらう、男嫌ひで變り者の評判を取つたと云ふ前の戀ぢや、それ位の熱度はあるだらう、其の熱が頼もしい、僕は其熱を味方に慇々頼みに來たのだ、春次さん、た前それ程に淺岡を思ふのなら、淺岡と兄弟同樣なこの久留島も信じて呉れるだらうな』

『始めてた目にかゝつて斯な事をた話するのですもの……』

『信じて呉れるね、有難い、僕のた頼みといふのは、た前あの淺岡と』

春次は後の詞を手で押へる樣にして。

『一寸、久留島さん一寸待つて下さい、そのた頼みの前に、妾も貴郎に聞いて置きたい事があるのよ』



『双方から念の押合ひだな、よろしい何が聞きたいね』

『卑しい藝妓風情にた頼みとあれア、何でも承諾ますよ、けども億た一ツ諾かれない事がありますから、それだけ前もつてね』

『諾かれない事が億た一ツ？それア何だね』

『邪推でしたら笑つて下さいよ、貴郎のた頼みが、妾に淺岡さんと切れて呉れと仰有るなら、それが、億た一ツ諾かれない事よ』

常雄は『サア了つた』と心の中に叫んだ、が顔色には現はさぬ樣に力めて平氣で。

『淺岡と切れて呉れ？、縁切話に僕ア來たのぢやア無いさ、雖然相談の結果は或は其處に歸するかも知れない』

と窮した返詞をする。

『厭です、妾御相談を受けて切れる樣なら今迄に他人に爲つて居るのです、厭です、厭です妾そんな御相談なら』

と一生懸命に突掛けて爭ひかけたが、フト始めて遇つたばかりの常雄を、餘り遠慮ない振舞と心付くと。

『ほゝほゝゝ貴郎勘忍遊ばせ、妾ツイ……』

と眞赤になつて俯向く、常雄は、斯ういふ社會の戀ほど一層深いといふのは事實だと思つて、哀れを催して凝と美しい髮を眺めて居たが、弱いと我心を叱つて。

『春次さん、れ前が淺岡に運ぶ戀といふのは虛僞だな』

## （（六十））

『虛僞の戀ですツて、ほゝほゝゝ、貴郎は御自分ばかり信じて呉れと仰有つて妾の事は信用して下さらないの、隨分だわね』

淺岡に運ぶ戀を虛僞と云はれて、勝氣の春次はムツとしたが、何か仔細ありげな常雄の樣子になる可く圭角を立てぬ樣に相手になつて居る。

『變り者と聞いたが、れ前も矢張普通の女で普通の藝妓ぢや、淺岡に對する戀は確かに虛僞と見た、オイ春次さん、れ前は戀といふもの〻意義を知つて居るかね』

『……』



『戀は愛だらう、戀愛といふ奴ア喰付て居て離れない、愛情があつて始めて戀、戀のある所には必ず愛があるのだ、それにれ前は淺岡に眞實の戀を捧げて居るといふが、其戀には愛が無いぢやないか、毫も愛情を認めんぢやないか、愛の無い戀を虛僞と云つたのは間違ぢやなからう』

常雄は捲し掛けて春次を詰つた。

『左樣仰有れば妾も眞面目よ、久留島さんを愛して居ないとた解りになるのです』

『愛しては居るだらうさ、雖然其愛といふ奴ア、可愛らしい方ねゝ位の處だらう、戀の字の肩書を附けるには勿體ないよ』

『可笑しな事を仰有るのね、こんな事は隱さなけア勤まらぬ稼業で居ながら、貴方を賴もしい方とれ見掛け申して明けッ放にれ話して居るぢやありませんか、切望れ察し下さいよ、さ、妾何故これで淺岡さんを愛して居ない事になるのです、それを聞かせて下さい、何故虛僞の戀と仰有るのです』

『ヨシ聞かせて上げやう、今も云つた通り、ナル程れ前ア淺岡を愛して居るだらうが、其愛は